

障害のある人の きょうだいへの調査 報告書

障害者の家族支援を目指すための調査研究

—特に支援体制が遅れているきょうだいへの支援を視野に入れて—

目 次

調査概要・基本属性	2
序章 障害のある人のきょうだいの実態調査 ー調査の目的と調査結果のポイントー	8
第1部 基礎データ（アンケート調査）および分析編	11
第1章 子ども時代の家庭での経験（家族機能）	12
第2章 子ども時代の家庭での経験と自分の様子との関係性	17
第1節 アダルト・チルドレン	18
第2節 困難な状況にあるにも関わらず適応する力と自尊心との関係性	24
第3節 日常の満足度	30
第3章 障害のある兄弟姉妹がいることの影響	31
第1節 悩んだこと、良かったこと	32
第2節 人生に影響があったと思うこと	34
第3節 友だちとの関係	38
第4節 将来の世話について	40
第5節 障害のある兄弟姉妹が家族にすること	45
＜学習会報告（1）＞「障害者家族について」 日本福祉大学准教授 末盛 慶	48
第2部 障害者のいない家族との比較編	53
＜学習会報告（2）＞「不登校児やひきこもりが家族」 NPO法人フリースペースたまりば理事長 西野博之	54
＜学習会報告（3）＞「依存症者のいる家族」 ヒーリング&リカバリー インスティテュート所長 水澤都加佐	58
課題と方向性	66
資料編	69
調査票見本	70
基礎集計表	80
研究会委員（調査・分析メンバー）	98
執筆担当	

1. 調査目的

障害のある子どもがいる家族が感じる精神的負担が少しでも軽減されることを目的に、直面するさまざまな負担について現状を調査し、今後の家族への支援のあり方を検討する。とりわけ、支援対象として考慮されることの薄い、障害のある人の兄弟姉妹（以下きょうだい^{※注1}）について、その現状と課題を探ることを目的とする。

- ① 障害児のいる家族の機能不全の状況を知る
- ② ①の環境で育ったきょうだいの状況と影響を知る
- ③ 上記2つの事柄について、きょうだいの精神的発達との相互関係を分析し、支援の方策を探る

2. 調査仮説

- ① 家族の中に障害児が生まれることは、家族が機能不全^{※注2}となるさまざまな原因のひとつと考えられる。
- ② 機能不全家族で育ったきょうだいは、精神的にネガティブな影響を受けやすい。
- ③ よって、精神的にネガティブな影響がおこる以前の児童（小学生まで）に、きょうだいへの何らかのサポートが必要と考えられ、ひいては、機能不全家族への支援が必要となる。

3. 実施した調査について

名称	アンケート調査
方法	調査票配布
時期	2007年12月～2008年3月
対象	18歳以上の障害のある人のきょうだい男女（学生も含む）
サンプル数	424名（男性146名、女性249名、不明3名）
調査項目	① 小学生の時の家族の状況 ② ①による精神的な影響 ③ 障害のある兄弟姉妹がいることでうける影響 ④ 社会への要望

4. 調査実施における主な協力団体

（社福）東京都知的障害者育成会、全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会、
（社福）ひびき福祉会、（社福）敬山会、（社福）長尾福祉会、（社福）武蔵野、
（社福）いすず会、他

※注1 男女の組み合わせにより、兄弟、姉妹などの表記があるため、この報告書では「きょうだい」として統一し標記している。

※注2 「機能不全」とは機能が十分にはたせていないということで、家族を構成している一人ひとりが必要としていることに応じられない家族を「機能不全家族」という。（第2部「依存症者のいる家族」水澤都加佐氏、学習会記録より引用）

基本属性

A. 回答者本人の属性

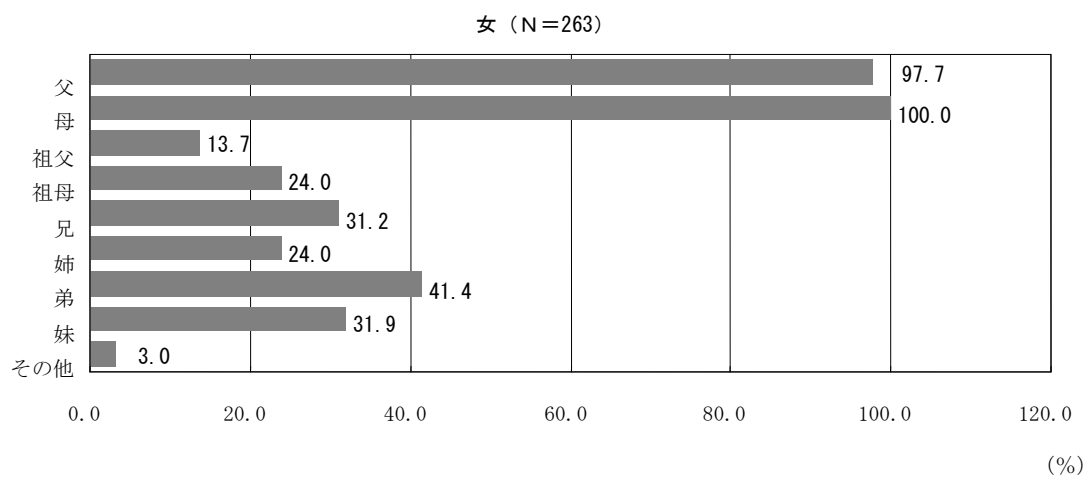
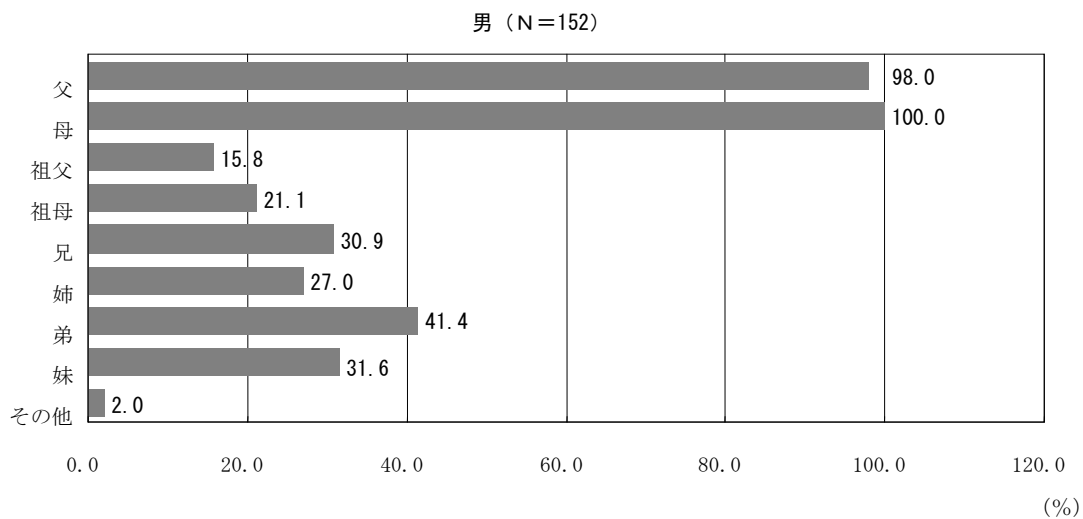
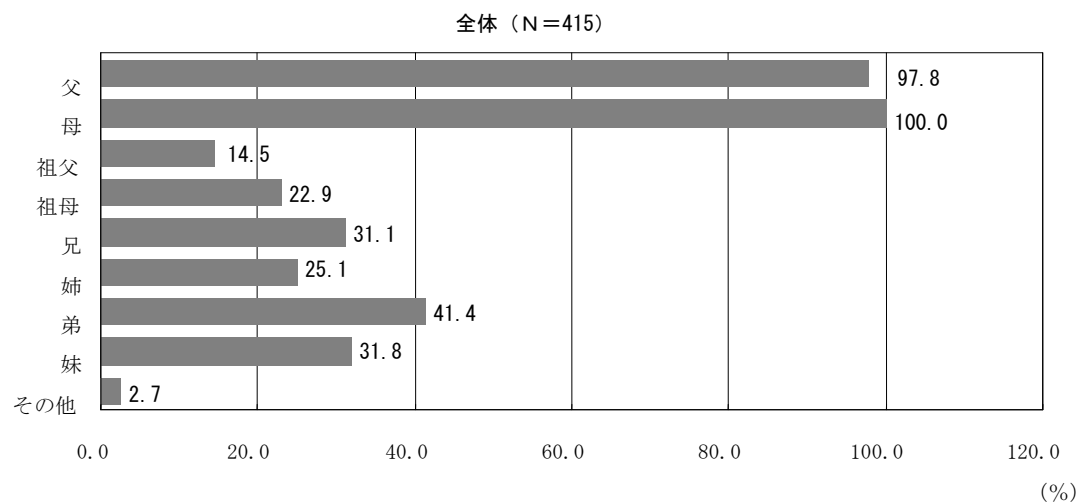
図表 A-1 性別

	全 体	男	女	不明
件 数	424	154	267	3
%	100.0	36.3	63.0	0.7

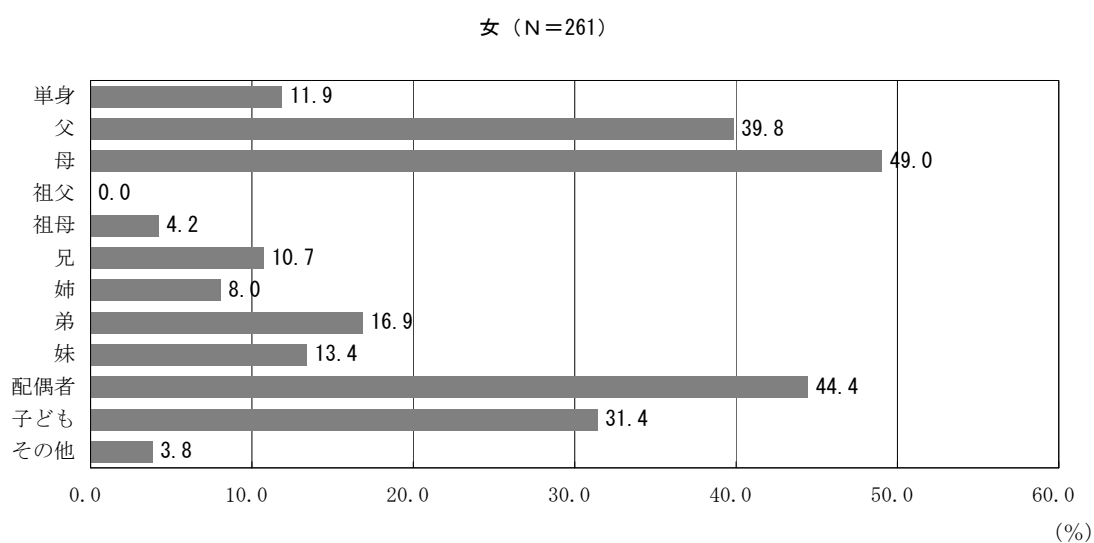
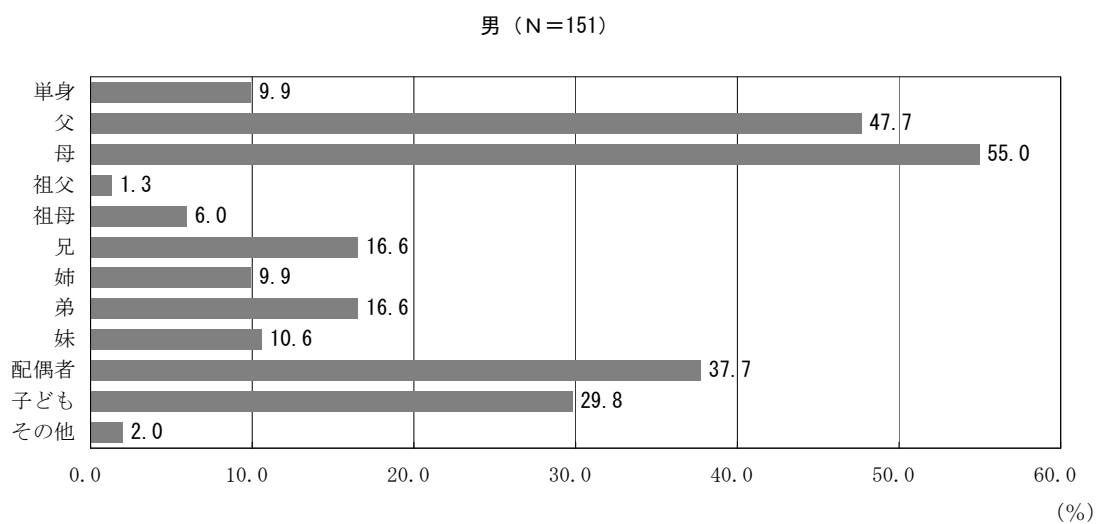
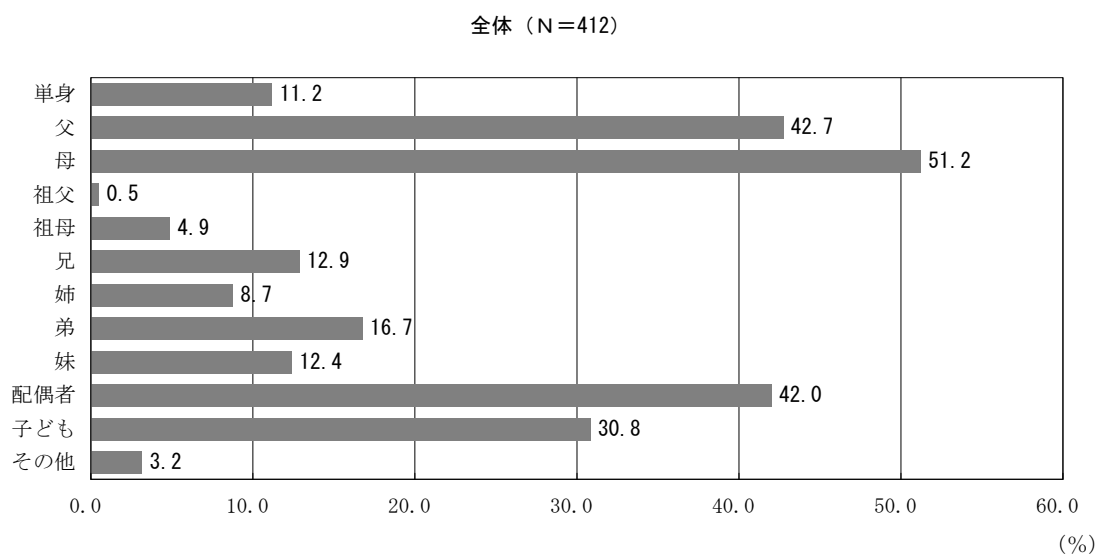
図表 A-2 年代（年齢）

	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	不明
件数	10	128	118	68	42	28	4
%	2.6	33.5	29.2	16.7	10.1	6.6	1.2

図表 A-3-1 小学生の頃の家族構成



図表 A-3-2 現在の家族構成



図表 A-4-1 小学生の頃の居住地

地域区分	人数	%
北海道	3	0.7
東北	14	3.2
関東	292	67.4
中部	41	9.5
近畿	52	12.0
中国	4	0.9
四国	3	0.7
九州	8	1.8
海外	1	0.2
不明	15	3.5
総計	433	100.0

図表 A-4-2 現在の居住地

地域区分	人数	%
北海道	3	0.7
東北	12	2.8
関東	297	70.0
中部	32	7.5
近畿	49	11.6
中国	6	1.4
四国	4	0.9
九州	5	1.2
海外	1	0.2
不明	15	3.5
総計	424	100.0

注1)それぞれの地域区分と都道府県の関係は次の通りである。

北海道:北海道

東北:青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県

関東:埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県、茨城県、栃木県、群馬県

中部:新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県、岐阜県、静岡県、愛知県、三重県

近畿:滋賀県、奈良県、和歌山県、京都府、大阪府、兵庫県

中国:鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県

四国:徳島県、香川県、愛媛県、高知県

九州:福岡県、佐賀県、長崎県、大分県、熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県

海外:海外

図表 A-5 医療、教育、福祉関係の仕事（もくしは専攻）

	全 体	はい	いいえ	不明
件 数	424	145	269	10
%	100.0	34.2	63.4	2.4

図表 A-5-1 医療、教育、福祉関係の仕事（もくしは専攻）の内容

	内 訳	件数	%
1	医療系福祉系専攻	17	4.01
2	福祉関係	66	15.57
3	医療関係	23	5.42
4	教育関係	22	5.19
	計	128	30.19

注1) %は総数 424 を母数として計算したもの

注2) 福祉関係者 66 名は福祉施設従事者が 34 名の半数以上を占める

図表 A-6 本人の立場（障害のある兄弟姉妹からみて）

	全 体	兄	姉	弟	妹	不明
件 数	424	85	162	66	102	9
%	100.0	20.0	38.2	15.6	24.1	2.1

B. 回答者の障害のある兄弟姉妹の属性

図表 B-7 立場（回答者からみて）

	全 体	兄	姉	弟	妹	不明
件 数	424	104	64	145	102	9
%	100.0	24.5	15.1	34.2	24.1	2.1

図表 B-8 年齢差

	全 体	1 歳	2 歳	3 歳	4 歳	5 歳	6 歳以上	不明
件 数	424	38	84	101	56	38	88	19
%	100.0	9.0	19.8	23.8	13.2	9.0	20.8	4.5

図表 B-9 障害種別

	全 体	知的障害	肢体不自由	聴覚障害	視覚障害	精神障害	発達障害	難病	わからない	その他	不明
件 数	424	370	63	7	13	17	27	5	6	6	15
%	100	87.3	14.9	1.7	3.1	4.0	6.4	1.2	1.4	1.4	3.5

尚、249 名が障害名を別途記入してくれた

図表 B-10 障害が発生した時期

	全 体	先天性	出産時	中途	わからない	不明
件 数	424	191	67	78	69	19
%	100.0	45.0	15.8	18.4	16.3	4.5

図表 B-11 現在の生活環境（場所）

	全 体	独居	施設入所	グループホーム	親と同居	自分と同居	他の兄弟と同居	その他	不明
件 数	424	10	81	33	262	149	16	11	14
%	100.0	2.4	19.1	7.8	61.8	35.1	3.8	2.6	3.3

注 1) その他には、結婚して配偶者との同居、病院、祖父母との同居など

「障害のある人のきょうだいの実態調査」 ー調査の目的と調査結果のポイントー

伊藤逞子

昨年度まで、私たちは、障害児者の家族支援、中でも支援体制が遅れていると思われるきょうだいへの支援の視点から聞き取り調査を行い、問題の抽出を図ってきた。その過程で、障害のある人と、その家族＝特にきょうだい＝の抱える問題の幾つかがあぶりだされた。同時に、障害のある人のきょうだいが抱える課題は決して特異なことばかりではなく、現代社会の抱える様々な歪みや捻れの中で困難を示す人々と、共通する問題が多いという状況も見えてきた。つまり、『障害のある家族がいる』ということは様々な困難が発生する時のリスクファクターの一つと考えることができ、私たちの考える支援は、障害のある人の家族（きょうだい）への支援という限られた範囲にとどまらず、広く社会全体に必要な支援を探ることにつながると思われた。支援体制も、それぞれ別々に考えるより、その共通する問題に対しての社会全体としての支援を考えていくことができるであろう。

きょうだいの抱える課題と求める支援は、その年代によって様々であることは平成18年度の調査報告書で述べたが、アンケートの記述部分での回答を見ると、小学生のときに受けた負の体験や感情、不安全感などが様々な形で書かれており、それに対応する支援が求められていると考えた。それを重要なことと捉え、今回は『小学校時代』に焦点を当てて考察を試みた。子どもの頃に十分な支援を得て、豊かに育ってこそ、様々な困難と向き合って解決の道を探る

ための土台が出来るのではないかと考えるからである。これは、障害の有無に関わらず、子ども時代に大事に育てられることの大切さを、改めて確認することでもあった。

今年度の研究仮説のひとつが、障害のある人のいる家庭は機能不全化しやすいのではないか、きょうだいの抱える困難さは、家族がきょうだいのニーズに対応する力を持ってないこと＝家族の機能不全化＝によって生じるのではないか、ということである。

家族の機能不全は障害のある人のいる家族全てに見られるわけではない。また、学習会報告にあるように、不登校児やひきこもりの家族がいる家庭や、依存症の家族がいる家庭では家族の機能不全が見られる場合が多いとの指摘もある。日本では何らかの機能不全が見られる家族が多いとも言える、と家族機能を研究している専門家は話されている。ここでも、家族機能に関わる問題は『障害のある人のいる家庭』と限定したことなく広く社会全体で考える問題であることが分かる。

さらに、家族の機能不全化によってきょうだいはアダルト・チルドレンとしての特徴を示すのではないかと仮説を実証することにした。そこから、きょうだいの抱える『生きにくさ』が見えてくるのではないかと、それらを実証することの中から、支援対策として必要なものが見えてくるのではないかと考えたからだ。

家族の機能不全化を防ぐための方策を考えることが、きょうだいの抱える『生きにくさ』

への支援となり、きょうだいが生きやすい社会、全ての人にとって生きやすい社会を目指すことにつながるだろう。

また、今回の調査で、きょうだい特に姉は、子どもの時から『自分は障害のある兄弟姉妹の面倒をみるのだ』と考える傾向が強いことも浮き彫りにされた。さらに、障害のあるなしとは別に、「きょうだいなのだから一番の理解者でありたい」と思っているきょうだいが多いのである。そして、記述式の質問にたいしては、様々な場面で、将来への不安が実に多く書かれている。これは、我々の社会が、障害者とその家族にとって安心できる将来を思い描くことの、しにくい社会であることを示しているといえよう。

同時に、障害のある兄弟姉妹にとって、最後まで家族であることの可能性が最も大きいのは、きょうだいであるという事実がある。家族が家族らしさを保つためには、やはりきょうだいの抱える問題をきちんと捉えて支援するという視点に立つ必要がある。

障害のある人が自立生活をしていくための手段についての知識があるかどうかは、将来への不安と関係がある。今回の調査結果に見られる、医療・教育・福祉関係の仕事に関わっている人と、そうでない人との間に見られる知識の差は、一般的には必要な情報が充分に行き渡らないという、情報伝達体制の不備を示すものと考えられる。そのことがきょうだいにとって最も重要な『障害のある兄弟姉妹と共に生

きる将来』を考える時の見通しに、暗い影を落としているとすれば、我々がすべきことのひとつが見えてきたと言える。

今回行った家族の機能不全＝家族が家族らしさを失う＝の問題と、きょうだいに見られるアダルトチルドレンの特徴との関係についての実証は、支援を得られず、機能不全を起こした家族の中に放置された人々に、より困難な状況が発生するということを示している。

従来、障害のある人への医療、福祉、教育面での『直接支援』と、家族支援という名の下に考えられてきた『親支援』が、家族機能を健全なものに保つために必要であることは今回の研究の中でも、より明確になっている。けれども実際にはなかなか分かってもらえない『きょうだいへの支援』という視点からの支援体制の充実が今こそ重要であると言えよう。

最後に、社会がどのように変れば良いかとの問いに対して『障害者に対する理解を広め、偏見差別を無くす』ことを最も多くの人が希望していることにも注目しなければならない。きょうだいの抱える困難を明らかにして、それに対する理解と支援をすすめるための私たちの調査研究が、すべての人々にとって、偏見や差別の無い、成熟した社会を目指していくための動きの一助となることを願っている。

第 1 部

基礎データ編（アンケート調査）および分析編

第 1 章

子ども時代の家庭での経験

第1節 子ども時代の家庭での経験（家族機能）

吉川かおり

1. 機能不全度の測定

「障害児者のいる家族は機能不全化しやすいのではないか」、「きょうだい自身の大変さやつらさは、家族がきょうだいのニーズに対応する力を失っていること（家族の機能不全）によって生じるのではないか」という仮説を検証するために、機能不全を起こしている家族にみられる8つのルールを具体化した質問を作成した。

想定する時代を「小学生の頃」に限定したので、中途障害や精神障害の発生時期によっては仮説の対象とならないきょうだいも存在した。

設問は、機能不全家族のルール1つにつき、機能が健全かどうかをきくもの・機能が不全かどうかをきくものを1つずつ作ることで、全体のバランスを整えた。

設問作成の基礎とした機能不全家族の、①問題について話し合うのはよくない、②感情は率直に表現してはいけない、③言いたいことは直接言わず、第三者を介す、④子どもに非現実的な期待一強く、正しく、完全であれーをかける、⑤利己的であってはならない、⑥親が言うようにせよ、するようにはするな、⑦遊んだり、楽しんだりしてはならない、⑧波風を立てるな、が硬直化して存在しているというものである。（アダルト・チャイルドが自分と向きあう本－アスク・ヒューマン・ケア研修相談センター編より引用）

家族機能が健全かどうかを問う質問に「あまりなかった・全くなかった」に○をした場合、および家族機能が不全かどうかを問う質問に「よくあった・ときどきあった」に○をした場合を「機能不全あり」とし、その逆を「機能

不全なし」とした。

よって機能不全の度合いは0から16の間に分布することになる。家族の機能不全度の尺度には基準がないため、本調査は実験的性質をもっている。そのため今回の調査では、便宜的に0を「機能不全なし」、1から4を「やや機能不全あり（軽度）」、5から8を「機能不全あり（中度）」、9から16を「完全に機能不全（重度）」とし、4段階に分けることとした。

重度を9以上にしたのは、機能不全家族のルールの内容からみて、それを問う問題の半数以上に該当していることは相当重いものであると判断したからである。

その結果、「機能不全なし」は3.7%（14名）、「軽度」は40.3%（152名）、「中度」は36.6%（138名）、「重度」は19.4%（73名）となった。

今回の調査では、1つのルールにつき相反する結果が出ることを予測し2つの設問を設けた。理論的には、あるルールについて作られた家族機能が健全かどうかを問う質問に「よくあった」と答えた場合、同じルールについて作られた家族機能が不全かどうかを問う質問には「全くなかった」と答えることになる。しかしながら、今回得られた結果ではその点にばらつきが見られ、全ての質問が「家族機能についてのさまざまな側面を聞いた」ものとなってしまったようである。

また、機能不全だという回答が1つだけであってもそれが非常に堅固で、きょうだいに与える影響が大きい場合には、重度の機能不全と判断できるケースもあると考えられる。さきに述べたように、すべての質問項目が機能不全ルールに基づいて作成されているので、1つでも当てはまればなんらかの機能不全が存在

していると判断するのが妥当であろうが、軽・中・重の尺度は便宜的なものとなっている。その点をさしひいても、「障害児者のいる家族に機能不全が見られる」という仮説を、一定程度支持する結果が得られたと結論づけることは可能であろう。

本来であれば、プレテストを行って設問の妥当性を検討し整合性を図る必要があったのだが、それができなかったことが難点である。

図表 1-1-1 機能不全家族の8つのルールと質問内容

	8つのルール	正逆	質問内容
1	問題について話し合うのはよくない	1) 逆 9) 正	障害のある兄弟姉妹の問題を、両親は前向きに話し合っていた 障害のある兄弟姉妹のことで、両親の間に陰湿な空気が漂っているのを感じていた
2	感情は素直に表現してはいけな	2) 逆 11) 正	障害のある兄弟姉妹への負の感情を、親に対して素直に表現できた 障害のある兄弟姉妹がいたために、さびしくても親に甘えられなかった
3	言いたいことは直接言わずに第三者を通す	4) 正 7) 逆	障害のある兄弟姉妹のことにについて、母（または父）の気持ちや考えを代弁して父（または母）に伝えた 障害のある兄弟姉妹のことにについて、両親はお互いに気持ちを伝えあっていた
4	非現実的な期待を押し付けられる	6) 正 10) 逆	障害のある兄弟姉妹がいたために、親から高い理想を押し付けられた 障害のある兄弟姉妹に関わらず、自分の行動や考えを尊重してくれた
5	利己的であってはならない	12) 正 15) 逆	障害のある兄弟姉妹のことで忙しい時に、親に要求を言うと叱られたりいやな顔をされたりした 障害のある兄弟姉妹のことで忙しい時でも、親は自分の要求に耳を傾けてくれた
6	私が言うようにせよ、するようにはするな	3) 正 13) 逆	障害のある兄弟姉妹のことにについて、親は本音と建前を使い分けていた 障害のある兄弟姉妹のことで、何かあっても、親は自分の要求に耳を傾けてくれた
7	遊んだり、楽しんだりしては成らない	5) 正 14) 逆	障害のある兄弟姉妹がいるために、親は深刻な顔で悩み疲れていた 障害のある兄弟姉妹がいても、親はリラックスしたり楽しんだりしていた
8	波風立てるな	8) 正 16) 逆	障害のある兄弟姉妹がいるために、自分は家族にもめごとが起こらないように行動した 障害のある兄弟姉妹がいても、自分の抱えている問題を親に自由に話すことが出来た

・【正】機能が健全かどうかをきく質問、「よくあった・ときどきあった」に○をした場合を「機能不全あり」とする

・【逆】機能が不全かどうかをきく質問、「あまりなかった・全くなかった」に○をした場合を「機能不全あり」とする

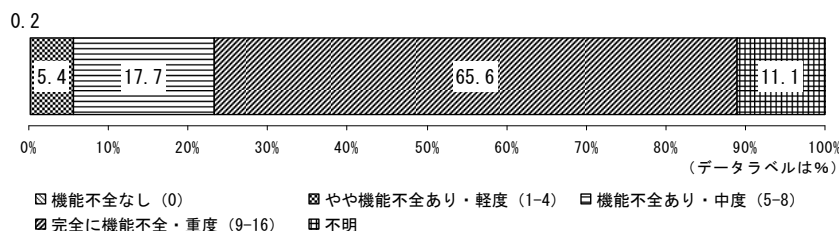
※よって「機能不全あり」の尺度を0から16点とし、4段階に分ける基準（機能不全なし、軽度、中度、重度）は筆者（吉川）が作成



また、今回の調査は、「家族の機能不全度」を尋ねるとともに、家族の機能不全の結果としてきょうだいが身につけるAC性（アダルト・チルドレンとしての特徴）について直接聞くことによって設計されている。第2章に述べられているAC度の調査結果と合わせると、「障害

児者のいる家族が機能不全化しやすいのではないか」という仮説は、きょうだいがその小学校時代を振り返った時に「何らかの機能不全が存在している家族が多かった」ということから立証できたと考えられる。

図表 1-1-2 機能不全度

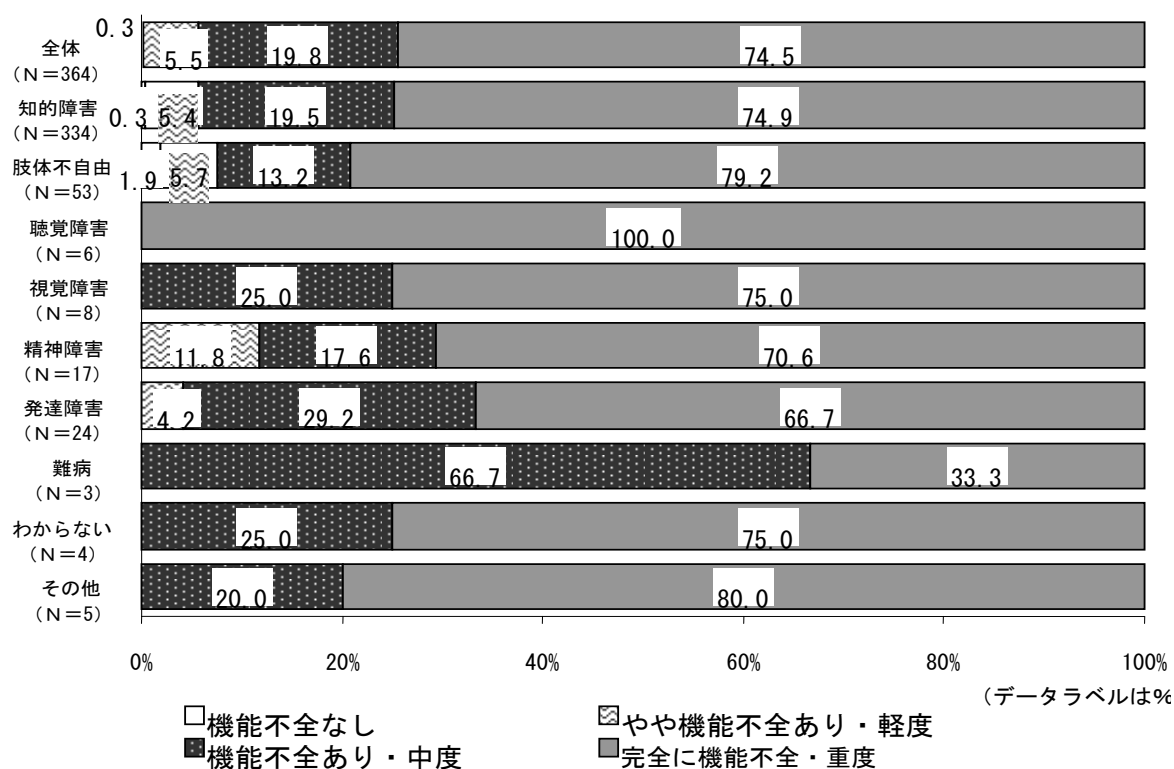


2. 障害種別による差異

調査の設計を始めた当初は、「障害が重複している場合や、行動障害や介護の度合いが重い場合には、家族の機能不全は強まる（機能不

全度が高くなる）のではないか」という仮説を立てていたが、行動障害の有無や介護度まではこの調査では明らかにできなかったため、障害種別と機能不全度のクロス集計を行うに留まった。

図表 1-1-3 障害種別×機能不全



その結果、機能不全の状態は、障害種別に関係なく存在していることが明らかになった。なお、障害種別ごとの標本数が少ないものがあるため、今回の分析における%がその障害種別全体を代表しているわけではないことに留意する必要がある。

3. まとめ

機能不全は、障害児者のいる家族すべてに見られるとは限らない。機能不全の発生は、障害の発生時期や、それを受け止める親の態度、利用できる資源の状況、障害の発生による混乱期がどの程度続いたか、もともとの両親の結びつきの強さ、生活の余裕、といったさまざまな条件による影響を受けるものであり、機能不全がまったく生じない家族も当然存在している。

重要なことは、機能不全が生じている家族の状態や実態を明らかにすることによって、辛い思いや不安な思いをしているきょうだいに支援を提供できるようにすることであり、機能不全であるということが障害児者のいる家族に余計なスティグマを与えないよう配慮する必要がある。

ちなみに、第2部の学習会報告（3）では「家族機能」の専門家にお話をうかがっているが、日本では何らかの機能不全が見られる家族の方が多いのではないか、という意見が述べられていた。また、「障害の発生」そのものが機能不全を引き起こすのではなく、「障害の発生」に伴う家族関係のゆがみや葛藤の続く長さが機能不全に結びついていくことが指摘されていた。

さらに、きょうだい支援活動にかかわる臨床的な経験からみても、家族がもともと機能不全でそこに障害児者が生まれた場合の方が、きょうだいの受ける負担やつらさはより大きいという感触がある。今回の実験的な分析結果をふまえて、重症度を含めた機能不全のありようについてさらに検討を重ねていく必要があると考えられる。

【引用文献】

・アスク・ヒューマン・ケア研修相談センター（1997）アダルト・チャイルドが自分と向きあう本 40-43

第 1 部 基礎データ編（アンケート調査）および分析編

第 2 章

子ども時代の家庭での経験と自分の様子との関係性

第1節 アダルト・チルドレン

吉川かおり

1. AC（アダルト・チルドレン）性の測定

第1章で述べたとおり、「障害児者のいる家族は機能不全化しやすいのではないか」、「きょうだい自身の大変さやつらさは、家族がきょうだいのニーズに対応する力を失っていること（家族の機能不全）によって生じるのではないか」という仮説を検証するために、機能不全の結果としてきょうだいが身につけるAC性を測定した。

用いた項目は、特定非営利活動法人アスクのホームページで公開されている「自分をふりかえるためのチェック項目－ACの5つのタイプ」<http://www.ask.or.jp/actype.html> から引用した。

参考までに、ACとはもともとはアルコール依存症者のいる家庭で育って大人になった人（Adult Children of Alcoholics）という意味で、米国における福祉や心理の臨床の場で発見され、使われるようになった用語である。近年では、アルコール依存症だけでなく、子どもが子どもらしく育つことのできなかった家庭、つまり「機能不全」家族で育って大人になった人（Adult Children of Dysfunctional Family）という意味でACが使われるようになっている。

障害児者が家族にることによって、ネグレクト状態におかれる、親の手伝いをしたり優等生になったりすることできょうだいが存在意義を見出そうとする、不登校をすることで親の注意を自分に引き戻そうとする、親同士の葛藤をやわらげ和ませる役割を担う、といった状態は、機能不全の結果として生じるものであり、ACの特徴と合致するものである。

その観点から、きょうだいが身につけたAC

性を測定することで、きょうだいがもっている「生きにくさ」を明らかにし、さらに家族が機能不全になっているかどうかを判断できると考えたのである。

ACの5タイプとして挙げられているものは、①ヒーロータイプ、②身代わりタイプ、③いなくなった子タイプ、④道化師タイプ、⑤世話役タイプ、である。

具体的には、①ヒーロータイプとは、優等生であり家族の誇りとなるような行動をとることで自分の存在価値を得ようと頑張るタイプであり、疲れていても休めない、完璧にできない自分を責めるといった傾向が見られる。②身代わりタイプは、家でも学校でも何かとトラブルを起こすことで、家族の中にある葛藤や緊張から目をそらさせる役割をしているタイプであり、内面にある寂しさやつらさを誰にも言えずに行動にあらわす傾向がある。③いなくなった子タイプとは、ほめられるわけでも問題を起こすわけでもなく、目立たずに存在を忘れられたかのようにしているタイプで、目立たずにいることで自分が傷つくことから身を守っているものの、孤独感を強める傾向がある。④道化師タイプとは、おどけた態度やしぐさで家族の緊張を和らげ、場を和ませる役割をするタイプで、自分の辛さをはっきり言葉にすることができないという傾向がある。⑤世話役タイプとは、小さい時から親の面倒をみたり、愚痴や相談を聞いたりとカウンセラーのような役割を果たし、妹や弟（今回の調査では障害児）の保護者役になったりするタイプで、自分のことはいつも後回しにしているため自分の感情やしたいことがわからなくなる傾向がある、と言われている。

特に注意しておきたい点は、AC性をもつことそのものが問題なのではなく、AC性をもった結果として本人が「生きていきにくさ」を感じており、それを解決する手段を見いだせないでいるという点にある。いずれにしろ、AC性の測定そのものについては、きょうだい自身が自分を見つめるための一つの手段としてとらえることが妥当であり、本調査においてあえてAC性を取り入れたのは、「家族機能の不全化を防ぐための方策を模索する」ために必要となる「家族機能の不全化の存在を裏付ける」重要な項目と考えられたためである。

2. 得点による傾向

本調査においては、①ヒーロータイプは計9点、そのほか②身代わりタイプは8点、③いなくなった子タイプは8点、④道化師タイプは7点、⑤世話役タイプは8点、の項目を設けた。項目数に多少のばらつきはあるが、傾向が少ないもの、多いものに分けることは可能であると考えた。

ただし、AC性というものは、当てはまるものが1つの場合には楽で、3つだと大変というような性質のものではなく、本人が何を辛いと感じるかによって、1つだけあてはまっても大きな影響があると判断すべきもの

であると言える。

たとえば、もともとの性格が大らかだった場合と神経質だった場合とでは、「息抜きをしたり無邪気になって遊ぶのが苦手」という傾向の持つ意味は異なり、本人が「まあいいか、それでも」と捉えるか「それが何より辛い（毎日がゆううつ）」と捉えるかによって、「生きていきにくさ」も大きく変わってくる。

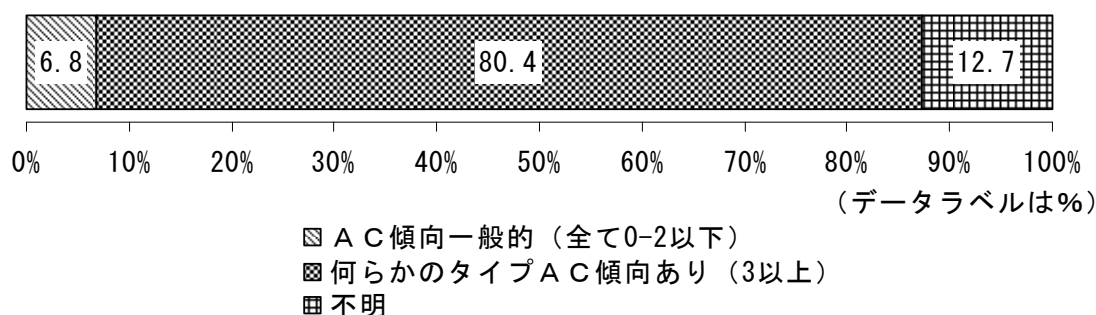
そのため、AC度の区分については、今回の分析は実験的意味を持っている。つまり、何項目あてはまればACなのかの判断、AC度の傾向として軽・中・重の差をつける、という点が実験的試みであったということである。

(1) AC判定：0から2をなしとする場合

まず、きょうだい支援に携わっている臨床的感覚に基づき、各タイプ2項目までは「よくあること」として捉えられるが、3項目以上あてはまる場合には「何らかの生きていくさがある」と考えて良いのではないかという仮説を立てた。

そして、全5タイプのうち、それぞれにおいて該当した項目が0から2までだった場合を「AC傾向なし」、3から4を「生きぐるしさあり（AC度軽度）」、5から6を「けっこう生きぐるしい（AC度中度）」、7以上を「生き苦しさ危険領域（AC度重度）」と位置づけ、分析を試みた。

図表 2-1-1 AC判定全て2以下



【引用文献】

特定非営利活動法人アスクのホームページ「自分をふりかえるためのチェック項目－ACの5つのタイプ」
<http://www.ask.or.jp/actype.html>

その結果、「AC度なし」と判断されたものは6.8%（29名）、「あり」と判断されたものは80.4%（341名）となった。

タイプ別の傾向は、次の通りである。

①ヒーロータイプ：

「AC度なし」22.6%（96名）、「AC度軽度」28.5%（121名）、「AC度中度」24.3%（103名）、「AC度重度」20.3%（86名）。

②身代わりタイプ：

「AC度なし」59.7%（253名）、「AC度軽度」25.9%（110名）、「AC度中度」6.4%（27名）、「AC度重度」0.9%（4名）。

③いなくなった子タイプ：

「AC度なし」55.4%（235名）、「AC度軽度」23.3%（99名）、「AC度中度」13.4%（57名）、「AC度重度」4.0%（17名）。

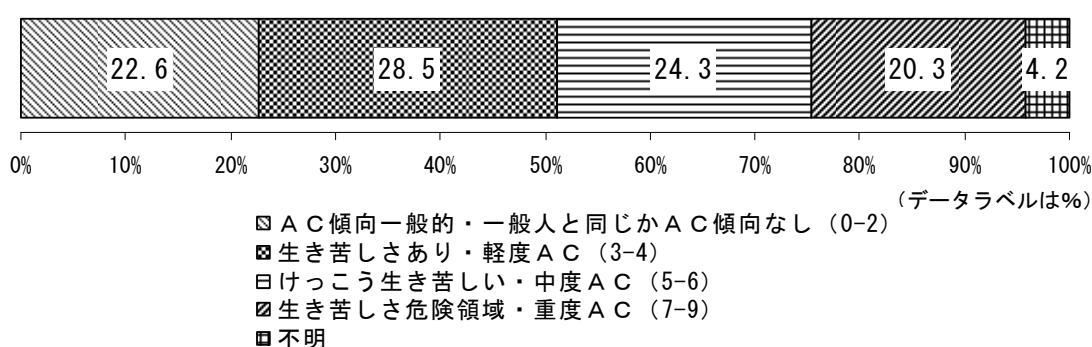
④道化師タイプ：

「AC度なし」57.8%（245名）、「AC度軽度」27.8%（118名）、「AC度中度」9.9%（42名）、「AC度重度」0.2%（1名）。

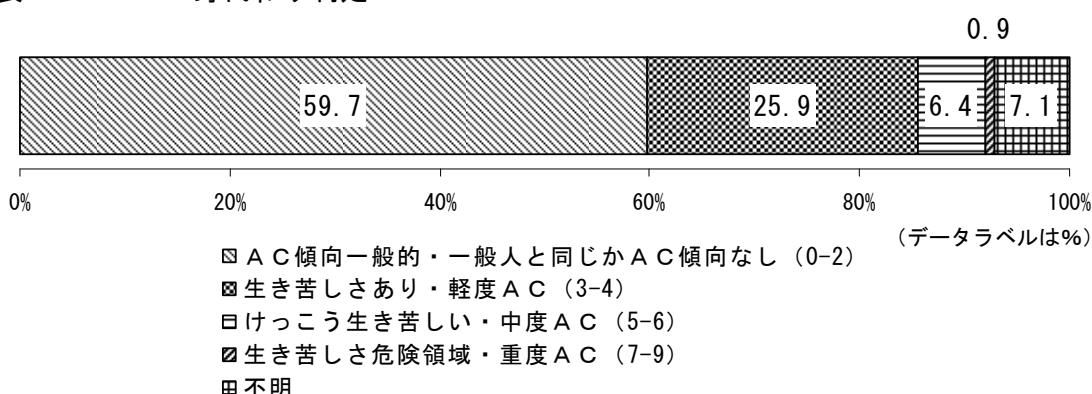
⑤世話役タイプ：

「AC度なし」19.8%（84名）、「AC度軽度」30.0%（127名）、「AC度中度」28.1%（119名）、「AC度重度」17.7%（75名）。

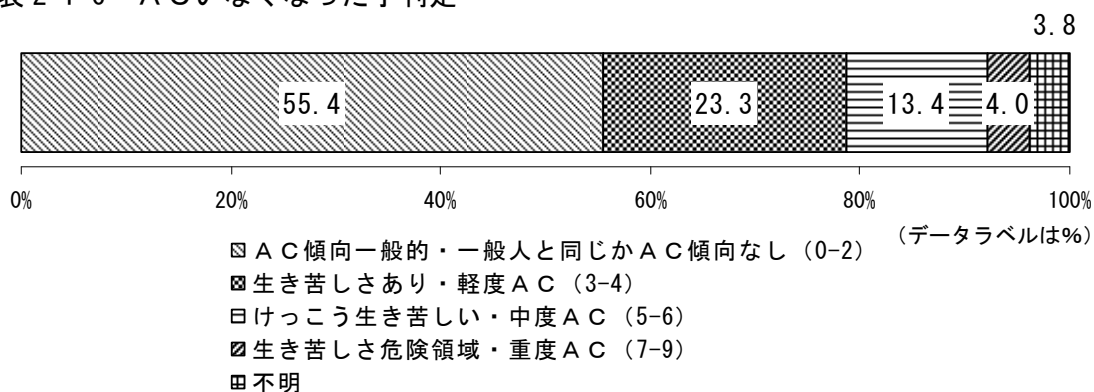
図表 2-1-4 ACヒーロー判定



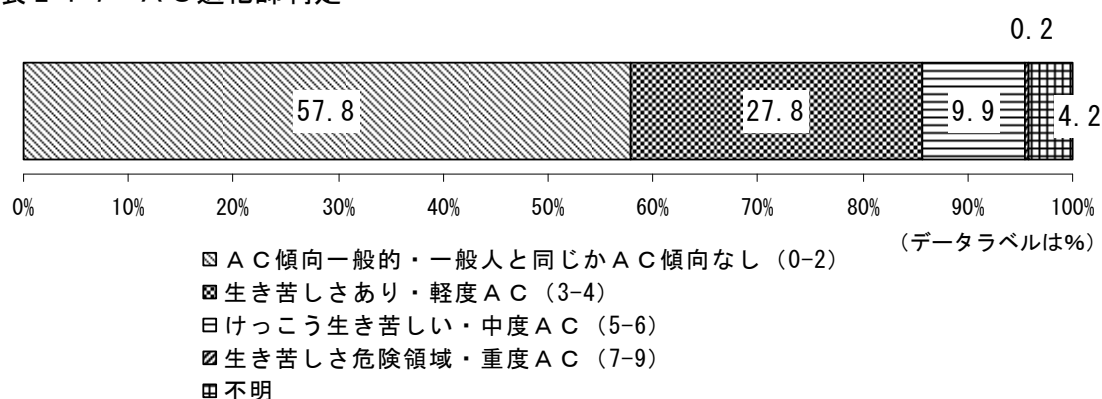
図表 2-1-5 AC身代わり判定



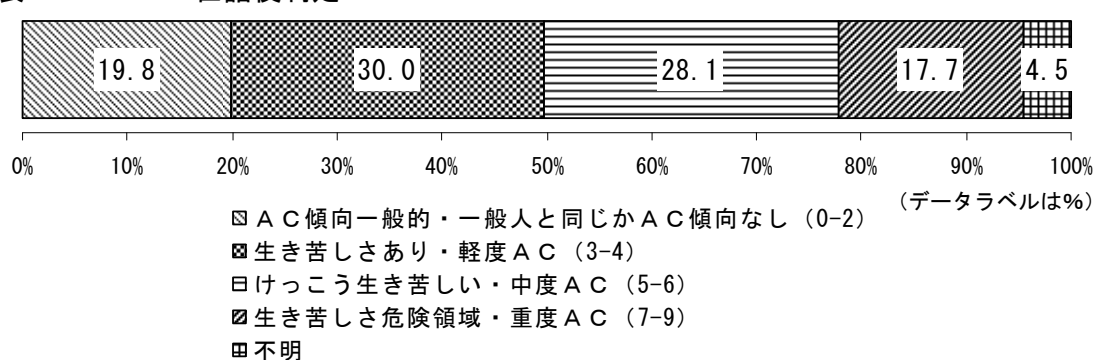
図表 2-1-6 ACなくなった子判定



図表 2-1-7 AC道化師判定



図表 2-1-8 AC世話役判定



(2) AC判定：0から3をなしとする場合

次に、各タイプにおいて3項目まで当てはまっても「AC傾向なし」と捉えた場合を示す。

この場合、「AC度なし」と判断されたものは17.0% (72名)、「あり」と判断されたものは70.3% (298名)となった。

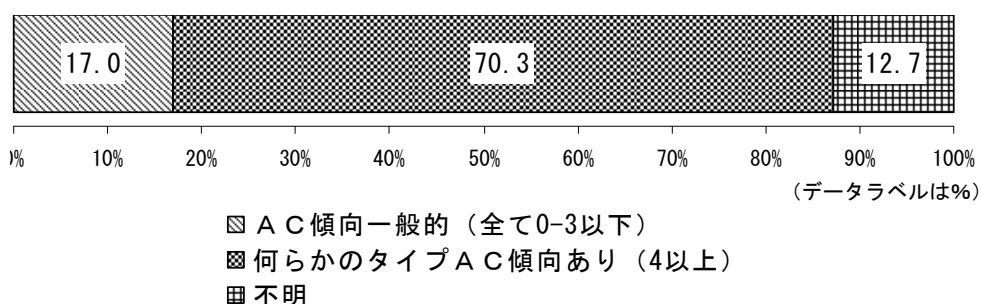
(3) AC判定：0から4をなしとする場合

また、各タイプにおいて4項目まで当てはまっても「AC傾向なし」と捉えた場合

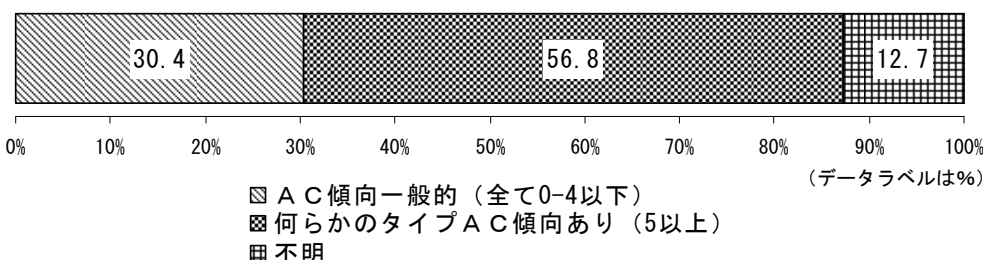
には、「AC度なし」が30.4% (129名)、「あり」が56.8% (241名)という結果が得られた。

質問項目が各タイプ7～9項目であることから、その半数以上(5項目以上)に該当する場合には、明らかにAC傾向を有すると判断してよいであろう。2項目までを「なし」とするのか、3項目までにするのかは判断が難しいところであるが、いずれにしろかなりの割合の人々にAC傾向があるということは明らかである。

図表 2-1-2 AC判定全て3以下



図表 2-1-3 AC判定全て4以下



3. ACの5タイプの判定

ACの5タイプは、1人が1つのタイプをもつというのではなく、1人でいくつかのタイプを持ち分けていると考えた方が現実に即している。つまり、おおむね優等生タイプであるが、時によって道化師タイプの役割を果たしているとか、おおむね世話役タイプであるが時に身代わりタイプの役割をしているというように、場に応じて表面に出るタイプが異なる(演じている役割が異なる、とACのケアの領域では言われている)と考えるべきなのである。

そのため、今回の調査においても、1人が複

数のタイプに当てはまるという結果が得られている。全体的な傾向として「ヒーロータイプ」と「世話役タイプ」が多いのは、このような調査に協力的なきょうだいは一般的に、障害児者と積極的なかかわりをもっている人が多いためであると考えられる。一方で、割合としては「ヒーロー」や「世話役」の約半数ではあるが、「身代わりタイプ」や「いなくなった子タイプ」の傾向をもつきょうだいもいるということが明らかになったことは、きょうだいのもつ「生きていきにくさ」の多面性を表したものとして位置づけることができよう。

4. 機能不全とのクロス集計

家族の機能不全度とAC度とのクロス集計結果は、次の通りであった。

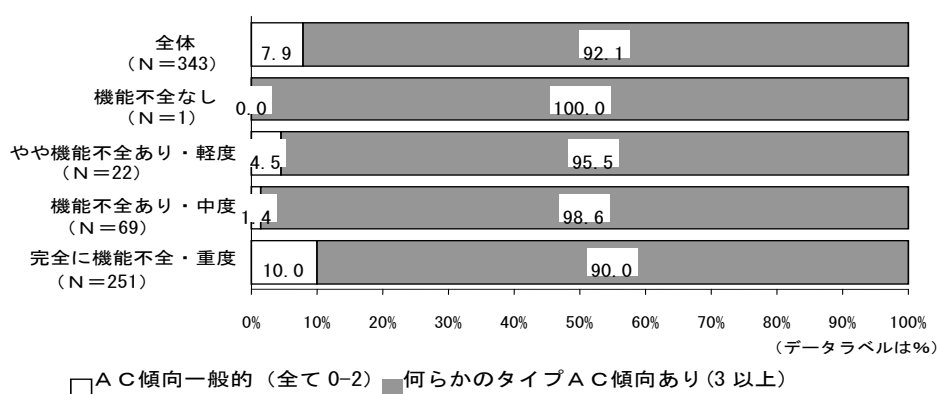
どちらの場合においても、何らかのAC傾向ありと判断された割合が高かったため、機能不全度が重度であればAC傾向ありの人が増えるという結果にはなっていない。これは、機能不全項目で設定した質問内容の精査が不十分な点と、AC度はたとえ1項目だけが当てはまってもその影響がものすごく重ければACと判定できるというあいまいさを持っている点によるものと考えられる。

今回の調査では、AC傾向なし＝機能不全度なし、AC傾向重度＝機能不全度重度、という仮説を立てていたが、図表 2-1-9 および図表 2-1-10 の数字は、仮説とは異なる内容を

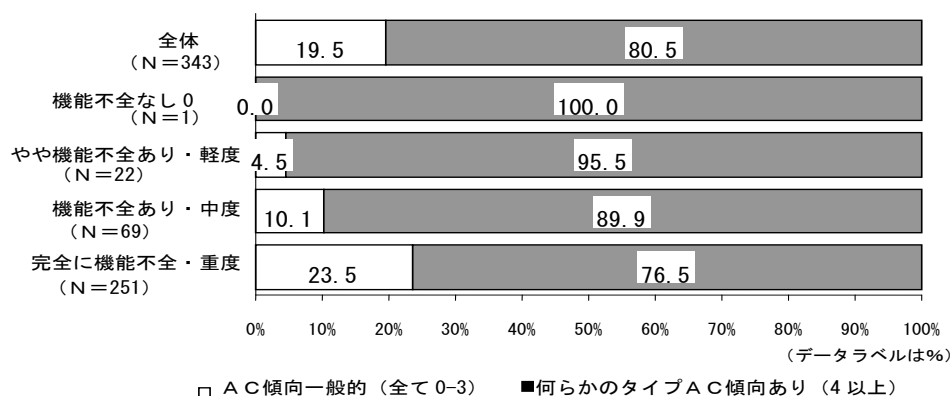
示している。その要因としては、次の3点が考えられる。①尺度を単純な○×の合計数で判断したため、その深さまでは測ることができず、またAC性も同じ性質をもっているため、クロス集計で結果を得ることそのものが困難であった。②例えばAC性の5タイプに偏りがあるなど、総数を含めてサンプルに偏りがあった。③AC傾向の重症度と、機能不全の重症度の間には正比例関係はない。

今回は、上記の要因についての検証を行うことはできなかったが、それでもなお「AC判定：0から2をなしとする場合」での90%以上、「AC判定：0から3をなしとする場合」の75%以上が機能不全ありという傾向を示していることから、機能不全とその結果としてのAC度との間に何らかの関連があることは実証できたと考えられる。

図表 2-1-9 機能不全（不明47件を除く）
× AC（全て2以下）（不明54件を除く）の関係



図表 2-1-10 機能不全 × AC（全て3以下）の関係



第2節 困難な状況にあるにも関わらず 適応する力と自尊心との関係性

河村真千子

■子どもや青少年は非日常的な生活のストレスの中で、感情的、認知的、社会的に健康な精神活動を維持するためのレジリエンシー（回復力）という特性を発達させる能力を持っている。健康を促進する環境的な働きかけがあれば、個々人は逆境に耐え、多様なリスク要因を克服するためのレジリエンスを発達させることができる。レジリエンスは、興味や感情的健康を促進するだけでなく、不安や落胆、怒りといったネガティブな感情の徴候を減少させることが明らかとなっている。

そこで、きょうだいのレジリエンスと自尊感情を調べることから検討した。レジリエンスは、レジリエンスの発達を促進する「子どもの能力」「子どもの個人内要因」「周囲から提供される要因」の関連が検討されてきている。また、年齢によって強く影響する要因は異なると考えられている。小学時代には、「子どもの能力」「周囲から提供される要因」が、生涯にわたっては「個人内要因」が、レジリエンス全般の機能に影響すると考えられている。

1. 質問項目

小学生の頃のレジリエンスを測定する尺度は「子どもによって獲得される要因」（6項目）、「子どもの個人内要因」（5項目）、「子どもの周囲から提供される要因」（6項目）を用いた。現在のレジリエンスを測定する尺度は「環境要因」（6項目）、「個人内要因」（8項目）を用いた。回答は4件法である。質問項目は、Grotberg（1995）、Hiew, Mori, Shimizu, and Tominaga（2000）、小花和（2004）等の研究を基礎にして作成した。

自尊感情を測定する尺度は、尺度によって自尊感情のとらえ方が異なっている。他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度と考えているローゼンバーグが作成した尺度を山本・松井・山成（1982）が邦訳したものを使用した。

2. 結果の整理

小学生の頃のレジリエンス3要因、現在のレジリエンス2要因については、「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法に、1～4点を与えて単純加算した。

小学生の頃のレジリエンスの「子どもによって獲得される要因」の高い群と低い群（以下、高群、低群とする）に分ける基準は、高群を15点以下、低群を16点以上とした。「子どもの個人内要因」の高群と低群に分ける基準は、高群を13点以下、低群を14点以上とした。「子どもの周囲から提供される要因」の高群と低群に分ける基準は、高群を14点以下、低群を15点以上とした。

現在のレジリエンスの「環境要因」の高群と低群に分ける基準は、高群を11点以下、低群を12点以上とした。「個人内要因」の高群と低群に分ける基準は、高群を16点以下、低群を17点以上とした。

自尊心については、「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法に、1～4点を与えて単純加算した。ただし、逆転項目については反転後の得点を加算した。自尊心については、0～22点を「高い」、23点～24点を「やや高い」、25点～26点を「やや低い」、27点～40点を「低い」とした。

図表 2-2-1 子どもの頃と現在のレジリエンス

	平均点	標準偏差	範囲
小学－子どもによって 獲得される要因	15.08	3.98	6-24
小学－子どもの 個人内要因	13.26	2.36	5-20
小学－子どもの周囲から 提供される要因	14.46	3.41	6-24
現在－環境要因	11.73	3.28	6-24
現在－個人内要因	16.52	4.24	8-32
自尊心	24.7	3.23	10-36

子どもによって獲得される要因・・・問Ⅰ、2-2、1) 3) 8) 9) 16) 17)

子どもの個人内要因・・・・・・・問Ⅰ、2-2、2) 4) 10) 11) 12)

子どもの周囲から提供される要因・問Ⅰ、2-2、5) 6) 7) 13) 14) 15)

環境要因・・・・・・・問Ⅱ、3-1、24) 25) 27) 30) 34) 35)

個人内要因・・・・・・・問Ⅱ、3-1、26) 28) 29) 31) 32) 33) 36) 37)

自尊心・・・・・・・問Ⅱ、3-3、1) ～ 10)

3. 結果

レジリエンスはそれぞれが単独で影響力を持つわけではないが、障害のある兄弟姉妹に対する支援について考えるにあたり、要因の関連を検討する目的から、クロス集計結果をみる。

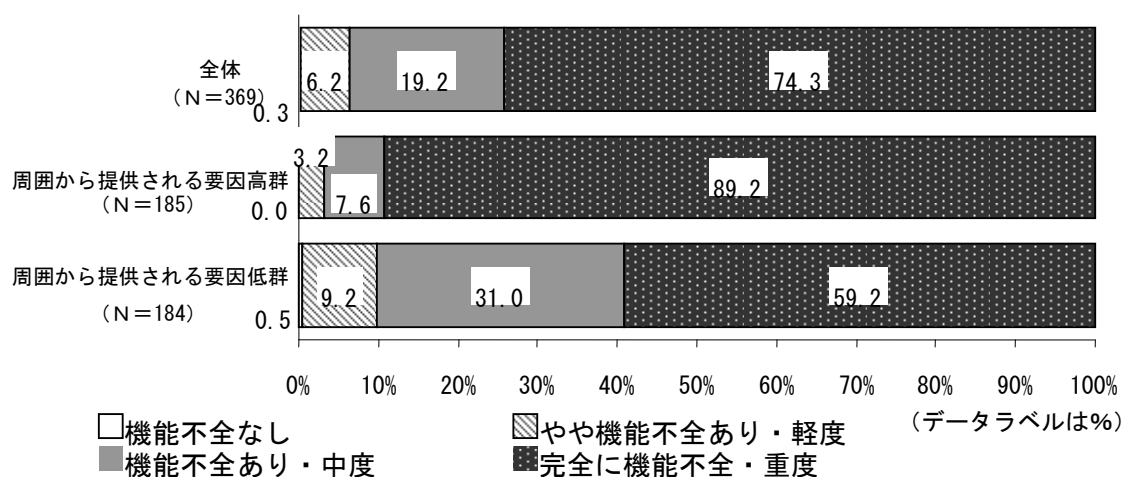
(1) 周囲から提供される要因

小学生の頃に「子どもの周囲から提供される要因」と「機能不全」の関係を見るために、ク

ロス集計をした。その結果、周囲から提供される要因の高群は、機能不全度が「軽度」(3.2%)、「中度」(7.6%)、「重度」(89.2%)であった。周囲から提供される要因の低群は、機能不全度が「軽度」(9.2%)、「中度」(31%)、「重度」(59.2%)であった。

周囲から提供される要因が高群の方が、低群よりも機能不全「重度」が30%も高い結果であった。(図表 2-2-2)

図表 2-2-2 周囲から提供される要因（不明 20 件除く）× 機能不全（不明 47 件除く）



そこで、周囲から提供される要因の内容を検討分析した。

図表 2-2-3 両親は（母親もしくは父親）は、十分な関心を向けてくれた×実父との関係の満足度

この結果から、小学生の頃、両親（母親もしくは父親）から十分な関心を向けられる程、実父との関係に満足していることがわかる。

図表 2-2-4 両親は（母親もしくは父親）は、十分な関心を向けてくれた×実母との関係の満足度

この結果から、小学生の頃、両親（母親もしくは父親）から十分な関心を向けられる程、実母との関係に満足していることがわかる。

図表 2-2-5 家族はあなたに高い期待をしていた×実父との関係の満足度

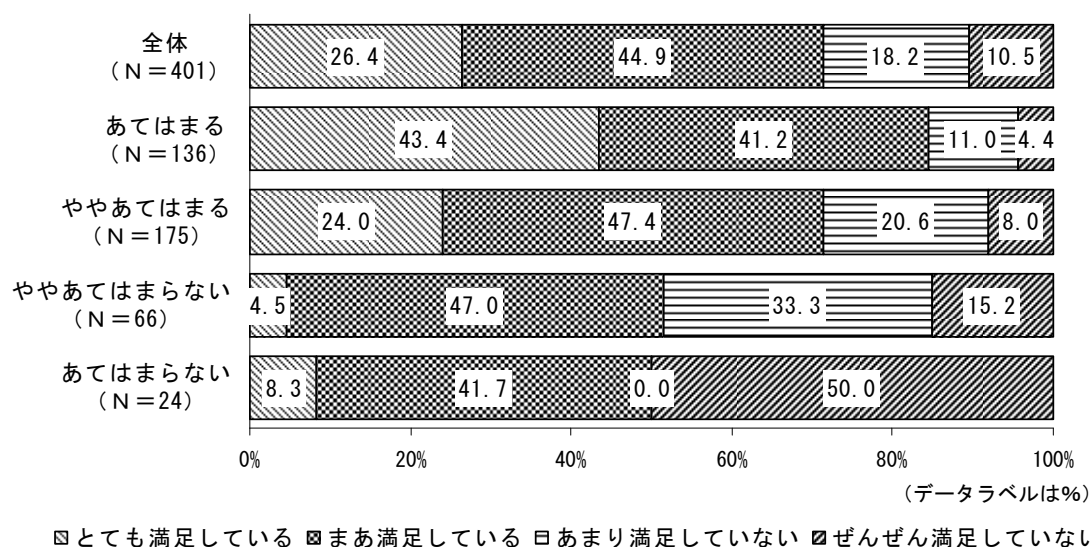
一方、「あなたの家族はあなたに高い期待をしていた」という質問に対して、「ややあてはまらない」と回答した人が、実父との関係において「とても満足している」（25.5%）、「まあ満足している」（58.8%）という両方の合計が 84.3%であり、一番高かった。

図表 2-2-6 家族はあなたに高い期待をしていた×実母との関係の満足度

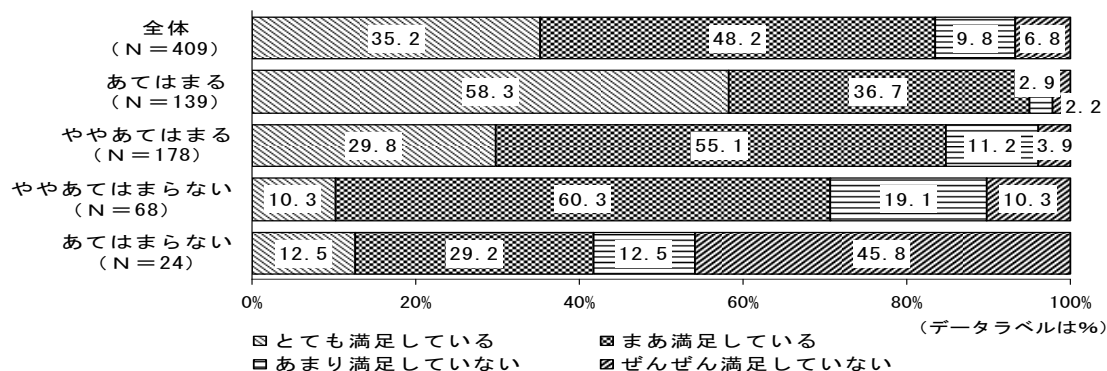
同様に、「あなたの家族はあなたに高い期待をしていた」という質問に対して、「ややあてはまらない」と回答した人が、実母との関係において「とても満足している」（29.8%）、「まあ満足している」（62.5%）という両方の合計が 92.3%であり一番高かった。

上記から、両親（母親ないし父親）は「十分に関心を向けてくれた」度合いが高い程、実父実母との関係の満足度が高い結果であった。それに反して、「高い期待をされた」度合いが「ややあてはまらない」であることが、実父実母との関係の満足度が一番高いという結果である。このことは、「周囲から提供される要因」として、両親（母親ないし父親）が「十分に関心を向けてくれた」ということと、「期待された」ということから得られる相違が、きょうだいへのレジリエンスに相違が生じるということであろう。そのことによって、「周囲から提供される要因」が高群であっても、「不全度」の重度の割合が多いという結果に繋がるのではないか。

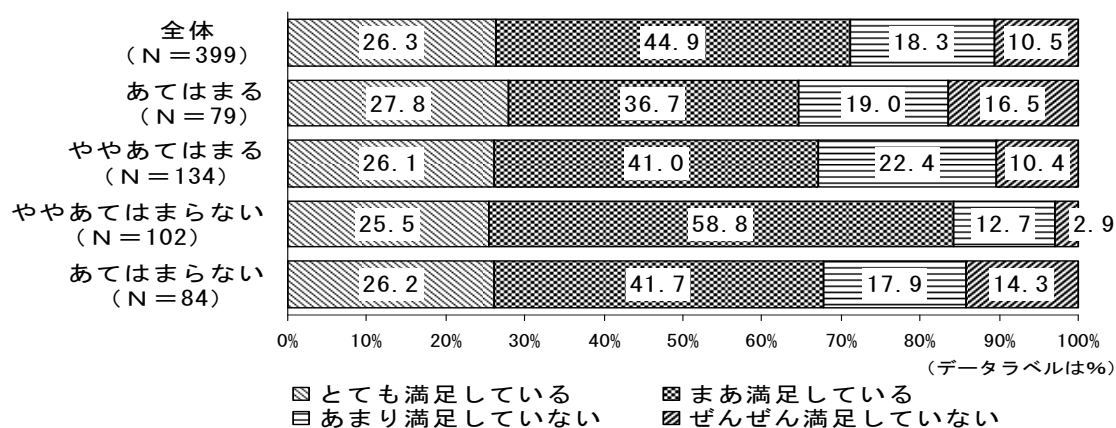
図表 2-2-3 両親は（母親もしくは父親）は十分な関心を向けてくれた（不明 9 件を除く）
× 実父との関係の満足度（不明 8 件を除く）



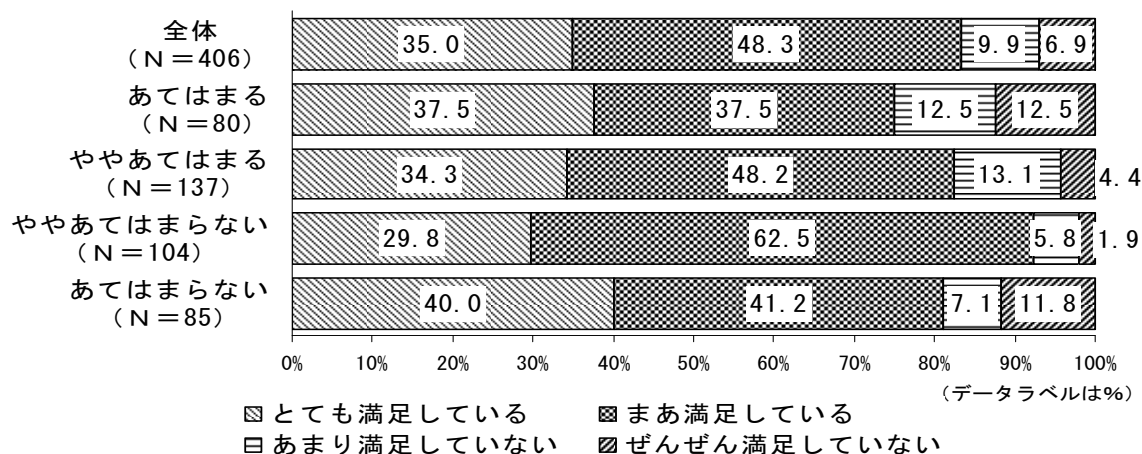
図表 2-2-4 両親は（母親もしくは父親）は十分な関心を向けてくれた（不明 9 件を除く）
× 実母との関係の満足度（不明 8 件を除く）



図表 2-2-5 家族はあなたに高い期待をしていた（不明 12 件を除く）
× 実父との関係の満足度（不明 16 件を除く）



図表 2-2-6 家族はあなたに高い期待をしていた（不明 12 件を除く）
× 実母との関係の満足度（不明 8 件を除く）



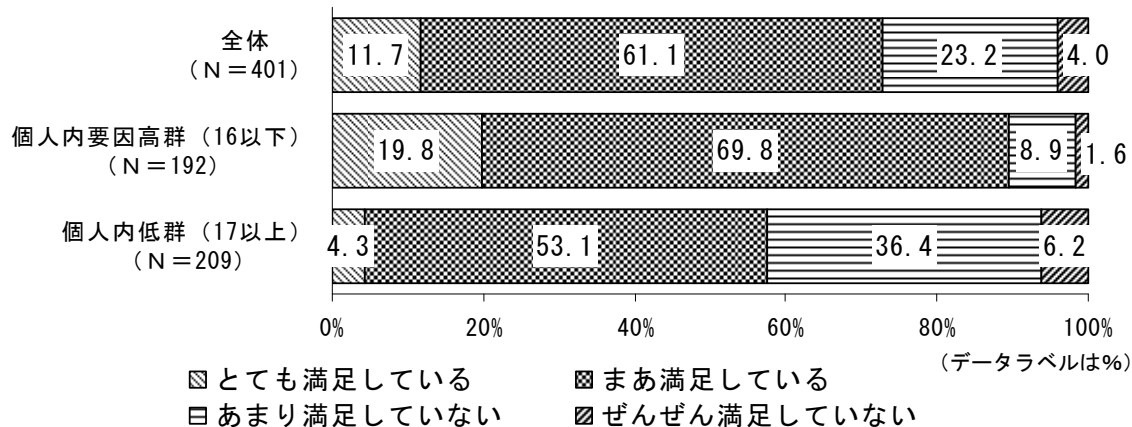
(2) 個人内要因

「個人内要因」と「人生の満足度」をクロス集計したところ、個人内要因の高群では、「とても満足している」(19.8%)、「まあ満足している」(69.8%)であり、両方の合計が89.6%であった。一方、個人内要因の低群において

は、「とても満足している」(4.3%)、「まあ満足している」(53.1%)であり、両方の合計が57.4%であった。

個人内要因の高群と低群では、32.2%の差があり、低群の方が人生満足度が低い結果であった。(図表 2-2-7)

図表 2-2-7 個人内要因（不明 19 件除く）× 人生の満足度（不明 8 件除く）



(3) 自尊心

図表 2-2-8 自尊感情×環境要因

「自尊感情」についての回答が「高い」「やや高い」「やや低い」「低い」という順に従って、「環境要因」の高群の割合が少なくなるという結果であることがわかる。

図表 2-2-9 自尊感情×個人内要因

「自尊感情」と「個人内要因」の間には一定の関係は見られなかった。しかし、自尊感情が「低い」と、個人内要因の「低群」(66.7%)が6割を超える結果であった。

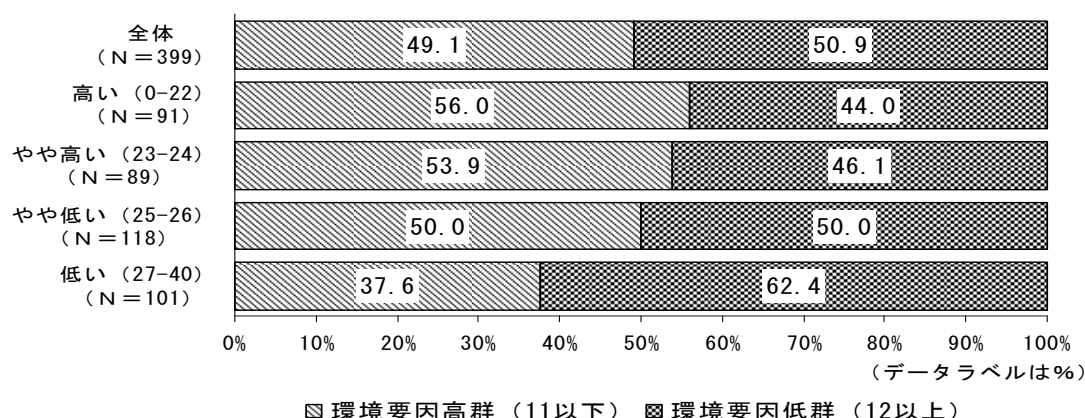
いった対人関係も含めた社会的資源が少ないということである。そして、自尊感情が低い回答者に機能不全度の重度が多いという結果から、子どもの頃からの支援として、家族以外に自分の気持ちや問題を話せる人が作りやすい環境や、困った時には家族にたよることができる人間関係を作っていくような、きょうだいの自尊感情を高める支援が必要なのではないかと示唆される。

図表 2-2-10 自尊心 3 自尊感情×機能不全

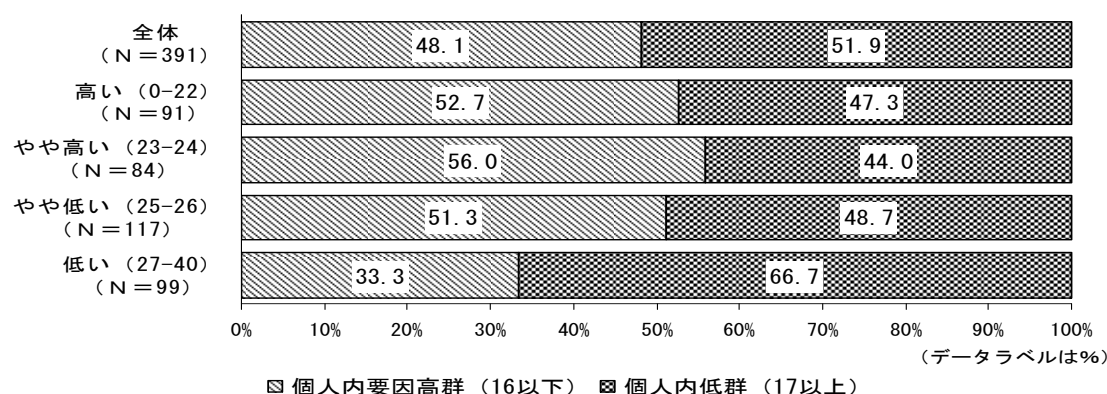
「自尊感情」と「機能不全度」のクロス集計を見てみると、自尊感情が、「高い」「やや高い」「やや低い」「低い」の順で機能不全度の「重度」の割合が高くなる結果となった。

環境要因が低いということは、家族以外に自分の気持ちや問題を話せる人がいることであったり、時には家族にたよることができ、そして物事を計画的に進めることができると

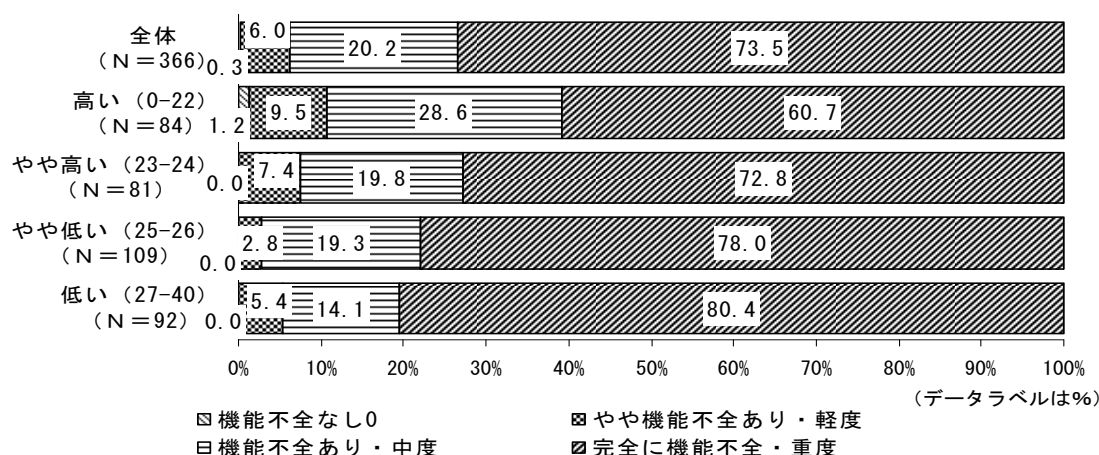
図表 2-2-8 自尊心感情（不明 19 件除く）×環境要因（不明 10 件除く）



図表 2-2-9 自尊心感情（不明 19 件除く）×個人内要因（不明 19 件除く）



図表 2-2-10 自尊心感情（不明 19 件除く）×機能不全（不明 47 件除く）



【参考文献】

- ・Grotberg (1995) A guide to promoting resilience in child. Early Childhood Development: Practice and Reflections, No.8. The Hague: Bernard van Leer Foundation.
- ・Hiew, Mori, Shimizu, and Tominaga (2000) Measurement of resilience development: Primary results with a State-Trait Resilience Inventory,
- ・広島大学大学院教育学研究科学習開発専攻 [編] 1号, 『学習開発研究』 1号, 111-117.
- ・小花和 Wright 尚子 (2004) 『幼児期のレジリエンス』 ナカニシヤ出版.

【引用文献】

- ・山本・松井・山成 (1982) 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30, 64 - 48.

第3節 日常の満足度

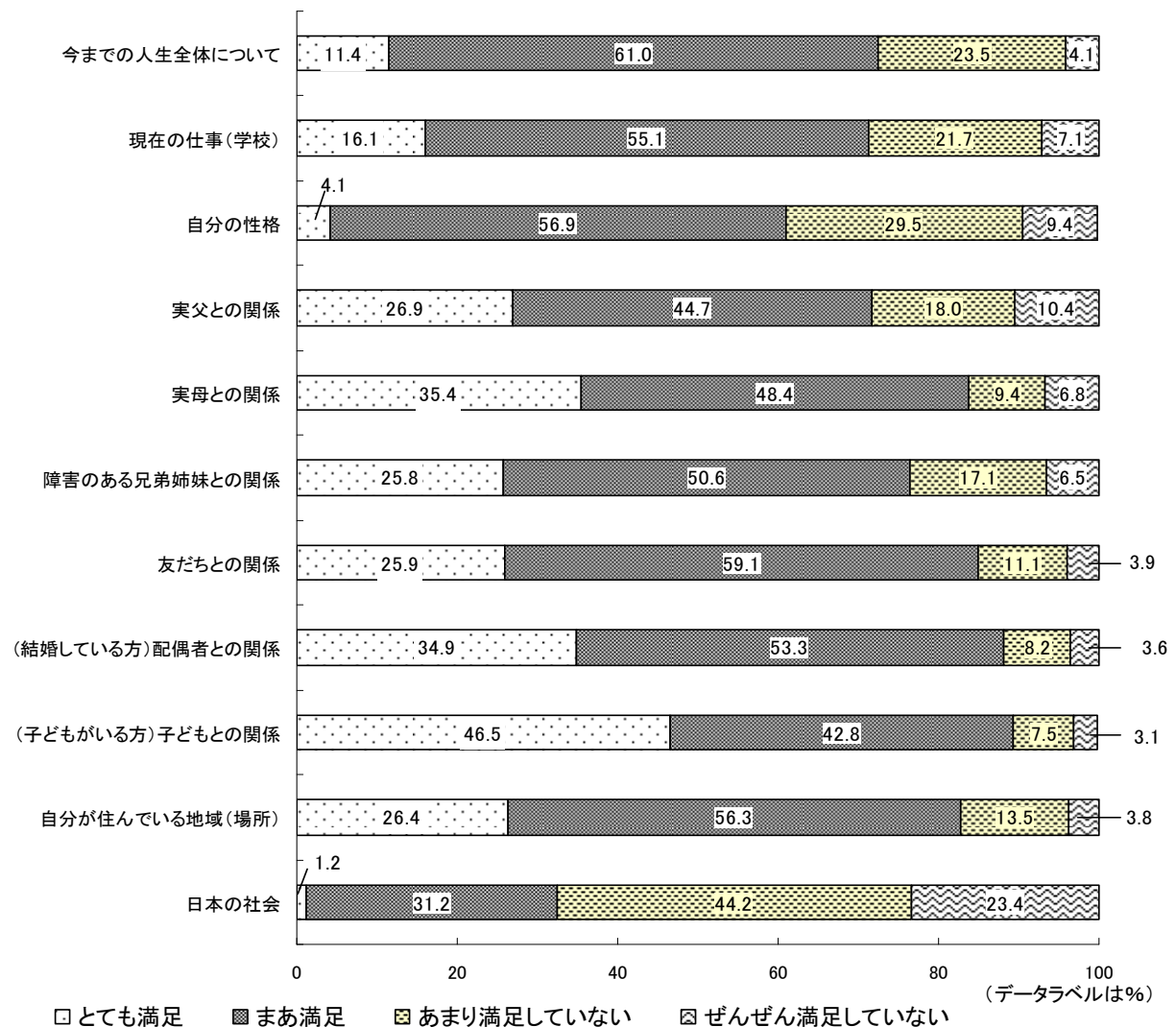
大人になったきょうだいが、現在の様々なことに関する満足度（ストレス度）を聞いた。

今までの人生全体について「満足」とする人の割合が72.4%（「とても満足」11.4%、「満足」61.0%）、「満足でない」とする人の割合が27.6%（「あまり満足していない」23.5%、「全然満足していない」4.1%）となっている。

しかし、自分の性格に関しては「満足でない」とする人の割合が38.9%（「あまり満足していない」29.5%、「ぜんぜん満足していない」9.4%）と4割近い人が自分の性格に不満を持っている。この数字が第2章第1節のアダルト・チルドレンに反映されていると思われる。

障害のある兄弟姉妹との関係については「満足」とする人の割合が76.4%（「とても満足」25.8%、「満足」50.6%）と高い数字となっている。

図表 2-3-1 次のことにどの程度満足してるか



第 1 部 基礎データ編（アンケート調査）および分析編

第 3 章

障害のある兄弟姉妹がいることの影響

第1節 悩んだこと、良かったこと

加瀬みずき

●小学生の頃、兄弟姉妹に障害があることで困ったり、悩んだりしたことがある 53.3%

一番多かったのは、「社会の人の発言や行動への困惑」であり、「障害を理由にしたいじめ、からかい」を受けた者も多い。きょうだいが、幼い頃から社会の差別や偏見にさらされている事実は明らかであり、そのことが人間形成に影響を与えることが懸念される。

一方、「障害のある兄弟姉妹の行動への対処」や「親への配慮や心配」など、独特な家族関係による影響も示唆されている。このような家族の内外の問題について、一人で苦しんでいる幼いきょうだいの姿が浮かび上がってくる。幼いきょうだいへの支援が緊急の課題である。

図表 3-1-1 小学生の頃、困ったり悩んだりしたことがありますか。
あった場合、それはどんなことですか。（記述）

分類	人数	人数%	件数	件数%
00 困ったり悩んだりしたことはない(あまりなかった、ぜんぜんなかった)	185	43.6		
01 困ったり悩んだりしたことがある(よくあった、ときどきあった)	226	53.3		
① 障害説明の難しさや社会とのギャップ			25	5.9
② 社会の人の発言や行動への困惑			99	23.3
③ 将来の不安			13	3.1
④ 障害のある兄弟姉妹の行動への対処			35	8.3
⑤ 障害を理由としたいじめ・からかい			34	8.0
⑥ 家庭内での行動・親への配慮や心配			26	6.1
⑦ 友人を家に招くことの制限			12	2.8
⑧ その他			4	0.9
99 未回答	13	3.1		
全体	450	100	248	

※1：件数はひとりの人が複数件に該当するケースもあるため人数とは同数にはならない

※2：件数%はサンプル数 424 を母数としてだした割合

●現在、兄弟姉妹のことで困っていることがある 44.8%

大人である現在のきょうだいの困っていることのトップは、「将来に対する不安」であり、具体的な問題を抱えている者もさることながら、漠然とした不安感を抱いている場合が大半である。きょうだいの支援は、「負担感の軽減のための情報提供や相談（カウンセリング等）」が重要なことがわかる。

また、「障害のある兄弟姉妹との交流方法」に悩んでいるきょうだいも多いが、これについても「情報提供や相談」が大切である。特に、きょうだい同士の情報交換やピアカウンセリングは有効であると思われる。

図表 3-1-2 現在、困っていることがありますか。ある場合それはどんなことですか（記述）

分類	人数	人数%	件数	件数%
00 困っていることはない	214	50.5		
01 困っていることがある	190	44.8		
① 障害のある兄弟姉妹への交流方法			49	11.6
② 障害のある兄弟姉妹についての言及・その影響			9	2.1
③ 将来に関する不安			107	25.2
④ 親の障害のある兄弟姉妹への不理解			10	2.4
⑤ 障害のある兄弟姉妹の居場所での環境や就労			8	1.9
⑥ その他（社会の障害者観・制度・その他）			8	1.9
99 未回答、不明	20	4.7		
全体	424	100	191	

※1：件数はひとりの人が複数件に該当するケースもあるため人数とは同数にはならない

※2：件数%はサンプル数 424 を母数としてだした割合

●現在、兄弟姉妹がいることで良かったと思うことがある 67.9%

きょうだいは、障害のある兄弟姉妹がいることによる心理的影響を受け続けてきたこと、それがきょうだいの考え方にも大きく関わっていることが示唆される。現在は、そのことで自分の視野や関心が広がった等、ハンディをプラスに捉えることができるようになった人が多い。

図表 3-1-3 良かったと思うことがありますか。それはどんなことですか

分類	人数	人数%	件数	件数%
00 良かったと思うことがない	118	27.8		
01 良かったと思うことがある	288	67.9		
① 障害のある兄弟姉妹の存在意義・考え方への影響			107	25.2
② 人に対する優しさや思いやり			81	19.1
③ 視野の広がり・多角的な視点からの考え方			17	4.0
④ 家族の信頼関係			29	6.8
⑤ 障害への関心・差別意識の緩和			30	7.1
⑥ 福祉への関心や仕事選択			23	5.4
⑦ その他			27	6.4
99 未回答、不明	18	4.2		
全体	424	100	314	

※1：件数はひとりの人が複数件に該当するケースもあるため人数とは同数にはならない

※2：件数%はサンプル数 424 を母数としてだした割合

第2節 人生に影響があったと思うこと

林 浩三

■全体として、半数以上のきょうだいが自分の人生の節目となることを選択する際、「影響がなかった」と答えている一方、しかし、「影響があった」と答えているきょうだいもいるので、その事柄を明確にし、今後の課題解決に向けての参考としたい。

●進路への影響があった 34.2%

特質的なのは、多くのきょうだいたちが、「福祉・教育・医療・保健関係を選択した」と回答している。(回答者424人の内、約18%近い78人が回答した)。比較的高い数値とっていいと思う。何かできることをしたい。この数字はきょうだいたちの気持ちをそのまま表している。次に多かったのが、「経済的理由や面倒を見るために何らかの制約を受けた」という回答だ。進学(行きたい道)をあきらめ就職した、進学は公立になった等というのが当てはまる。3番目は「同居もしくは居住地を制約した

進路選択」があげられる。できる限り障害の兄弟姉妹のそばにいて、何かあったらすぐ支援できるようにという気持ちからだ。別な視点でいうと一般の家庭では子どもは大きくなれば自立し、各々自分の家庭を築くものだが、ある意味自分のやりたいと思っていることを諦めなければならなかったり、きょうだいたちが自宅を巣立ち行きたい場所に行けなかったりと、その自立を阻んでいる要因にもなっている。

以上が回答の多かったベスト3だが、この他に次のような回答があった。「きょうだいの分を含めて高収入を得られる職業選択を親から期待された(兄弟姉妹ができない分代償的に求められたという意味も含めて)」「両親が離婚し影響を受けた」「学校の勉強に集中できなかった」等である。

いずれも何らかの影響を受けた回答であり、家族に障害者がいれば、そのきょうだいたちも無関係でいられないということを端的に表している。

図表 3-2-1 進路への影響はありましたか。あった場合、それはどのようなことですか。

分類	人数	人数%	件数	件数%
00 影響がなかった	267	63		
01 影響があった	145	34.2		
① 福祉、教育、医療・保健関係の学部選択			78	18.4
② 視野を広げた進路選択			9	2.1
③ 経済的に安定した職業に向けての進路選択			6	1.4
④ 親からの期待と強制			8	1.9
⑤ 家庭での学習環境			3	0.7
⑥ 同居もしくは居住地を制約した進路			10	2.4
⑦ 経済的理由や面倒を見るため、親から断念、制約された進学			13	3.1
⑧ 兄弟姉妹のことが理由による転校、越境通学、受験			5	1.2
⑨ その他			9	2.1
99 未回答、不明	12	2.8		
全体	424	100	141	

※1：件数はひとりの人が複数件に該当するケースや未記入もあるため人数とは同数にはならない

※2：件数%はサンプル数424を母数としてだした割合

●就職への影響があった（ある）29%

前問の「進路について」で福祉・教育・医学・保健関係を選択したという人が多かったので、当然就職についても福祉・教育・医学・保健関係を選択したという人が一番多く 68 人（全回答者 424 人に対して約 16%）いた。これは単に、兄弟姉妹が障害者であるという理由の他に、近年高齢者が増え福祉そのものが話題に上ることが増えたということも影響しているのかもしれないが、大きな割合だと見る。

またここで、先ほどの進路選択のとき以上に増えたのが「同居もしくは居住地を制約した職場や職業選択」である。いよいよ自分の仕事を決めなければならない段階になり、きょうだいたちにとって現実の生活を考えた時、自

宅から通える範囲でまたは何かあればすぐ飛んでいける場所に就職するというのが、より重要性を増しているということが言える。

また少数だが、これ以外にも片親が病死し、障害の兄弟姉妹の面倒を看るために退職したという人や就職でなかったという人もいて、きょうだいが介護者（支援者）としての役割を果たしている実態もあると垣間見えた。

また障害者の兄弟姉妹がいるという理由で入社を断られたという人もいた（60 代男性）。反対に偏見や差別を恐れ履歴書に障害の兄弟姉妹のことを書けなかったという人もいて、今でも自身を責めて様子が伺えた。（30 代女性）

さらにここでは実家から離れて就職した人も（就職後の転勤で地元を離れた人も含め）もちろんいたが、自分は障害の兄弟姉妹から逃げたと自分を責める人も見受けられた。

図表 3-2-2 就職への影響はありましたか。あった場合、それはどのようなことですか。

分類	人数	人数%	件数	件数%
00 影響がなかった	268	63.2		
01 影響があった	123	29		
① 福祉、教育、医療・保健関係の職業選択			68	16.0
② 経済的に安定した職業選択			9	2.1
③ 企業の障害者理解による影響			9	2.1
④ 就職の物理的条件に求める要素（同居、通勤地の制約等）			22	5.2
⑤ 障害のある兄弟姉妹の面倒のため就職を断念、退職			4	0.9
⑥ 家族、障害のある兄弟姉妹、故郷からの逃避			3	0.7
⑦ その他			6	1.4
99 未回答、不明	33	7.8		
全体	0	100	121	

※ 1：件数はひとりの人が複数件に該当するケースや未記入もあるため人数とは同数にはならない

※ 2：件数%はサンプル数 424 を母数としてだした割合

●結婚への影響があった（ある）30%

状況も回答も様々で代表的なものを列記することにする。

①配偶者に求める要素とは、障害のある兄弟姉妹のことを理解がある人と結婚した、未婚の方は理解ある人との結婚でないと難しいという内容である。(9.2%)

②結婚の物理的条件に求める要素とは、同居もしくは近隣での住居が条件になったということである。これは自分自身の選択で実行したという人が多い中、親からの懇願（親からの条件）として突きつけられたという人もいた。

③恋人、配偶者との関係、不安とは、障害

のある兄弟姉妹を理由に喧嘩や別れがあった、また話すことで関係が悪くなることが不安に思っているという内容のものだ。

また、④恋人、配偶者の親や家族に反対された、反対されるのではないかという不安がある人が6.4%。

⑤結婚観への影響の中には、結婚に踏み切れない（なかった）、何となく結婚できないと思っている（いた）等のマイナスなイメージを持っている人も多くいた。(5.2%)

尚、きょうだい“結びの神”となって理想の人と出会えた、配偶者や自分の子どもによい影響を与えたという人もいて、プラスな影響があった人もいた。

図表 3-2-3 結婚への影響がありましたか。あった場合、それはどのようなことですか。

分類	人数	人数%	件数	件数%
00 影響がなかった	148	34.9		
01 影響があった	127	30		
① 配偶者に求める要素(障害のある兄弟姉妹への理解等)			39	9.2
② 結婚の物理的条件に求める要素(同居や近隣居住等)			14	3.3
③ 恋人、配偶者との関係(喧嘩、別れ)、不安			28	6.6
④ 恋人、配偶者の親や家族との関係(反対)、不安			27	6.4
⑤ 結婚観への影響			22	5.2
⑥ 障害のある兄弟姉妹が縁で結婚			4	0.9
⑦ その他			12	2.8
99 未回答、未明	149	35.1		
全体	424	100	146	

※1：件数はひとりの人が複数件に該当するケースや未記入もあるため人数とは同数にはならない

※2：件数%はサンプル数 424 を母数としてだした割合

●その他への影響があった 18.4%

図表 3-2-4 その他で何か影響がありましたか。あった場合、それはどのようなことですか。

分類	人数	人数%	件数	件数%
00 影響がなかった	97	22.9		
01 影響があった	78	18.4		
① 親への尊敬、感謝			2	0.5
② 人助け、福祉、ボランティアへの興味			9	2.1
③ 人間関係の広がり			5	1.2
④ 視野の広がり(人生観、価値観、家庭感)			8	1.9
⑤ 家族の絆の強化			5	1.2
⑥ 日常の世話の困難さ、将来の負担や不安			14	3.3
⑦ 自由な時間や行動の制限			4	0.9
⑧ 自己抑制、自己肯定感の低下			13	3.1
⑨ 社会の偏見差別、いじめ			4	0.9
⑩ 親の兄弟姉妹への言動や考えの不満			3	0.7
⑪ 家庭不和、居場所がない、団欒がない			4	0.9
⑫ 兄弟姉妹のことがいつも気になる			4	0.9
⑬ 家庭状況も含めて全てにストレス、心理的影響			4	0.9
⑭ その他			7	1.7
99 未回答、不明	249	58.7		
全体	424	100	86	

※1：件数はひとりの人が複数件に該当するケースや未記入もあるため人数とは同数にはならない

※2：件数%はサンプル数 424 を母数としてだした割合

第3節 友だちとの関係

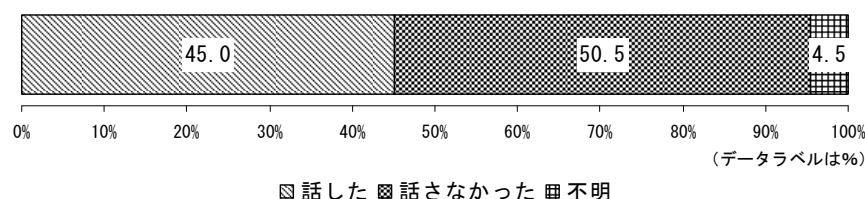
加瀬みずき

●小学生の頃、障害のある兄弟姉妹について友だちに話しをした 45%

半数の者が「友人に話さなかった」と答えており、その中でも、あえて話さない理由に「理解してもらえないから」「隠したいから」を挙げる者も少なくなかった。このことは、単に話すか話さないかの問題ではなく、「本当の自分を理解してもらえない」「本当の自分を隠す」という心理的影響が懸念される。

また、孤立や内向的行動様式にもつながりやすい。たとえば家族の機能不全度とのクロス（図表 3-3-3）により、友だちに話しをした人は話さなかった人よりも機能不全が高い数字から、家族に話せない分、友だちに話しをしている傾向があると考えられる。よって、大人が相談相手になるだけでなく、子ども同士が「話をできる場の提供」は、支援のポイントになると思われる。

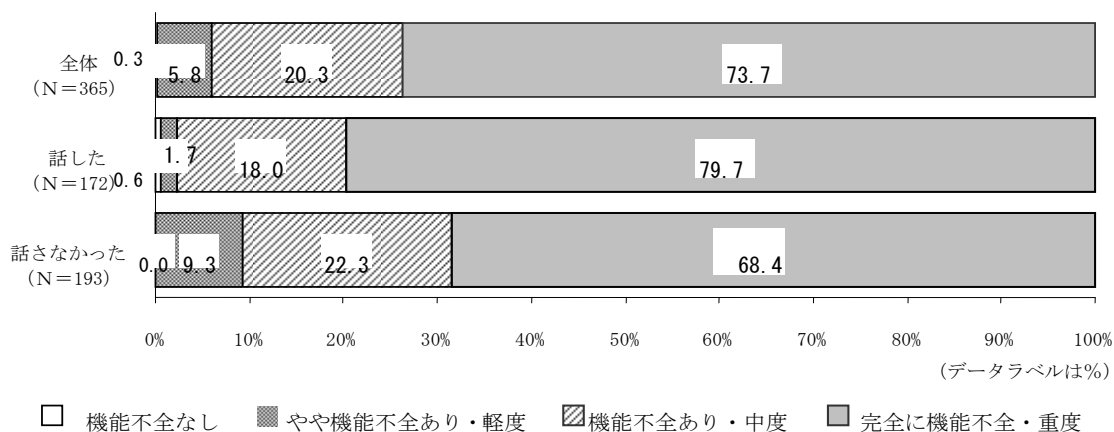
図表 3-3-1 小学生の頃、障害のある兄弟姉妹について友だちに話したか



図表 3-3-2 その理由

分類	件数	%
① 恥ずかしくないし、隠す必要はない。＜話す＞	64	22.0%
② 聞かれたら答える。話の流れで話す。＜話す＞	31	10.7%
③ 理解してもらいたいのであえて話す。＜話す＞	20	6.9%
④ 話さなくても知っている。(地域や学校が同じだから。)＜話さない＞	65	22.3%
⑤ 話してもどうせわかってもらえない。＜話さない＞	15	5.2%
⑥ 話す必要はない。＜話さない＞	25	8.6%
⑦ あえて言わない。(恥ずかしい、隠したい等)＜話さない＞	54	18.6%
⑧ その他(人によって区別した。わからない等)＜どちらとも言えない＞	17	5.8%
全体	291	100.0%

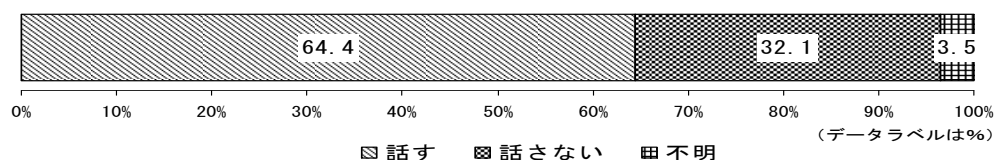
図表 3-3-3 小学生の頃、友だちに話したか × 機能不全度



●現在、障害のある兄弟姉妹について友だちに話しをする 64.4%

大人になった現在のきょうだいについては、「話す」人の割合が増えているが、依然として約3の1のきょうだいが「話さない (32.1%)」と答えている。この数字からも孤立するきょうだいの姿が浮かび上がってくるが、「話す」ことが転機となり、自分の人生を前向きに捉えなおしたり、人とつながっていったりすることも多い。「話す」ことの意味の大きさを考えると、「話すことのできる場の提供」は、大人のきょうだいの支援についても大きなポイントである。

図表 3-3-4 現在、障害のある兄弟姉妹について友だちに話す



図表 3-3-5 その理由

分類	件数	%
① 恥ずかしくないし、隠す必要はない。＜話す＞	81	27.0%
② 聞かれたら答える。話の流れで話す。＜話す＞	58	19.3%
③ 理解してもらいたいのであえて話す。＜話す＞	49	16.3%
④ 話す必要はない。＜話さない＞	34	11.3%
⑤ あえて言わない(言いたくない。相手の反応がこわい等)＜話さない＞	32	10.7%
⑥ 親しい人や限られた場だけで話す。	33	11.0%
⑦ その他	13	4.3%
全体	300	100.0%

■障害のある人のきょうだいは、幼い頃から、社会の差別や偏見、独特な家族関係、情報不足などの負荷を受け続けており、そのことが人間形成に与える影響は大きい。しかし、きょうだいは、ハンディをプラスに捉える意志や前向きに生きる力をもっている。

きょうだい支援について、幼いきょうだいに対しては、早い時期から、これらの負荷を少しでも軽減するための援助をすることが大切である。大人のきょうだいに対しては、「転機」という視点が有効である。情報提供や心理的支援が望まれる。

第4節 将来の世話について

植木きよみ

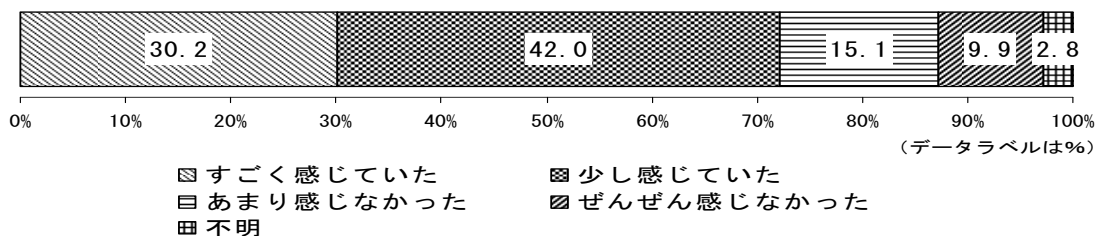
●小学生の頃、将来面倒を見なければいけないと感じていた 72.2%（「すごく感じていた」＋「少し感じていた」の%）

程度の差はあれ 75.1% のきょうだいは子どもの時から障害のある兄弟姉妹の面倒は見るものと思っている傾向にある。特に姉では面倒をみなければならぬと「すごく感じていた」と 37.5% がと回答している。逆に「ぜんぜん感じなかった」と回答したものは 5% と他の立場のきょうだいに比べて半分以下である。このことから、姉の多くは母親的の代わりを担うと考えられる。（図表 3-4-2）

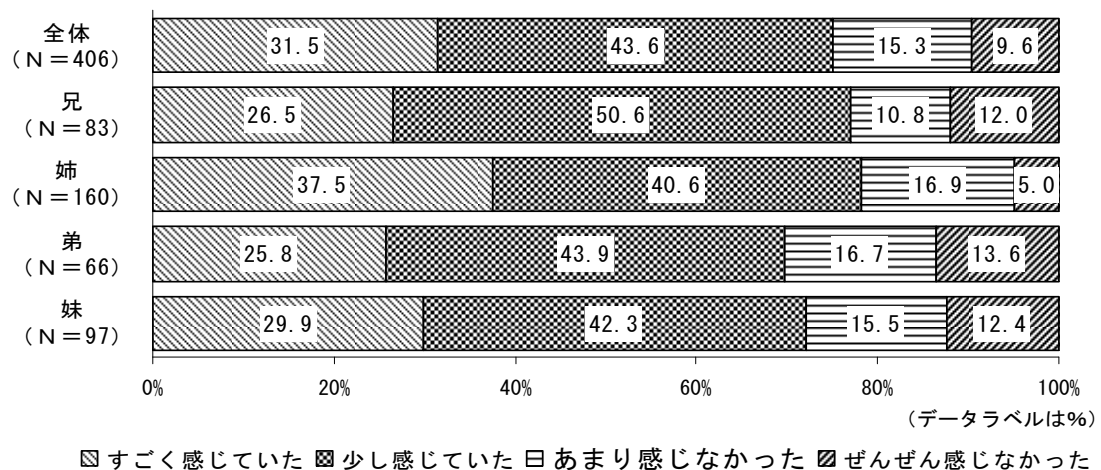
また、小学生の頃に兄弟姉妹の面倒をみなくてはならないと感じていた割合が、年代によって異なるのかどうかを検討した。「少し感じていた・すごく感じていた」と回答した割合は、60 代以上で 39.3%、50 代で 23.8%、40 代で 30.0%、30 代で 15.1%、20 代で 29.7%、10 代で 27.3% となっている。（図表 3-4-3）

これは、社会背景や家族関係の影響もちろんあるであろうが、図表 3-4-2（障害のある兄弟姉妹からみた自分の立場×小学生の頃、面倒を見なければいけないと感じていたか）のクロス集計で検討したように、きょうだいの性別や立場の影響が大きいと考えられる。

図表 3-4-1 小学生の頃、将来面倒をみなければならぬと感じていた



図表 3-4-2 きょうだいの立場（不明 9 件除く）× 将来面倒をみなければならぬと感じていた（不明 16 件除く）



図表 3-4-3 将来面倒をみなければならないと感じていた（不明 12 件を除く）
×年代（不明 5 件を除く）

	合計	10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代以上
すごく感じていた	127	1	30	44	25	20	7
	31.1	9.1	21.7	37.0	35.7	47.6	25.0
少し感じていた	177	7	67	57	24	12	10
	43.4	63.6	48.6	47.9	34.3	28.6	35.7
あまり感じなかった	63	0	27	15	9	6	6
	15.4	0.0	19.6	12.6	12.9	14.3	21.4
ぜんぜん感じなかった	41	3	14	3	12	4	5
	10.0	27.3	10.1	2.5	17.1	9.5	17.9
合計	408	11	138	119	70	42	28
	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

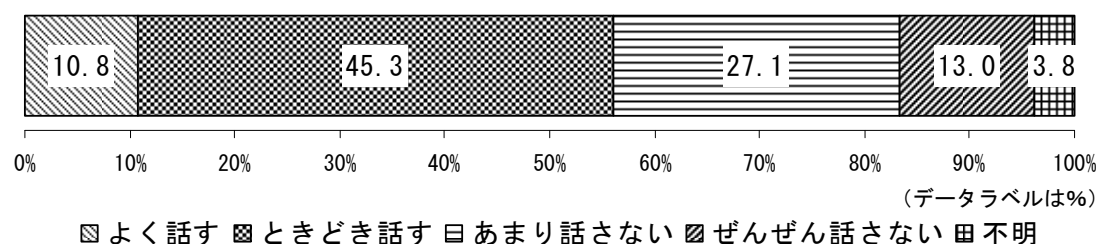
（各項目の 1 行目はサンプル数、2 行目は全体％）

●親が面倒をみれなくなった場合のことを、親と話し合っている 56.1%（「よく話す」+「ときどき話す」の％）

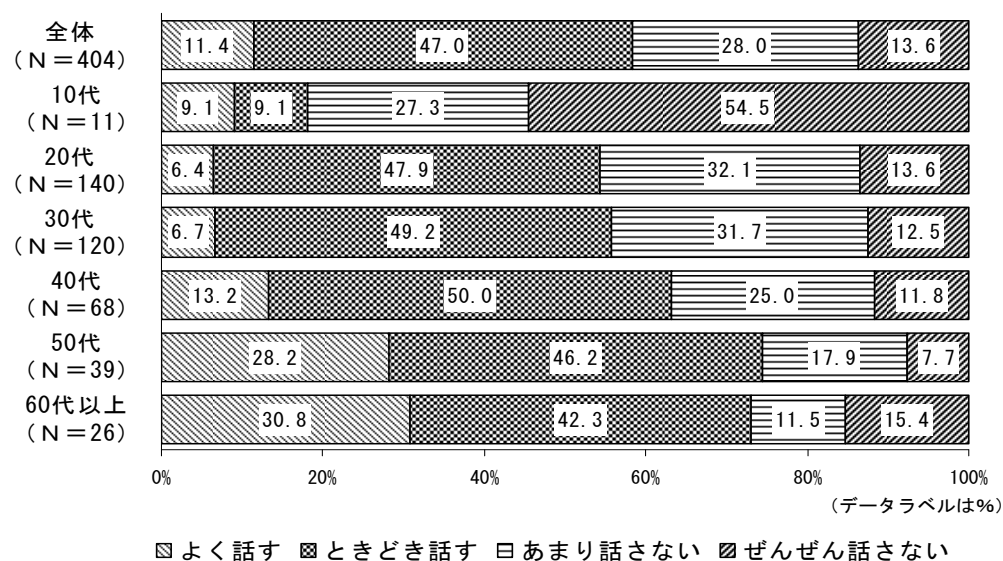
親が面倒をみられなくなった場合の兄弟姉妹の介護について親とよく話し合うかとの問いに対しての回答は、10 代では「ぜんぜん話さない」・「あまり話さない」と回答したものが合わせて 81.8%であるが 20 代になると 45.7%と突然少なくなる。これは、10 代ではきょうだいも未だ親の保護下にあり介護について考慮するにいたっていないことが考えられる。20

代になると親の年齢が上がるのとともに、障害のある兄弟姉妹の受け入れ先は学校から社会へと変化し、きょうだい自身も進路・結婚などの問題も含め、兄弟姉妹のその後の介護が現実的に目の前に見えてくるのではないだろうか。同様に 40 代では 36.8%、50 代では 25.6%と数値はさがる。この年代では親が兄弟姉妹の面倒を見るのが難しくなっていることが考えられ、必然的に兄弟姉妹の介護について話し合うようになることが推測される。（図表 3-4-5）

図表 3-4-4 親が将来面倒をみれなくなった場合のことを親と話し合っている



図表 3-4-5 年代（不明 5 件を除く）×親と話し合っている（不明 16 件を除く）



●自分が面倒を見る 25.9%

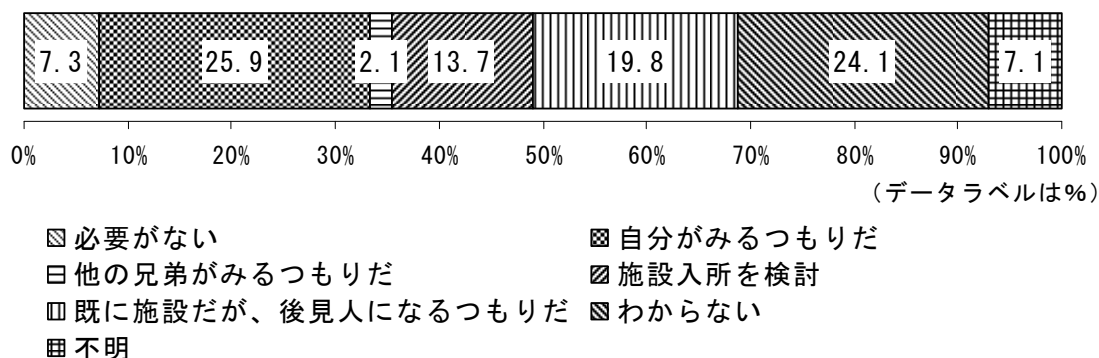
あなたはその兄弟姉妹の介護や面倒をみま
すかの問いに対し、「みるつもりだ」と回答
したのは兄 32.1%、姉 31.1%、弟 28.1%、妹
19.6%。「施設に入っているが後見人になる」
と回答したのは兄 23.1%、姉 23.2%、弟 14.1%、
妹 21.6% となっている。この結果から、年長
の兄・姉は兄弟姉妹の面倒を見ていこうと考

えている傾向が大きいことがうかがえる。

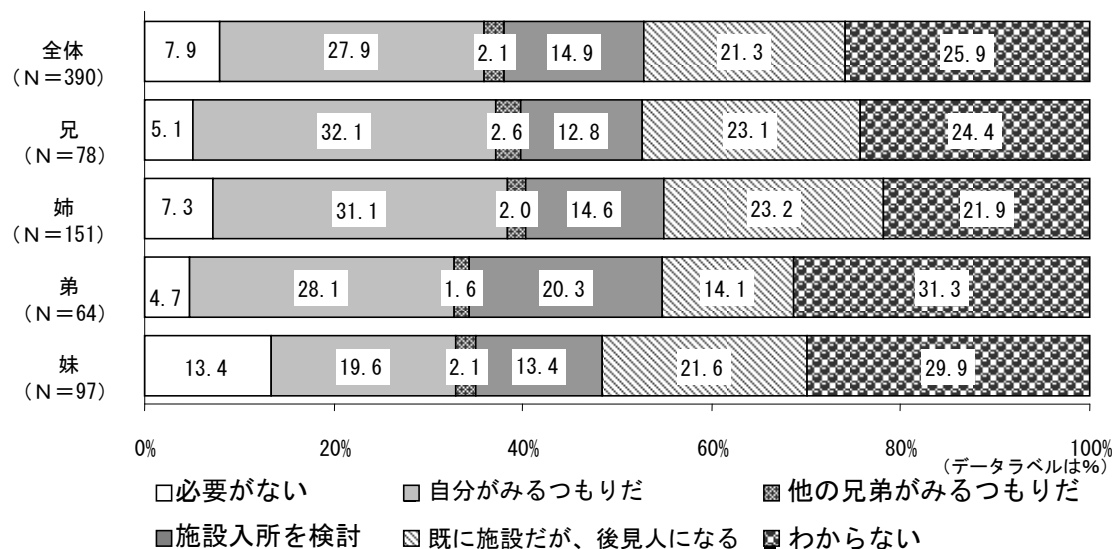
また、第 2 章第 1 節で A C のタイプ別につ
いて検討したが、「世話役」タイプのきょうだ
いが多かったことは、全体的に「面倒を見る」
と答える傾向が高いことを裏付けていると言
える。(図表 3-4-6)

そのことについて不安を感じているかの問
いに対し、「すごくある」と「少しある」が
75.5%と大きく占める。(図表 3-4-8)

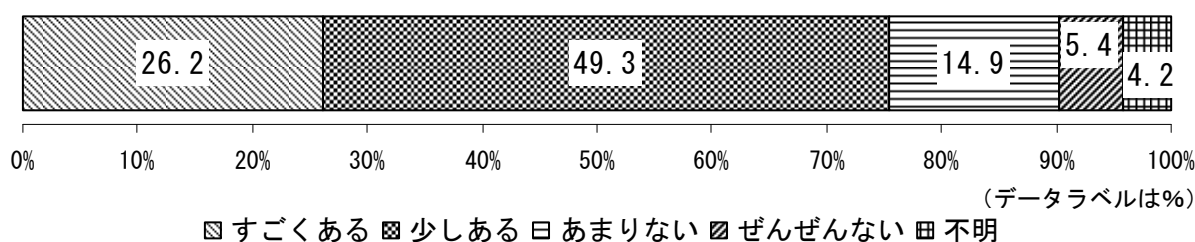
図表 3-4-6 あなたは兄弟姉妹の介護や面倒をみるか



図表 3-4-7 きょうだいの立場（不明 9 件を除く）× 自分が面倒をみる（不明 30 件を除く）



図表 3-4-8 兄弟姉妹の面倒をみることに不安を感じているか



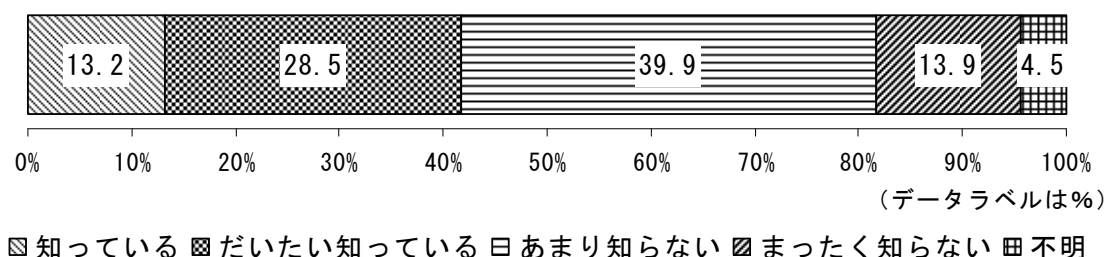
●兄弟姉妹が自立生活をする手段を知っている 41.7%（「知っている」+「だいたい知っているの%）

兄弟姉妹が自立生活をする手段を知っていますかの問いに対し、医療・教育・福祉関係に関わっているきょうだいとそうでないきょうだいの認知度の差をみた。医療・教育・福祉関係に関わっているきょうだいは 62.5%

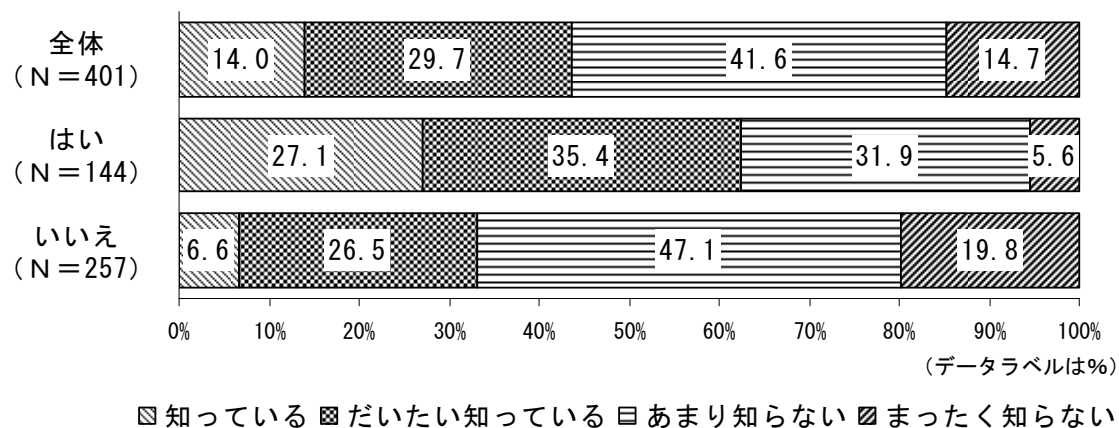
の人が「知っている」・「だいたい知っている」と答えているのに対しそれ以外の人たちでは 33.1% と極端に少ない。これは社会のサポートシステムの情報が、医療・教育・福祉などの分野に関わっていない場合には得にくいということを示している。（図表 3-4-10）

また、情報を得たことで 55.9% の人たちが将来の負担感は軽減したと答えている。

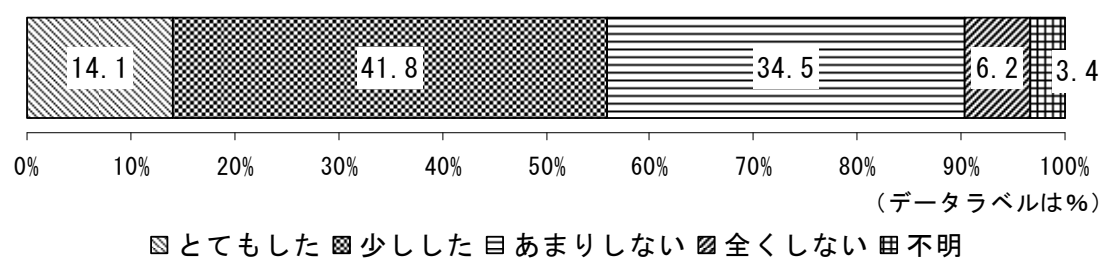
図表 3-4-9 兄弟姉妹が自立自活（施設の利用も含む）するために必要な情報を知っている



図表 3-4-10 医療・教育・福祉関係に関わる仕事をしているか（不明 10 件を除く）
 × 兄弟姉妹が自立自活をするために必要な情報を知っている（不明 19 件を除く）



図表 3-4-11 兄弟姉妹が自立自活をするための情報を得ることで、将来の負担感が軽減した



第5節 障害のある兄弟姉妹が家族にいること

植木きよみ・吉川かおり

●障害の発生を知った時の思い（問14 自由記述）

「特になにも思わなかった」という回答が42.8%と多くなっていたのは、兄弟姉妹の障害が先天性で、何となくわかっていたという場合が多かったからであると考えられる。また、きょうだいが年下で、兄弟姉妹に障害があるのが当然（ふつう）という環境だったという場合もここに含まれている。何らかの負の感情を感じたという回答は23.9%であった。（図表3-5-1）

以下、各分類項目について詳述する。

「障害のある兄弟姉妹のことについて何かしら思った」という回答のうち、「守ろうと思った」は、世話をしよう・かわいがろう・力になろうと思った、等と回答していた場合をさし、「不思議だった」は何となく変だと思ったという場合をさしている。同じく「嫌だった」は、すごいショックだった、悔しかった、とても嫌だった、等と回答したものである。

「自分のことや今後のことを思った」という回答のうち、「（家族内に対して）プレッシャーや負い目を感じた」は、自分がしっかりしなければ・面倒をみなければ・自分が健常で申し訳ない、等と回答した場合をさしており、「（家族外に対して）プレッシャーや負い目を感じた」は、はずかしい・他の家族がうらやましい・なぜうちだけ・みじめ・辛かった、等と回答した場合である。「嫌ではなかった」は、特にいやだとは思わなかった、という場合である。

「親の姿勢に感じるものがあつた」は、親が苦勞するだろうなと思った・母がかわいそうと思った、等と回答した場合である。（吉川かおり）

図表3-5-1 兄弟姉妹が障害があるとわかった時、どのように思ったか（記述）

分類	件数	%
① よく分からなかった	7	2.2%
② 特に何も思わなかった	136	42.8%
③ 覚えていない	25	7.9%
④ 障害のある兄弟姉妹のことについて思った(+)守ろうと思った	21	6.6%
⑤ 障害のある兄弟姉妹のことについて思った(+-)不思議に思った	5	1.6%
⑥ 障害のある兄弟姉妹のことについて思った(-)嫌だった	36	11.3%
⑦ 自分のことや今後のことを思った(-)プレッシャーや負い目を感じた(家族内に対して)	26	8.2%
⑧ 自分のことや今後のことを思った(-)プレッシャーや負い目を感じた(家族外に対して)	14	4.4%
⑨ 自分のことや今後のことを思った(+)嫌ではなかった	5	1.6%
⑩ 親の姿勢に感じるものがあつた	8	2.5%
⑪ その他	14	4.4%
⑫ 治るだろう	11	3.5%
99 非該当	10	3.1%
全体	318	100.0%

●小学生の頃、「他の家族とうちは違う」と感じた点（問 15 自由記述）

「何らかの形で違いを感じた」ものが 64.6%、「特に感じなかった」ものが 33.8%となっており、多くのきょうだいが何らかの形で「違い」を感じていることが明らかになった。（図表 3-5-2）

その違いを、肯定的に評価している場合もあれば、否定的に評価している場合も見られた。肯定的評価としては、「家族関係や雰囲気が違った（+）」として分類されている「家族がまとまっていた・強いきずながあった・仲が良かった」という回答、「行動範囲や生活体験が違った（+）」として分類されている「行楽地のアトラクションに優先的に乗れる」といったものが挙げられる。

しかしながら、違いの多くについてきょうだいは否定的な評価をしている様子である。具体的には、「家族関係や雰囲気が違った（-）」として分類されている「親の仲が悪かった・沈黙と暗い雰囲気・見えない壁がある・不幸な呪われた家族と感じた」という回答、「行動範囲や生活体験が違った（-）」として分類されている「家族旅行に行けない・ペットが飼えない・白い目で見られる・親の実家への出入り禁止・家に人を招くことができない・外出しても楽しめない・一時帰宅の世話で追われるので季節行事ができない」といった回答、「親との関係や日常生活が違った」として分類されている「親に甘えられなかった・障害児中心に生活が回っていた・家事の手伝いが多い・自由がない・健常なきょうだいばかり期待をかけられた・家は落ち着ける場所ではなかった・家族がお互いに接する時間がなかった・きょうだいが疎外されていた」といった回答が、その例として挙げられる。

また、「他の家族は幸せそうにみえた」という分類には、「何でも話せる関係がある・家庭に明るさや優しさがある・母親に余裕がある・子どもにやさしい」といった回答が含まれており、きょうだいが感じている「他の家族との違い」の「否定的側面」については、合致していると言えることができると考えられる。（吉川かおり）

図表 3-5-2 小学生の頃、「他の家族とうちは違う」と感じた点（記述）

分類	件数	%
① 特に感じなかった	102	33.8
② 負の感情を感じた	14	4.6
③ 家族関係や雰囲気が違った(-)	18	6.0
④ 家族関係や雰囲気が違った(+)	16	5.3
⑤ 親との関係や日常生活が違った	35	11.6
⑥ 行動範囲や生活体験が違った(-)	37	12.3
⑦ 行動範囲や生活体験が違った(+)	1	0.3
⑧ きょうだいの関係やおかれている状況が違った	41	13.6
⑨ 他の家族は幸せそうに見えた	12	4.0
⑩ その他	18	6.0
⑪ 何もかも違う	3	1.0
99 非該当	5	1.7
全体	302	100.0

●障害のある人や家族が幸せに暮らすため、社会の変化への希望（問 16 自由記述）

回答の中からいくつかのキーワードを抽出し6グループにまとめた。それぞれの回答の中から6グループに値するキーワードを拾い出し複数回答として集計した。（表 3-5-3）

その結果約半数の人々が「障害者に対する理解を広め、偏見差別をなくす」45.9%ことを希望していることが分かった。次いで「障害者に対する社会的援助を充実する」28.1%、「社会行政のあり方を障害者や家族に優しく」13.7%、「障害者だけでなく、家族（両親・きょうだい）への支援がほしい」3.9%、「福祉に関する人的リソースの充実」3.6%、「その他」4.9%という結果を得た。

2006年度に行われた（社）全日本手をつなぐ育成会が行った「知的障害者の権利擁護（成年後見制度）に関する実態調査」において「本人の安心した暮らしの実現に必要なこと」の設問に対し、32.0%の人が地域社会の障害への理解を求めている。この調査によると一番多かった回答は「充実した福祉制度」40.3%である。

両者の要望の一位が逆転していることは興味深い結果と考える。（社）全日本手をつなぐ育成会が行った調査では主に親が回答者となっている。つまり、親にとって充実した社会制度は必須の事項であり、ある意味で障害のある人と同じ視点に立っていると考えられるきょうだいしまいにとって社会の障害への理解は切実なものとなっているのではないだろうか。同様に（社）全日本手をつなぐ育成会が行った調査において「高齢化時の不安」と「本人の将来について心配な点」のクロス集計によると「生活面における人的・質的不安」が高い割合を示しており、本調査における「福祉に関する人的リソースの充実」と異なった結果を得ている。これも、親の立場ときょうだいの立場の違いを示したものではないかと考える。

なお、本調査での「障害者に対する社会的援助を充実する」と「行政のあり方を障害者や家族に優しく」を合わせると41.8%となり親と同様に社会行政からのさらに多くの援助が必要であることを表している。

また、家族は障害のある人がいることによって起こる様々な社会的不利益に対し自ら一つずつ対処していかなければならず、かつ支援をどこに求めたら良いのかがわからない状況にあり（きょうだいにとっては特に）「家族に対する支援」を求める声も切実なものと思われる。

近年、障害のある人に多くの社会の目が向けられるようになってきているが、未だに社会の障害のある人とその家族への理解、偏見差別の解消さらに障害者支援制度・社会的援助が十分であるとは言えずより多くの理解や制度援助の充実が必要なが分かった。（植木きよみ）

図表 3-5-3 障害のある人や家族が幸せに暮らすために、社会はどのように変われば良いか

分類	件数	%
① 障害者に対する社会的援助を充実する	109	28.1%
② 障害者に対する理解を広め、偏見差別をなくす	178	45.9%
③ 福祉に関する人的リソースの充実	14	3.6%
④ 社会・行政のあり方を障害者や家族に優しく	53	13.7%
⑤ 障害者だけでなく、家族（両親・きょうだい）への支援がほしい	15	3.9%
⑥ その他	19	4.9%
全体	388	100.0%

【参考資料】

・（社）全日本手をつなぐ育成会（2006）知的障害者の権利擁護（青年後見制度）に関する実態調査

「障害者家族」について

講師：末盛 慶氏

日本福祉大学准教授

1. 家族とは何か一時代により変化するもの

ひとは家族にいろいろな思いを寄せます(多様性)。その一方で、家族は「こうであるべきである……」という意識(規範)もわれわれの中にあります(共通性)。

例えば、「現在、家族に求めるものは？」と聞かれると、多くの人が「安らぎ」と答えます。

しかし、安らぎをもたらすものとして「家族」が位置づけられるのは、あくまで近代化、産業化した以降生まれたもので、人類史的には新しい家族です。これが現在の社会学における一般的な家族の位置づけ方と言えます。日本の歴史においても、われわれが現在家族に込める期待や規範というものは、比較的新しい家族観、例えば家族に「安らぎ」を求めるというのは新しい感性であって、日本にとって伝統的なものとは必ずしも言えません。

昔、家族は「安らぎ」の場である以上に、生産(経済)の場、食べていく場でした。みな畑で働き、農作業をし、生活を共にしながら過ごすこと。それが家族だったわけです。そこで大事なことは、まずは生産の維持であり、家の跡継ぎを絶やさないことでした。家族がもつ意味、社会の中での位置づけは現在のものとは異なっていました。

社会学者オグバーンは、近代化前の家族は、経済、地位付与、教育、保護、宗教、娯楽、愛情という7つの機能があったが、愛情以外の6つの機能は近代化の中で企業、学校、病院などの専門的な制度に吸収されていったと論じました。

こうした議論を家族機能縮小論とも言います。これについてはいろいろ議論があります

が、産業化する中で家族の機能が1つ1つ外部化されていくというのが社会学における伝統的な見方でしょう。例えば、介護は家族で抱えていたが、介護保険ができて、ある程度外部化が可能になる。育児に関しても保育所というかたちの外部化の方向を見出すことができます。もちろん高齢者や乳幼児も依然として家族に頼っている面が多いと思いますが、外部化の動きもある。どこでケアを行うか？

ということは基本的に流動的なわけです。したがって、家族の機能に何らかの本質を求めるのは難しいというスタンスを現在の家族社会学ではとることが多いと思います。

このように産業化した以降に生まれた家族のことをそれまでの家族と区別する意味で、近代家族といいます。

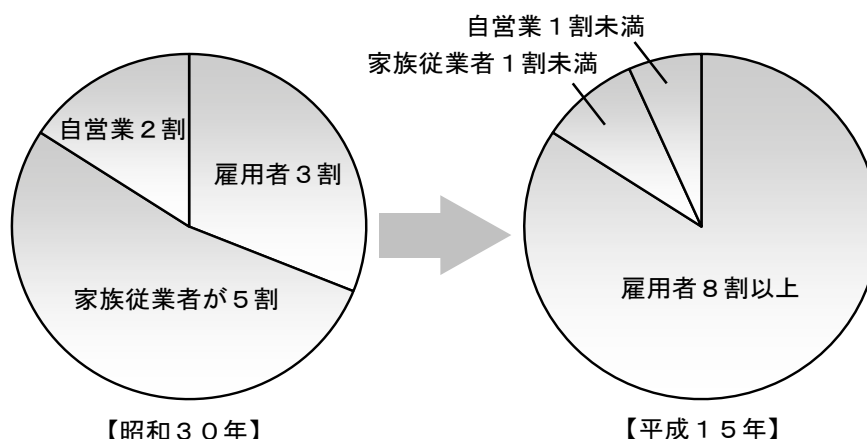
2. 変化の原因は産業化

近代に特徴的な家族なので近代家族と呼ぶわけです。では、どのようにして近代家族が形成されてきたのでしょうか？

原因としてはさまざまなものが考えられますが、端的に言うならば、近代化した結果、産業構造が変わり、家族はその影響を受けたというのが通説になっています。以下、具体的にみていきましょう。

かつて日本の産業は農林漁業が産業の中心でした。当時の経済活動の水準は低く、貧困もいま以上にありました。しかし、日本は高度成長期をへて急速に豊かになっていきました。畑で働く人は減り、会社等で働く人が増えていきました。つまり農業など営んで家族みんなで働くというあり方から、企業組織で

女性の就業上の地位の変化（総務省「労働力調査」）



働きそこで稼いだお金で家族を養う形へ大きく転換しました。この産業構造の転換は家族に決定的な影響をもたらしたと考えられています。

現在、われわれは、人類史上さまざまにありえた家族の中でも、産業化した以降生まれた近代家族（あるいはそのバリエーション）を生活していると言えます。

例えば、次のデータをみると、昭和30年頃女性の就業上の地位として半分以上が家族従業、あるいは自営業を手伝っていました。しかし平成15年には8割が雇用者ということで、女性の働き方が大きく変わったことが伺えます。

同時に、性別役割分業がわが国において一般化するのも、産業化の動向と歩調を合わせています。

高度成長期において、わが国の女性の主婦化が進んだことを家族社会学の研究者（例、落合恵美子）などが明らかにしています。

家族社会学では「主婦はいなかった」というややショッキングな言い方をすることもあります。この主張は家族社会学あるいはジェンダー研究における代表的な知見の1つになっています。

諸説ありますが、日本においてははじめて主婦が誕生するのは大正時代頃と言われています。しかし、その時代的主婦は本当に一部の人のみになっているだけで、社会全

体として主婦が誕生してくるのは、戦後特に1955～75年の間の高度成長期のことだと指摘されています。オイルショック以降は、パートタイマーという形で有配偶女性の就業率が上がってきますので、「働きながら、性別役割分業を維持する」という形が現在の一般的なあり方になっているかと思います。

産業化した社会において誕生したやすらぎの家族でありかつ性別役割分業型の家族が、現在われわれが抱く家族イメージの元になっていることが少なくありません（外で働くお父さん。家庭でがんばるお母さん）。しかしこうした家族は、あくまで1955～75年くらいの約20年間の間に形成されたもので、日本にとって必ずしも伝統的な家族とはいえません。

3. 家族関係に関する諸理論

ここまで、社会学的な視点にもとづいて、家族を見てきました。以下では、障害者家族に援用が可能と思われる家族関係に関する諸理論に焦点をあてます。ここでは3つのアプローチを紹介します。

（１）家族システム理論

主に家族心理学、家族臨床学の分野で大きな勢力をもっている理論です。家族支援に関する諸理論の中でも、もっとも影響力をもってきたのはこの家族システム理論といえます。文化人類学者であるベルタランフィーが構築

したシステム理論を家族にあてはめたのが家族システム理論です。システムとして家族を考えた場合には、以下のような見方が導かれます。

家族とは単なるメンバーの集まりではなく、それらの人々が作る関係やパターンをもったまとまりであり、個々人を部分として取り出して理解しようとしても不十分である。

例えば、父母と子ども2人（兄、弟）の4人家族がいたとします。仮に弟さんが不登校だったとします。通常の間考え方であれば、カウンセリング等の心理的な支援を弟さん、および現代では養育上の担い手となることが多い母親に提供することなどが考えられます。

家族システム理論では、こうした個人に焦点をあてたアプローチには限界があると考えます。（家族全体を視野におさめておらず、根本的な改善を期待できない）。家族システム理論の場合、家族成員全員に聞き取りを行い、家族成員同士の関係のパターンを把握します。聞き取りの結果、例えば、父親が弟に対して厳しい期待や要求を重ねていたことが、母および兄の聞き取りで見えてきたとします。その場合、介入すべきは、不登校をしている弟ではなく、父親と弟の関係そのものということになります。家族システム理論の視点を採用することで、介入するターゲットを新たに発見することができます。

通常、不登校している男の子がいたら、彼自身が問題を引き起こしていると考えがちですが、家族システム理論の場合、彼は家族内のコミュニケーション・パターンの犠牲者になっているという見方を採ります。彼自身が問題を持っているのではなくて、家族システムの問題が（弟さんの）不登校という形で顕在化したと考えるわけです。

（2）ABC-Xモデル

家族ストレス論として有名なのがこのABC-Xモデルです。

このモデルの特徴は、出来事と危機を峻別したことです。Aが出来事です、これがすぐ危機につながるのではなく、家族の対処資源、出来事に関する家族の意味づけによって、危機になるか否かがわかれるというものです。

それまでのストレス論は、例えば、何か否定的な出来事の発生＝ストレスというモデルで考えられていました。しかし、家族ストレス論を生み出した、ルーベン・ヒルは出来事と危機は必ずしもイコールではないと考えました。

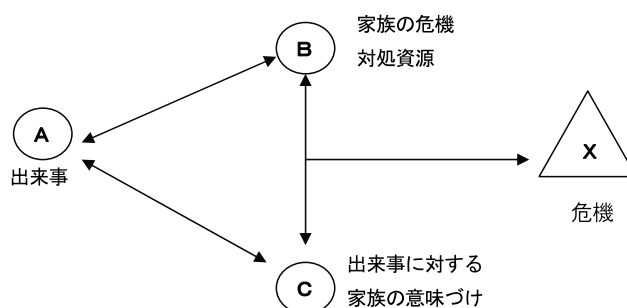
ヒルは第二次世界大戦の帰還兵の研究をしていました。同じように戦争の帰還兵を抱えた家族の中でも、出来事に適応している家族と適応できていない家族がいるということが見えてきました。

つまり、戦争での経験が必ずしも家族危機とイコールではないということをつかみ始めるわけです。同じような部隊で同じように厳しい経験を戦地で経験しているはずなのに、ある人はうまくいって、ある人はうまくいってないというのはなぜなのだろうか？というのが研究の発端だったわけです。

検討の結果、2つの要因が見えてきました。1つがBの家族にある危機対処資源でした。これは、どのくらいその家族に経済的／非経済的な資源があるかどうかということを意味しています。もう1つはこの出来事に対する家族の意味づけがどういうものか、というものです。つまり、お父さんは大変な思いをしていまは混乱しているけれども、何とかやっていけると家族が認識しているか、していないか？ということが危機につながるかを左右していたということです。

出来事、家族の対処資源、そして意味づけ。これらの3つの要素が相互作用して、その家族が危機になるか否かを決めていく。これがABC-Xモデルの基本的な概念枠組になっています。

このモデルにもとづけば、何かストレス源



【ABC-Xモデル】

になる出来事が起きた場合、家族の対処資源を提供すること、そして家族成員の認知（何とかのりきれそうだ）を変えていくのが重要だということになります。

ABC-Xモデルとともに有名なのがジェットコースターモデルです。これは危機にあった家族の対応のパターンを示したものです。家族が危機に直面したときは危機⇒組織解体⇒回復⇒再組織化という軌跡を描いて危機に対応していくというものです。

(3) ナラティブ・アプローチ

これまで紹介したモデルは「理論を用いて個々の現象を理解していく」という形になっていました。加えて「このような専門的な知を得た者がニーズのある個人・家族を支援する」という隠れた前提もありました（例、家族システム理論に習熟した専門職者がクライアントの相談に乗る）。

しかし、近年では、理論がもつ限界性や専門職と家族（あるいは個人）の関係を反省的に考えようとする動きが生まれてきています。

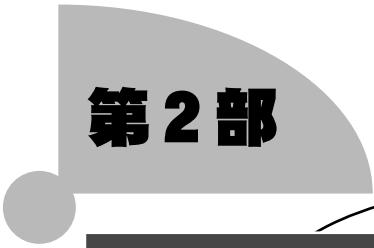
背景の1つは、専門職が過剰に家族や個人に介入してしまう事態への問題意識です。虐待などがわかりやすいのですが、あまり専門職の介入を許容すると、家族の自由さや気楽さが失われてしまう可能性があります。もう1つは、先も申したように、「理論によって個人の状況を説明する」というモデル自体に対

する批判・内省があります。

こうした流れの中で、カウンセリングや家族療法の分野で注目を集めているナラティブ・アプローチがあります。このアプローチは、これまでの専門職の支援のあり方ではどうしても「支援する人－支援される人」という位置関係（支配－被支配関係）に陥り、そのことが実りのある支援を妨げているのは？という問題意識から生まれてきました。

そこで、専門的な知識などは一端脇に置いて、患者と専門職者が対等に語り合い、自由に「物語」を共同して作り上げていくことで、治癒を行っていくスタイルを打ち出そう、というのがナラティブ・アプローチです。ここでいうナラティブとは、「出来事、経験の具体性や個別性を重要な契機にして、それらを順序立てることにより成り立つ言明の一形式」です（野口2005）。

本アプローチは、理論や社会規範が作り出す「ドミナント・ストーリー」から抜け出し、各個人の具体的な経験のもとづく「オルタナティブ・ストーリー」（自分のストーリー）の重要性を主張しています。専門職としての権威や専門的な知識がクライアントにとってある種の「押し付け」になることの反省から生まれたアプローチで、現在注目を集めています。



第2部



障害者のいない家族との比較編

「不登校児やひきこもりの子どもがいる家族」について

講師：西野博之氏

NPO法人フリースペースたまりば理事長

●フリースペースたまりば

私は21年前から不登校児に関わり、16年前の1991年に不登校児の居場所として川崎市高津区に「フリースペースたまりば」を開設しました。2000年に川崎市子どもの権利に関する条例が作られ、その27条（1. 子どもには、ありのままの自分であること、休息して自分を取り戻すこと、自由に遊び、もしくは活動すること又は安心して人間関係を作りあうことができる場所（以下「居場所」という）が大切であることを考慮し、市は居場所についての考え方の普及、並びに居場所の確保及びその存続に努めるものとする。2. 市は、子どもに対する居場所の提供等の自主的な活動を行う市民及び関係団体との連携を図り、その支援に努めるものとする）に基づいて、子ども夢パークが2年半後に出来て、この中に日本初公設民営型の不登校児童生徒のための「フリースクールえん」を開設しました。この「フリースペースえん」の管理運営をNPO法人の「フリースペースたまりば」が行うようになり、2006年からは、指定管理者制度で「川崎市子ども夢パーク」全体の管理運営にあたっています。私は夢パークの所長も務めています。

子ども夢パークは、子ども達が生き生きと遊ぶ体験が出来るフリーな場所ですが、実際には乳幼児から高齢者まで様々な方々が利用しています。もちろん障害児にも開かれた場所になっていますが、身体障害児にとっては、段差があったところにあたりと、ハード面でのバリアが多いです。それでもバリアをバリアとしないその子なりの遊び方や力が生まれるのではないかと考えています。

現在たまりばには6歳から39歳の子どもたちが毎日30から40名通っています。公的機関で居場所が見出せない子ども、学校に行けないでいる子どもや非行に走った子ども、発達障害や精神疾患のある子ども等、年齢や背景、しよっているものもそれぞれ違う様々な人達が集まり、彼らの居場所となっています。

●不登校児の家族について

さて、今回の本題でこのレジュメに「不登校児やひきこもりのいる家族」とありますが、不登校児の家族というものはありません。たまたま今子どもが学校に行っていないだけで、その期間だけ不登校児ということで、しばらくして自ら学校に行き、就職する子どもも多くいます。また、ひきこもりは不登校の延長といわれることがあります。今まで多くのケースをみてきた実感として、必ずしもそうではありません。むしろ学校に過剰に対応してきた子どもたちが大人になって何かのきっかけ、たとえば、仕事での挫折や人間関係、失恋等によってひきこもるケースが多いように思います。

では、不登校とひきこもりの違いは何でしょう。まわりの大人が都合が良いように作ったことばだと思います。こっちが不登校、こっちがひきこもりだとはっきり分けることができません。なので、たまりばは今、自分の居場所を見出せない人のための場所で、誰もがいたることが出来るみんなのスペースなのです。自由に過ごせる時間とスペースがあって、そこで人と人が出逢い、それぞれが育ちあう場を作っていきたいと思っています。

さて、ここの子どもたちの家族についてですが、子どもを通して出会っているのですが、「フリースペースえん」に利用登録するには、基本的に親との面談が最初に必要なので、まずは親との出逢い、相談からスタートします。この場だけでなく今までに、「不登校の親の会」にも参加したり、長年親の相談を聞いてきたので、親の悩みは様々で深刻なものも少なくありません。

【問】私は障害児の親でして、真ん中の障害のある子ども中心の生活をしてきたので、その間、他のきょうだいをかまっていあげることができませんでした。そのきょうだいと思春期を向かえた時、きょうだいの悩みやストレスを知り、親としては非常にショックを受けたわけです。上の子から「自分の苦しさをわかってくれる人は誰もいない」と言われ、下の子は兄の能力を超えることに悩み、友人に兄を見られたくないと一緒に行動することを嫌がり、障害のないきょうだいたちも悩み苦しんでいたことを知りました。親としてどのようなサポートをしてあげたら良いのか。そこで、同じように感じているきょうだいたちがいるならば支援する必要があるのではないかと考えたわけです。今日は障害児のきょうだいだけでなく、子どもに関する問題とされる家族にも共通する現象や実態があるとすれば問題解決の手がかりになるのではということで、多くの不登校児の家族と接してきた西野さんにお伺いしているのですが、その辺のところいかがでしょうか。

【西野氏】上の子が不登校になって、下の子には「あなただけは学校に行きなさい。」と親から言われた下の子どもの悩むケースがあります。「何でおにいちゃん学校に行かないのに、私は行かなくてはいけないの。」と。親はひとりの子どもが思い通りにいかないと、違うきょうだいに期待をすることが多々あります。日本社会では、学校に行かないことは悪いこと、あってはならないこととされる風潮があるので、子どもが不

登校になると親は周りから「育て方が悪い」、姑からは「嫁の血が悪い」とまで言われるなど、特に母親への責任追及が始まります。なので母親はきょうだい全員が不登校児になれば、親の評価がもっと悪くなるので、「お兄ちゃん分まで頑張れ。」ということになるのです。

周りの無理解が親を苦しめ、きょうだいに、また不登校児にも過剰な期待をかけてしまうことになるのです。地域ですべての子どもたちを守り、育てあう社会であれば、このような現象は起こらないと思います。

子どもが親や教師に言いたいことのベスト1は「比べないでくれ」ということです。「どんな状態であっても、私は私でいいと何で言ってくれないのか」と子どもたちは心の中で叫んでいます。子どもたちは絶えず、きょうだいや友だち、親戚、周りの人たちと比較されて生きており、その結果、自分に自信が持てず、自尊感情が貧しくなっていくのです。

親の多くは世間の目や他からの評価を気にしながら子育てをしています。目の前の子どもがどうしたいのか、どうありたいのかよりも、その子の行動が世間の「常識」の範疇に入るか否かを問題にしています。そこからはみ出すことは親の役割として、管理、制限しなければならないと考えていますが、このときの「常識」というものがあやふやなものが多いのです。「世間体」や「常識」に縛られ、子どもの声が聞こえなくなり、存在が見えなくなっている親によって子どもは追い詰められ、ますます自信を失い、自分の存在すら否定するようになるのです。

小、中学生へのある調査で、「生きていてもしょうがない」という問いに、「いつもそうだ」「ときどきそうだ」と答えた子どもが18.8%もいるという結果が出ており、5人に1人が「生きる」ということそのものを肯定できない社会を生み出しています。同じく、小、中学生の自殺は年間に95人もいて、4日に1人が命を落としています。ちなみに、小学生から大学生までの自殺者は886人いたそうです。実際に自分が関

わたったこの20年のうち5人の子どもが自殺しています。家庭の中でさえ、「そのままのあなたでいいよ、いきでいていいんだよ、生きているだけですごいんだよ。」というメッセージが受け取れずに苦しんでいる子どもたちが多くいることを知ってほしいと思います。

さて、不登校の子どもがいる家族がどうなっていくかということが大きく2つに分かれると思います。

1. 子どもの不登校がきっかけで両親（夫婦）が別れるケースです。子どもが不登校になったことにより、夫や妻が何を大切に生きてきたか、どんな子ども観・人生観をもっているか、これから何に価値をおいてどんな風に生きていきたいかなどが、あぶり出されます。今まで見えてなかったものが見えてきて、離婚を決意するケースもあるようです。ただこれはもともと夫婦の間にあった問題の材料が、子どもの不登校によって表面化したということにすぎません。

2. 逆のケースとして、子どもはもちろんのこと、親も苦しみますが、これを乗り越えたときに強い結束が生まれるケースです。常識にとらわれていた親が、そんな常識よりもわが子の命と真剣に向き合って経過したときほど素晴らしいことはありません。

【問】なぜ不登校になるのでしょうか。原因は学校ですか？家庭ですか？また、いじめについてはどのようにお考えですか？

【西野氏】まず、最初の質問ですが、それぞれ様々なケースがあります。学校が原因で不登校になる多くはいじめです。また、先生からの体罰や強く叱られることに対する恐怖などや学校の体質が合わないというケースもあります。また家庭が原因となる場合は、親自身が生活するのにいっぱいいっぱいネグレクト状態であったり、父親がアルコール依存症で他の家族（母親と子ども）はいつもビクビクと生活して、家庭

が安全な場所ではなかったり、母子家庭で母親が精神疾患であり子どもの面倒が見れなかったりなど、と本当に様々です。

ある民間機関の調査によれば現在少子化の影響から、1才で水泳や英語など早期教育を受けている子どもたちは、25.1%もいるそうです。幼稚園では小学校で遅れを取らないように読み書きや集団教育に力が注がれているといいます。親や先生はそれが子どものためだからといいますが、これは子どもの側からみて利益があるのでしょうか。また世の中健康であること、正常であることを求めすぎる社会になってきているのではないのでしょうか。正常は異常をもたないことでしか定義できず、正常であることに強迫的な観念をもつ親に育てられた子どもは、弱い立場にいる人をいじめよう・排除しようとしします。いじめられないようにするには異常のままでいられる関係性をうみださなくてはなりません。障害者に対しても同じです。「それぞれみんな人と違っていい。これはできない。これが違う。この子はこの子なんだ。」とみんなが思えるようになればいじめは減るのだと思います。

【問】障害のある子どもが学びたいと思う時、それが薬を使っても大人はそれを与える義務があると思うのですが。

【西野氏】その子の学ぶ権利を保障してあげることが必要です。しかし、大人が「こういうものを身につけたら、こうしたら普通になるよ」と道を引いてしまったら、その子の生きにくさにつながります。このバランスが難しいのです。

【問】親は不安なので、できないよりは少しでもできた方が安心します。その子の今の力では苦しいものを何とかしようと親も学校もしています。親はわが子の将来が不安なんです。

【西野氏】あらゆる不安が蔓延しています。親はあふれる情報の中から何を選んだらいいのかわからない不安を抱えています。手に入れたいま

なざしは、シンプルなことです。「生きているだけですごい」ということ。どの子にも「あなたがいてくれてありがとう」、と親が思うことが大切です。存在に対して感謝して欲しいのです。自立だって就労などを考える前にまず「助けて」が言えることがとても大事なことでと考えています。親はその子のためだからと頑張りすぎるのもどうかと思います。

【問】 フリースペースえんで相談を受けることが出来るスタッフは何人いますか。

【西野氏】 現在2名です。しかし相談を特化することが無いことが居場所の相談だと思います。たとえば、食事を一緒に作りながら子どもが相談し始めたらそのスタッフが相談員となるので、そういう意味ではスタッフ全員がそうだと思います。また、ここに登録するためには面接をしますが、子どもたちはここに来る前までに公共機関などで何度も自分のことを話して、傷ついたりしているので、ここでは親の面談にしています。それは排除するための面談ではなくて、バックグラウンドを知るための面談です。

【問】 ここでは年にどのくらいの子どもたちが出入りしたりしているのでしょうか。

【西野氏】 子どもたちは自分に意欲が出て来たら自分から外に出て行きます。年に20人ぐらいが入って出るとローテーションされています。今こそ「居場所」は多くの行政から注目されて、年間多くの方々が視察に見えていますが、1996年よりも以前は「NPO」対「行政」という対立にあり、居場所はかえって不登校を助長するという突き上げがありました。1997年位だったと思いますが、教育委員会を通じて、文部科学省から、「たまりばで育った子どもたちはその後どうなっているかを調べて欲しい」という調査の依頼があり、それまであまり関心が無かったのですが、それも良い機会と思い追跡調査をしたことがあります。その結

果が驚いたことに9割近くの子どもたちが、学校やサポート校などそれに関連した教育の場に所属していました。しかもそれは私たちや親から無理やり入れられているわけではなく、自分自身で学びの場を選択しているのです。私たちの活動は学校に戻ることを目的にしたことはありません。戻ること为目标にすると、戻れなかった子どもがなぜ自分にはできないのだろうかともっと落ち込んだり、ひきこもってしまう原因になってしまうからです。世間的な常識でその子を否定的に見るのではなく、ありのままのその子の姿を受け入れ、自尊感情を高めるように寄り添い、関わる事を大切にしています。そのような環境の中から子どもたちは自己肯定感が高まり、自分自身で歩き出す力につながっていくのです。

このように安心できる人と人のかかわりの中で、一人ひとりの子どもと自己肯定感が高くなるように関わり、自分が自分のままでいいのだと思えるようになることが最も大切なのです。また親も孤立しないように安心してつながり、支えあえる社会を作り出していくことが必要です。

また、これは長年たまりばをしていて子どもたちに教えられたことですが、多様な個性の子どもたち一人ひとりが集まる場は絶妙な調和が生み出されます。たまりばには暴力で問題を起こしてきた子どももいますし、障害のある子どもも、年齢も違う、多様な個性の持ち主の子どもたちが通ってきています。もちろん喧嘩やいじめも生じますが、相談しながら解決していきますし、暴力によって怪我をするような事件は今まで一度もありません。多様な人間が相逢うと互いに大事にしあう気持ちが生まれるようです。

「アルコール依存症者がいる家族」について

講師：水澤都加佐 氏

ヒーリング&リカバリー インスティテュート所長

家族に依存症者がいた場合、他の家族、特に子どもたちはどうなっていくのかという話をさせていただきます。

日本には50万人位の依存症者がいると言われています。依存症という言い方は、アルコール依存症からはじまり、それが幅広く「薬物依存症」に変わり、その後、嗜癖（アディクション）と呼ばれるようになってきています。嗜癖・アディクションということばの意味は、「習慣的悪癖」ということです。

依存症は治療を受ければ回復します。治療法はある程度確立されていますが、その通りにしない依存症者が多いという、非常に大変な病気です。

さて、家族で誰かがアルコール依存症という病気になったとします。「癌」になった場合と、アルコール依存症になった場合の違いとは、「癌」はその人のために家族が結集しますが、「アルコール依存症」になったら家族は大体ばらばらになります。そして、その家族の中にあるのは、怒りと悲しみ、恨みです。子どもは罪悪感を持つことが多いです。失望、孤立、さまざまなものが渦巻いてきます。

1. アルコール依存症が家族にあると、家族はどうなるか

(1) 家族全員が否定的な感情に支配されます。父親（夫）が依存症だと、奥さんは、「何で私はこんな人と一緒になってしまったのか」と考え、子どもも、「何でこんな家に生れなければいけなかったのか」となるのです。

(2) 家族はみんな自分に焦点が当たらなく

なります。健康でお互いを尊重し愛情がある両親の元にいる子どもは、安心して成長できます。家庭は子どもにとって安全な場であるべきなのです。そういう家庭では、子どもも夫も妻もちゃんと家に帰ってきます。ところが、父親がアルコールの問題を持つと、夫婦は大体背中を向け合います。原因がアルコール問題に限らず、夫婦関係が悪いと、子どもは外にいかなくなります。大人は外に行ったきり戻ってきませんが、子どもは自立していなくお金もないので家に引きこもるようになります。外の生活（学校や友人との関係）から生ずるストレスを断ち切るのです。そして、子どもは、「今日、お父さんは飲むのか」「両親はまたけんかするのか」、ということに関心を向けます。次第に子どもは自分に焦点が当たらなくなるのです。依存症者の家庭ではこのような生活が10年も20年も続きます。夫婦間でこのような関係が長く続くと、お母さんは子どもに、二人の関係やお父さんのことを「お父さんのようにならないで」「結婚なんてするものではない」などと話します。お母さんは子どもに不平不満をこぼし、子どもに相談をしているのです。ということは、子どもの人生に侵入しています。子どももこの二人の関係を何とかしなければここにとどまれないと感じます。子どもは大人である親の人生に侵入するのです。そして次のタイプの傾向がある子どもになっていきます。

①親の自慢の子どもになるために優等生タイプ

②自分が問題を起こすことで親の問題から注意をそらすタイプ

③自分にこれ以上問題がふりそそがないよ

うにするために目立たないタイプ

④ユーモアで家庭の緊張を和らげるひょうきんなタイプ

⑤親の世話役、愚痴の聞き役となる世話やきタイプ

こうして、親も子どももお互いの人生に侵入していくこととなるのです。

(3) 当然、境界線があいまいになります。境界線の学習ができていないので、子どもは大人になっても健康な境界が保てないのです。たとえば、人がむこうでひそひそ話していると、自分の悪口を言っていると思い込んだりします。境界線がひけません。イエス、ノーもはっきり言えなくなります。

(4) 不合理な信念です。両親が不仲な家庭で育っている子どもは、お父さんを通して男性というのはいいかげんで、うそつきで、乱暴で、自分の奥さんを泣かせて苦しめる人だと学習します。かつての健康な信念と入れ替わってしまうということです。妻も同じように不合理な信念を持ちます。かつての健康な信念は、不健康な信念に入れ替わるのです。

2. アルコール依存症者のいる家庭の子どもの心、顔

子どもはがんばらないといけない、自分さえ良い子であれば何とかできるのではないかと、せめて自分だけは問題を起こすのは止めようと思うのです。お母さんの期待に沿っていかねばいけなく、良い子で生きていくようになります。自分の意志力に過度に依存をしながら頑張る続け、そしていつか切れる時期がきます。全てに反応しやすくなり、強迫的に人のことを世話やきたい、助けたいという願望があったり、不眠症、あるいは感情が麻痺するということもあります。本当はつらくて悲しくて生きているのがどん底ですが、それをかろうじて理性で自分の否定的な感情をコントロールします。これが『不安と恐れ顔』です。「いったいこれから我が家はどうか。私の人生はど

うなるのか」。

また、『怒りの顔』もあります。「何なんだ、この家は。いい加減にしてくれ」。しかし、生活の問題もあるし、世間体もある、その他もろもろの問題があって現実的には親は離婚するのは難しい。子どもも家を出られない。

そして子どもは期待に沿いながら、『なんでもない、私はOK顔』で生きていきます。非常にクールに生きていきます。自分のつらい感情を否認して、しかしストレスに関連した疾患を沢山抱え込みます。頭が痛い、胃の調子が悪い、眠れないなどです。そして自己否定感、罪悪感などを抱えながら子ども達は成長し、大人になります。



3. 機能不全家族とは

そもそも、家族というのは2人以上の人が一緒に生活をし、愛情か血液で結びついている集合体です。利害で一緒に住んでいるというのは家族とはいいません。家族が何をしているのか。眠る、食べる、入浴する、話し合う、子育てをする…実にいろいろなことをやっていくのが家族という場所です。こうした家族の機能が成り立つ大前提に必要なものは、安心感、安全性です。これがなければ、家族の機能はどれひとつとして出来ません。

夫も、妻も子どももそれぞれ必要とするものがあります。機能不全家族というのは機能が十分にはたせていないということですから、言い換えれば家族を構成している一人が必要としているものに応じられない家族というのが、機能不全家族ということです。たとえば、安心感がない、お金がない、必要なものが買えないというのは機能不全家族です。障害がある子どもや病気の人がいるだけでは機能不全家族とは

言いません。ただ、その人に親が集中しなければならず、他の子どもはどうしても同じように構ってもらえないとなると、他の子どもにとっては機能不全家族と考えざるを得ないのです。それはある時期、いたし方のないことですし、永遠に続くものではなくいつか解消されますが。

4. 子どもが成長するために必要なもの

(1) あかちゃんは笑ったり、泣いたり、おっぱいを飲んだり、寝る、排泄する、目で追う等の行動をします。これらは本能でしていることです。誰かが教えたものではありません。そして赤ちゃんが本能でしていることに対して、子育てをしている人、お母さんの場合もあるし、おばあちゃんかもしれない。そうした人たちは、あかちゃんが泣いたら抱っこします。赤ちゃんのアクションに対して、親、あるいは養育者がリアクションをします。このやり取りがコミュニケーションです。コミュニケーションが多ければ多いほど育てている人と赤ちゃんとの間に絆ができます。この絆が出来ることがとても重要なことです。もし泣いても誰もかまってくれなかったら赤ちゃんはいずれ疲れ果てて寝てしまいます。数時間してまた空腹と濡れたオムツの不快感でまた泣き、助けて欲しいというサインを発します。コミュニケーションがあって絆ができた赤ちゃんは、「私は愛されている」、「私は生れてきてよい存在だ」、こういうことをおそらく感じているだろうといわれています。この絆ができた人が大人になった時の失恋は、単なる失恋です。この絆ができないまま大人になった人にとっての失恋はこの世の終わりです。絆ができたかどうかで違います。したがってあかちゃんの時に十分なスキンシップとケアが必要です。

(2) 次に必要なのは無条件の愛情です。これは乳児だけでなく幼児、児童にも必要です。子どもに対して無条件の愛を与えられるか否

かというのは子どもの健康な成長に非常に大きな影響があります。

子どもは発達途上ですからまだ成長の途中で、教えなければ何をどうするのかわかりません。子どもは自己中心的で誤ったことをします。やりっぱなし、散らかしっぱなしですが、その行為に対してはダメといっても、その子どものことは愛しているというのが無条件の愛です。言い換えれば、問題と人間をわけけるということです。問題はダメだけど、人間は愛しているというのが無条件の愛です。さて夫婦はどうでしょう。一般的には男女のつながりはお互いにある条件を守っていないと壊れていくので、条件付きの愛情で結びついており、双方が努力しないと壊れる可能性があります。しかし子どもに対する愛情は無条件であるべきだというのが無条件の愛です。

(3) 3つ目に必要なのは、家族の安全性です。ただいまと帰ってくる家族が安全でなければ子どもは健康に成長できません。外の世界はストレスがあります。子どもにとっても学校生活や社会生活というのはストレスが多いです。競争があり、いじめがあったりと子どももストレスを負って家に帰ってきます。家に安全性があれば子どもは家で癒されるので、また学校に行けます。しかし、家に安全性がなかったらお金も無く、自立していないので、家に帰ってくるしかありませんが、生きるために外でのストレスを取り入れないようにするため、ひきこもることになります。家族の安全性というのは子どもの健康な成長に欠かせないということです。

(4) もうひとつは家族にモデルがあるということです。たとえば、お母さんとお父さんが対立することもあるでしょう。しかし、向き合い、話し合って解決し、仲直りをするモデルが必要です。健康なモデルが必要なのです。良くないのは「親の言うとおりにしなさい、しかし親のやってるようにはするな」というようなことです。たとえばお父さんがタバコ吸いな

がら子どもに「タバコは体に良くないから吸ったらいけない」というのは親が言ってるようにしなさい、だけど親がやってるようにしてはいけないということです。これはモデルになりません。家族に健康なモデルがあるということが不可欠です。

5. アルコール依存症者がいる家庭の中で子どもが成長するために必要なものは確保されているか

さて、依存症者がいるとどうなるかです。保護やケアは、それがなければ子供は生きていくことができなくなるので、依存症者がいようといまいと、これは何とか子どもたちに提供されなければなりません。しかし実際には、保護とケアが子どもに届かないときがあります。またかろうじて子どもがもらえたとしても、無条件の愛情と家族の安全性がもらえるかどうかは、子どもの健康な成長に不可欠です。お酒をめぐって口論が耐えない家族の中で、子どもは自分に焦点を当てることができずに親に焦点を当てています。親は配偶者にもはや期待ができないと思うと、子どもに期待をします。「お父さんはあきらめてるけど、あなたたちは別よ」ということになる子ども達は親の期待を一身に受けて、学校で良い成績をとって帰り、お母さんにほめられます。翌日違う教科で悪い点数を取ってきます。今度は「何よこの点数は、みっともない。あなたにだけ期待しているのよ。」といわれると、子どもはまさに無条件で愛されているという感覚がありません。このように依存症者がいる家庭では無条件の愛情も家族の安全性も家族の中の健康なモデルもありません。それでどうやって子どもが健康に育つでしょうか。もし、祖母でもそばにいて、その人たちがこれらを提供してくれたら子どもは変わります。あるいは、保育士や学校の先生方がこういうものを提供してくれただけでも、子どもは健康に成長し

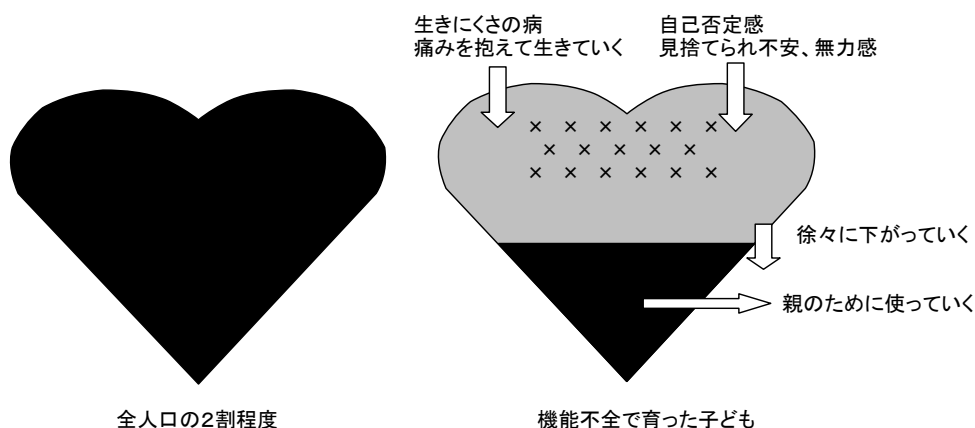
ます。子どもはこれを一生懸命捜しています。ですから学校に行くとこれらがある場所が保健室で、よほどのことが無い限り養護教員がその部屋だけで受け止めてくれるので、子どもにとってはまさに安全な場です。そこに子どもにとってのひとつの家族的なモデルがあります。ですから保健室通いになるということはよくあります。このようにして子どもは影響を受けていきます。

■資料1：健康な家族で子どもが学ぶ大切なこと

- ① 信頼するということ
- ② 自主的に行動すること
- ③ 積極的に行動すること
- ④ 勤勉であること
- ⑤ 主体的であること
- ⑥ 自分をとりまく未知の世界を安全に探検すること
- ⑦ 自分の気持ちを満たす方法を身につけること
- ⑧ 自分を表現すること
- ⑨ 自分はこの世界でたった一人しかいないと知ること
- ⑩ 自分を肯定すること

■資料2：健康に育つ諸条件が与えられない中で成長した子どもの心の傷とは何か

- ① 自己否定感
- ② 見捨てられ不安
- ③ 無力感
- ④ いかり
- ⑤ 空虚感
- ⑥ 寂しさ
- ⑦ 深い悲しみ（ブリーフ）
- ⑧ 感情のマヒ
- ⑨ 偽りの人生
- ⑩ 自己喪失
- ⑪ 極端
- ⑫ 境界線のあいまいさ



6. アダルト・チルドレン（AC）

非常に大雑把な議論をすると、人間には2種類あります。ある人たちは十分に満たされて、モデルがあって、無条件に愛されて育った方たちです。何の調査もありますが全人口の2割ぐらいだと推測されています。

しかし、機能不全の家族の中で育った人はあまり満たされていません。愛されていると感じませんが、親やその他の人が愛情をくれるので何%かは満たされています。しかし子どもはこれを親のために消費していく。そして虚しい努力を何年にもわたってします。結局満たされていた部分は消費されていくので、これで自分を好きになれるわけがないのです。こうなったときの、空間に非常に大きな課題があります。これが資料2です。自己否定感など、否定的な感情でいっぱいなまま大人になっていきます。

ところでこの自己否定感の反対は自己肯定感、見すてられ不安⇔愛される感覚、無力感⇔自己効力感、いかりの反対⇔ゆるしと感謝、空虚感⇔満足感、というように反対側の人を持っているものを、機能不全の家族で育った子どもはこれらを持ちにくいまま大人になっていきます。

これらを持ちながら生きていくというのはとても生きにくいです。生きにくいというのは生きることが容易ではないということです。

英語で「容易に」というのはease とかeasy といいます。これを否定する場合、頭にdis をつけると「disease」＝「病」ということです。ただ、これはいわゆる「病気」というよりも、こういうものを抱えて生きていく人の「生きにくさの病」です。これがアダルト・チャイルド（以下ACと略）の「生きにくさ」です。ACは病名ではありません。さまざまな痛みを抱えて生きている、ということです。自己主張できず、自分に自信が無く、自分なんかいなければ良かったと思っているのでとても生きにくいのです。

こうやって大人になった人が、自分の心の傷、よくトラウマといいます、それをしょって生きていく際、生きにくければ、どうやって生きていくのか。こういうものを抱えて生きていく時に「こうしたら生きやすいんだよ」ということを、機能不全家族では教えてくれるのでしょうか。お父さんはアルコールを飲んで生きています。不平不満があって悲しくて怒っているお母さんは耐えることで、子どもに期待をすることで生きています。そこで生まれ育って大人になった子どもはこの生きにくさを抱えて大人になっています。この生きにくさを子どもはどうやって乗り切ろうとするのでしょうか。親も学校も教えてくれない。そしてこの子どもが専門家に援助を受けるのは問題行動を起こしたときになります。事例化したとき、ケースと呼ばれるときです。それまで誰も関

われなく、予防はほとんどありません。

この痛みを解消する生き方のひとつのコースがアルコールです。お酒を飲んで、酔っている間はこの痛みは消えるので早くからアルコールに手をつけます。異性関係にのめりこむ、ギャンブルにのめり込むのも痛み止めになります。薬物を乱用するというのもひとつの大きなコースです。様々なコースが用意されていますが、どのコースにも共通項があります。この「disease」を楽にするために2つの原則があります。1つは「即効性」、2つ目は「激しさ」ということです。即効性のあることを激し区やるのです。そうして心の痛みを麻痺することができます。一時的に麻痺しても、飲んだ次の日は前日より気分が悪くなるのがふつうです。それを繰り返して生きていきます。それをやっている間にいろいろ失うものがあるので、傷つき、ますますますます満たされた心の水位は下がります。それをやり続けていた子どもが、いずれ大人になり、なおかつ飲み続けてこの子も依存症になっていき、あるいは、お父さんやお母さんと同じ生き方をしていきます。コミュニケーションのパターンもよく似てきます。これを「世代間の連鎖」といいます。親から子へあまり理想的ではない生き方を伝えてしまいます。

機能不全な家族があるように、機能不全な社会もあります。子どもは社会の中で生きていきますが、社会そのものも非常に不健康な社会であるということです。

■資料3：子どもが成長する社会を見直す

- ①社会が子どもを傷つけている現状
- ②物が人を満たすと教えられている社会
- ③社会が空虚感をあおっている
- ④ほしい物と必要なものの区別がつきにくくされている（やたらに購買意欲を掻き立てられている現状がある）
- ⑤親、大人には、社会的な発言と行動が求められる

まず、社会そのものが子どもを傷つけています。小さいときからの競争や選別など、子どもは社会の中で守られているとはいえません。子どもに対する犯罪はどうですか。子どもたちに薬物を売っているのは大人です。大人が子どもをまきぞいにして子どもからお金を巻き上げています。

また、この商業主義というのは物を売る社会です。これを持っていれば幸せだということをCMで毎日流しています。常に新しいものを売りつけられるというのは、常に私たちは空虚感をあおられているということです。子どもたちも常に欲しいものを刺激され、欲しいものと必要なものの区別がつかなくなっています。これが、子どもが健康に育つ環境なのかと考えた場合、社会に問題があります。女性に対する差別も同じです。男性の方が収入が多いということは決して公平ではありません。女性は、どうせこの社会ではと思ってしまいます。これは社会的差別です。性犯罪ににあうのはおそらく98対2くらいで女性がほとんどです。この社会を見直していくことも私たちには不可欠です。家族の問題と両方あるということです。

アルコール問題がある家族では、今お話ししたような物語が展開されていきます。ACも共依存ということばもアルコール医療から出た言葉で、それほど、アルコール依存症者が多いということ、またアルコール問題がある家庭では、ほとんど夫婦の問題、親子の問題、子どもの問題があり、そして悲しみ、怒り、また境界線の問題があります。

親がアルコール依存症でなくても機能不全家族で育った人たちはいわゆるACだという概念が広がってからは、ほとんどの人がACだと思っている人が多いです。おそらく8割の方がそうでしょう。人間というのは生身で完璧な人はいません。いつだって課題を抱えて問題を持っています。完璧な夫も、妻も、父親も、母親もいません。ということは一生懸命育てても子どもに対してできなかったことが

あるはずです。そこまで概念を広げれば、おそらく8割はACでしょう。誰もが何がしかの心の傷を家庭の中で子ども時代に負っている可能性があります。たとえば、お父さんが一生懸命夜遅くまで働いているのは、家族のためであると思っていますが、子どもの側にたってみるとお父さんといつ相談するのでしょうか。父親モデルというのは家庭の中にはいません。お母さんがどうしても一人でしょってたなくてはならず口うるさくなります。そうすると子どもの怒りの矛先はいずれお母さんに向かっていくという構造があります。いろいろなセミナーをしていますが、お父さんに対する怒りをもっている人が圧倒的に少なく、お母さんに対する怒りをもっている人が不思議なことに多いのです。それは接触時間が長いからです。日本人の男性は職場で消耗して疲れて帰ってきます。しかし、そこで生活している子どもにしてみるとやはり父親不在になります。

【問】障害のある人のいる家族が障害の受け入れなどの混乱や面倒で機能不全家族になることがあります。先程一時期のことであってそれは改善されるということをおっしゃっていましたが。ずっと引きずっているケースもありますか？

【水澤氏】もちろんあります。ご家族の負担と苦しみというのは非常に大きいです。行政は家族の苦しみまでは代われないです。

しかしアルコール依存症がいる家族と障害者がいる家族、もしくは「癌」患者がいる家族とは少し違います。アルコール依存症がいる家族は、すぐ怒ったり、怒鳴ったり、何とでもなれ、どこへでも行ってくれ、という気持ちになります。家族には家族の感情があるので客観的に関わるのは難しいです。ですから、このアディクション業界では家族が家族の援助者になることは難しいです。

この病気の破壊力は癌の比ではありません。その理由のひとつは酩酊、酔っ払うということです。酔っ払いを相手にしなければいけないの

は不愉快です。2つ目は本人の記憶が定かでないことです。はちゃめちゃなことを言います。また「否認」というのがあります。要するに「私が酒を飲むのはあのせいだ、お前のせいだ」「ストレスがあるからだ」「仕事が忙しいからだ」等、全ての言い訳の中で飲むのです。この「否認」がアディクションのもっとも大きな特徴です。次に決して自分から治療を求めないという特徴があります。依存症者が自分から治療を求めるのは、飲みすぎて、腹水がたまって苦しくなったときに求めるくらいでしょう。100人の新患が来たとしても、自分の意思で来ている人はほとんどいません。多くて一人でしょう。ですから家族はものすごく影響を受ける。それが他の病気と違う点です。

ですから、アディクションを持っている人が家族にいた場合と障害者がいた場合では家族全般に対する破壊力というのは圧倒的な差があります。たとえば、障害者がいた場合、障害者に対して怒りをぶつけるというのは障害がない他の家族にとっては普通のことですか？

【問】怒りはもっていますが、否認するようにしつけられることが多いのではないかと思います。

【水澤氏】障害者に直接「あんたがそうだから、私たちは苦しんでいるのよ」とぶつけることはほとんどないです。アディクションでは普通のことです。苦しいという意味では、障害も依存症も同じですが、怒りや悲しみが渦巻いているのはおそらく依存症の方が大きいかもしれません。

【問】そのような感情は表に出した方が良いでしょう。障害者の兄弟は内に秘めて、そのような感情を押し込めて自分の感情がわからなくなっている部分がありますが、その感情を発散させた方が良いのか、しかし発散することで良心の呵責がでてくるということもあるので、そのあたりどうでしょうか。

【水澤氏】このような表現をしたら失礼かもしれませんが、私たちの感情はおならと同じで

す。小出しにしないと爆発します。有害ガスと同じですから、体に悪いです。「大変よね」と否定的な感情を普通だと捉え、受け止めてくれる安全な仲間の中で発散することが必要です。それをしないと「うつ」になります。特に怒り、悲しみ、不安を抑えて抑えこんで出さないと「うつ」になります。

【問】親に障害児の子どもに一生懸命世話をすることに悪いとは言えません。他の健常な兄弟がいても、どうしてもこの子に手がかかってしまうから、他の兄弟は自分たちで何とかなっている親にどのように伝えたいのでしょうか。

【水澤氏】ひとつは大切なポイントは正直さと勇気だと思います。たとえば、障害のある子どもが1人いて、他に健常な兄弟が2人いたり、あるいはお父さんがアルコール依存症で子ども達がいるのにお母さんはそれにかかりつきりになっている場合、「この人はこうなので、お母さんはものすごく時間を取られてしまっていて他の家族には関われなくなってしまっている。それは悪いと思っているが、今この状況ではお母さんはそうするしかないの、あなた方がこういうことを思っていることはわかっているけど、全体の状況をあなた方にもわかって欲しい」と率直に言うしかないと思います。

そして、障害の場合と少し違うと思います。アメリカの病院でアルコールの世界では、この5つを子どもたちに伝えることになっています。

(1) 親は子どもをどんなに愛していても、誤ったことをしてしまうこともある。たとえば、子どもを愛していても、薬物に手を出したり、暴力振るってしまったり、アルコールを飲んでしまったりしてしまうこともあると伝えます。

(2) 親の問題に子ども達には責任はない。子どもは、親がこうなってしまったのは自分の責任だと思ってしまうからです。

(3) 親の問題を子どもが何とかしなくて

もいい。子どもはカウンセラーになろうとするのでそんなことしなくてもいいと伝えます。

(4) 子どもはやりたいことを見つけて、それをしていい。あなたたちはあなたたちのやりたいことをしていいと伝えます。子どもは親に何かあると親に焦点を当てて、親のために何かしようと考えます。自分のために何かをしようと考えるからです。

(5) 自分のために自分がしなければいけないことをしなさい。日本ではこの5番目しか子どもに伝えません。1から4があって、その後5を伝えることで子どもはストンと落ちます。5だけ伝えても反発をくらうだけです。

また非常に有効な援助の仕方は、「問題（病気あるいは障害）」と「人間」を分けるということ子どもたちに教えるということです。これはとても大事です。

【問】小さい頃に心の満足感をあまりもらえなかった子どもが、その後何らかの方法で自分の自己肯定感を高めたり、自分自身の努力で飢餓感を治すことはできますか。

【水澤氏】できます。方法は何百とあります。決してアルコールで乗り切る必要もないし、人の犠牲になって乗り切る必要もないし、乗り切り方はいくつでもあります。どういう家庭で育っても多かれ少なかれ私たちは子ども時代に辛い思いをしています。自分というものを自分で色々な事をする事で満たすことはいくらでもできます。アルコールも覚せい剤もありません。人生捨てたものではありません。

病気や障害や問題とその人を分けるというのは最も必要なことです。私たちが嫌いなのは問題なのです。その人間ではありません。その問題というのは向こうから勝手にやってくる風みtainなものです。これは避けようがない場合もあります。いくら予防がこんなに盛んになっても病気や障害になる人が多いです。問題が問題なのです。皆さんも是非頑張ってください。ありがとうございました。

「障害のある人の家族支援の今後の課題と活動方針」

吉川かおり

本調査においては、「障害児者のいる家族は機能不全化しやすいのではないか」、「きょうだい自身の大変さやつらさは、家族がきょうだいのニーズに対応する力を失っていること（家族の機能不全）によって生じるのではないか」「きょうだいを感じる困難さは、現在の自分に満足しているかどうかに関係しているのではないか」という仮説を検証するために、さまざまな観点から項目を作成し、検討を行った。

「障害児者のいる家族の機能が不全化する場合がある」という点については、機能不全度を問う項目やAC度を問う項目によって明らかにすることができた。

ただし、障害児者のいない家族とどのような差異があるのかについては、対象群への調査を行うことができなかったため、「障害児者がいるから」「機能不全化しやすい」という点については立証することはできなかった。

すでに述べたことであるが、この調査で明らかになったさまざまな観点は、きょうだいに困難やつらさをもたらしている「家族機能の不全化」を防ぐための方策を模索するため、障害児者やその家族が生きていきやすい社会を作るために役立てていくことが重要である。

機能不全は、障害児者のいる家族すべてに見られるとは限らず、障害の発生時期や、それを受け止める親の態度、利用できる資源の状況、障害の発生による混乱期がどの程度続いたか、もともとの両親の結びつきの強さ、生活の余裕、といったさまざまな条件による影響を受けるものであり、機能不全がまったく生じない家族も当然存在している。

しかしながら、本調査で明らかになったよう

に、機能不全の状況やACとしての特徴をもつ結果を生む状況が、きょうだいの育った家庭にかなりの割合で存在したということは、障害児者への施策だけでなく家族支援のための施策（さらに言えば、家族機能を健全化するための施策）が必要だということを示唆している。

第2章第1節で触れているが、回答者に多かった「ヒーロー」や「世話役」タイプの人、一般的に「自分が辛いと感じている」ということを抑圧している傾向があると言われている。そのため、きょうだいへの支援が必要だという声自体は少なく、社会への要望として挙げられている質問では、「障害者への理解を広め、差別偏見をなくす」ことを望む声が多かった。

しかしながら、きょうだい支援に関する活動に関わっている者としての実践的理解によれば、きょうだいを受ける影響は家族内・家族外の2つに大別できるものの、人格形成や生活への影響という面からみれば家族機能から受ける影響はかなり大きいという感触がある。特に、「小学校時代に適切な支援があれば（これほど辛い思いはしなくて済んだのに）」という声を聞くことも多い。それは、本調査で質問した「小学校時代に感じた他の家族との違い」において、否定的評価に分類される回答が多かったという点からも裏付けられる。

また、小学校時代に親から十分な関心に向けてもらっていた人ほど、親との現在の関係についての満足度が高いという結果が得られたことは、家族支援の在り方に大きな示唆を与えてくれる。すなわち、障害児支援だけでなく、親がきょうだいにも目と手をかけられるだけの時間や余裕を得られるよう支援することが

重要だということが指摘できるのである。

さらに、小学校時代に家族から高い期待を「あまりかけられなかった」人において、親との現在の関係の満足度が高いという結果も出ている。これは、親から高い期待をかけられるということと、まったく期待をかけられないということのどちらもが、親がきょうだいの「ありのままの姿」を見ていないということの意味するからであるとも考えられる。家族から高い期待をかけられているきょうだいは、その分とても頑張るので、学校や周囲の人から賞賛を得ることが多い。それが、きょうだい自身のレジリエンス（回復力）における「周囲から提供される要因が高い」群に「機能不全重度」の割合が高かったことにつながるのではないだろうか。

さらに、きょうだい自身の自尊感情が低い人に機能不全が重度の割合が高くなる結果が出ていること、きょうだいが自分の気持ちを話すことができるといった対人関係を含めた社会資源が少ない人ほど自尊感情が低いという結果からみて、小学校時代からだけでなく、大人になってからの支援も必要であることが分かる。

また、不登校の子どもへの支援を行っている専門家によると、子どもからのメッセージとして共通して挙げられるのは「比べないでほしい」であるとのことだった。常に他の子どもや世間の評価基準などと比べるということは、子どもから自分らしい自分を表現できる場を奪うということであり、機能不全家族のルールとして挙げられている、2. 感情は素直に表現してはいけない、4. 非現実的な期待を押し付けられる、7. 遊んだり楽しんだりしてはならない、といったものにつながっていくことが考えられる。

すなわち、機能不全は、何らかの事態に対応するさまざまな状況の中から生まれてくるものであり、たとえばワーカホリックも家族

の機能不全を引き起こす一因であることなどを含めると、「障害児者のいる家族」に固有のものではなく多くの家族との共通点を持っているものであるとすることができよう。

重症の機能不全状態の中に育った人は、心理的なぜい弱性をもつ可能性が高く、うつや各種の依存症になりやすいと言われている。障害児者のきょうだいは、一社会人として、一家庭人として、社会にとってなくてはならない重要な存在であり、きょうだいが健全に育つことができ・生活することができる環境を用意することは、社会にとっても意味のあるものと考えられる。

現在、学齢期を対象としたきょうだい支援の取り組みは全国で広まりつつあり、その実践をさらに広げていくことや、家族の機能不全を改善するための方策を構築し普及することが望まれる。

同時に、多様化する家庭が増える中、子どもの課題を個別イシューとして捉えるのではなく、機能不全家族で育ち、苦しんでいる子どもたち全体を対象としたユニバーサルな支援を開発し、展開していくことが必要である。たとえば、学齢期の特別なニーズがある子どものきょうだい支援プログラム（シブショップ）や子どもたちの居場所づくり、子ども同士が話せる場や環境の提供、相談できる大人のサポーターの育成等、さまざまな課題に対応しているプログラムを参考に、新しい取り組みを促進していくことがそれに含まれる。

これらを含めて、社会の障害理解を深めるための方策を広めていくことが、本財団にとっての重要な課題であると考ええる。

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲

**調査票見本
基礎集計表**

▼▲▼▲▼▲▼▲▼▲

■調査票見本

障害のある人のきょうだいへのアンケート

*このアンケートでは、健常の兄弟姉妹を「きょうだい」と表示します。

*障害のある兄弟姉妹を「障害のある兄弟姉妹」または「兄弟姉妹」と表示します。

*答えにくい部分があっても、あまり考え込まず、お答えいただける範囲で最後まで進んで下さい。

*障害のある兄弟姉妹が複数いらっしゃる場合は、おひとりについてお答え下さい。

I あなたの小学生の頃の体験についてお伺いします

1. あなたの育った家庭を思い出してください。あなたが小学生の頃、家庭内で次のような体験をしましたか。1～4のあてはまる数字に○をつけてください。

	よく あった	ときどき あった	あまり なかった	全く なかった
1) 障害のある兄弟姉妹の問題を、両親は前向きに話し合っていた	1	2	3	4
2) 障害のある兄弟姉妹への負の感情を、親に対して素直に表現できた	1	2	3	4
3) 障害のある兄弟姉妹のことについて、親は本音と建前を使い分けていた	1	2	3	4
4) 障害のある兄弟姉妹のことについて、母（または父）の気持ちや考えを代弁して父（または母）に伝えた	1	2	3	4
5) 障害のある兄弟姉妹がいるために、親は深刻な顔で悩み疲れていた	1	2	3	4
6) 障害のある兄弟姉妹がいたために、親から高い理想を押し付けられた	1	2	3	4
7) 障害のある兄弟姉妹のことについて、両親はお互いに気持ちを伝えあっていた	1	2	3	4
8) 障害のある兄弟姉妹がいるために、自分は家族にもめごとがおこらないように行動した	1	2	3	4
9) 障害のある兄弟姉妹のことで、両親の間に陰湿な空気が漂っているのを感じた	1	2	3	4
10) 障害のある兄弟姉妹に関わらず、自分の行動や考えを尊重してくれた	1	2	3	4
11) 障害のある兄弟姉妹がいたために、さびしくても親に甘えられなかった	1	2	3	4
12) 障害のある兄弟姉妹のことで忙しい時に、親に要求を言うのと叱られたりいやな顔をされたりした	1	2	3	4
13) 障害のある兄弟姉妹のことで何かあっても、親は自分の要求に耳を傾けてくれた	1	2	3	4
14) 障害のある兄弟姉妹がいても、親はリラックスしたり楽しんだりしていた	1	2	3	4
15) 障害のある兄弟姉妹のことで忙しい時でも、親は自分の要求に耳を傾けてくれた	1	2	3	4
16) 障害のある兄弟姉妹がいても、自分の抱えている問題を親に自由に話すことが出来た	1	2	3	4

2. あなたの小学生の頃を思い出してください。

2-1. 小学生の頃のあなたの家庭や親との関係をふりかえって、1～4のあてはまる数字に○をつけて下さい。

	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
1) 親のために、いつもよい成績をとれるよう努力していた	1	2	3	4
2) 親に「しっかりした子」とほめられるよう努力していた	1	2	3	4
3) 家族のまとも役をつとめるため努力していた	1	2	3	4
4) 親に反発や怒りをぶつけていた	1	2	3	4
5) ルールを無視した行動で、親に自分の存在を目立たせようとしていた	1	2	3	4
6) 親に「悪い子」と言われたり態度で示されて傷ついていた	1	2	3	4
7) あなたが問題を起こすと、親は今までのいさかいなどを忘れて、一緒に問題解決に奔走したりしていた	1	2	3	4
8) 家族の中では、なるべく目立たないよう行動していた	1	2	3	4
9) 親から「素直な子」とほめられるよう行動していた	1	2	3	4
10) 家族の中で、自分の存在が忘れられているように感じていた	1	2	3	4
11) 家族を笑わせよう、なごませようと努めていた	1	2	3	4
12) 親の目を真っすぐに見ないようにしていた	1	2	3	4
13) 自分の不安や弱さを親に悟られないように努めていた	1	2	3	4
14) 親に「落ち着きのない子」と言われていた	1	2	3	4
15) 親に「やさしい子」「思いやりのある子」と言われるよう努めていた	1	2	3	4
16) 親の役に立つよう、頑張っていた	1	2	3	4
17) 自分勝手にならないよう、親にしてほしいことがあっても我慢していた	1	2	3	4

2-2. 下記のそれぞれの項目をよく読んで、小学生の頃の自分にどれくらいあてはまるかを考え、1～4のあてはまる数字に○をつけて下さい。

	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
1) あなたは、いつも助けてくれる人であると思われていた	1	2	3	4
2) あなたは、困ったときでも冷静でいる方だった	1	2	3	4
3) 人は、あなたのことを頭が良く活発であると思っていた	1	2	3	4
4) あなたは、自分に自信があった	1	2	3	4
5) あなたの両親(母親もしくは父親)は、あなたに十分な関心を向けてくれた	1	2	3	4
6) あなたの家族はあなたに高い期待をしていた	1	2	3	4
7) あなたが悲しかったり困ったりしている時、いつも頼れる誰かがいた	1	2	3	4
8) あなたは、学校の成績が良かった	1	2	3	4
9) あなたは、人を助けることを進んでしていた	1	2	3	4
10) あなたは、自分の気持ちが良くわからなかった	1	2	3	4
11) あなたは、ストレスフルに感じる、対処が必要となる困難な目に合わされた	1	2	3	4
12) あなたは困難な状況でも、物事を良い方へ解決していけるだろうと感じていた	1	2	3	4

	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
13) あなたは、自分の将来のために何をすればよいかわかっていて	1	2	3	4
14) あなたの両親（母親もしくは父親）は、あなたのことを性格が良く 楽天的であると思っていた	1	2	3	4
15) あなたは、大人の人とあたたかくて前向きな関係を持っていた	1	2	3	4
16) あなたは、自分の行動を最後までやり遂げる方だった	1	2	3	4
17) あなたは、問題に対応する効果的な方法を導き出すことができた	1	2	3	4

II 現在のあなたについてお伺いします

3. 現在のあなたについてお答えください。

3-1. 下記のそれぞれの項目をよく読んで、現在の自分にとってどれくらいあてはまるかを考え、1～4のあてはまる数字に○をつけて下さい。

	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
1) 責任感がひじょうに強いと感じる	1	2	3	4
2) 周囲に能力を評価されなかったら、自分の価値が感じられない	1	2	3	4
3) 息抜きをしたり、無邪気になって遊ぶのが苦手である	1	2	3	4
4) ミスや失敗をすると、ひどく自分を責めて落ち込んでしまう	1	2	3	4
5) 他の人の失敗でも、自分の責任のように感じることが多い	1	2	3	4
6) もっともっと努力しなければと、いつも自分を追い立ててしまう	1	2	3	4
7) 自分なんかどうでもいいと感じることが多い	1	2	3	4
8) 怒りにまかせて相手を非難攻撃することが多い	1	2	3	4
9) ちょっとしたことでも周囲との関係がこじれてしまうことが多い	1	2	3	4
10) 自分の淋しさや傷をわかってくれる人など、誰もいないと感じる	1	2	3	4
11) 大勢のなかにいるより、ひとりきりで過ごすほうが好きだ	1	2	3	4
12) 自分を表現したり意見を主張するのが苦手だ	1	2	3	4
13) 孤独感を感じる人が多い	1	2	3	4
14) 自分はいなくてもよい存在なのではないかと感じる人が多い	1	2	3	4
15) 人生に生きる意味があるなんて思えないことがしばしばある	1	2	3	4
16) その場がシラけたり、気まずい雰囲気になるとひじょうに不安を感じる	1	2	3	4
17) 人と対決するのが怖い	1	2	3	4
18) 「明るい」「軽い」仮面の下の本当のあなたを誰もわかってくれな いとを感じる	1	2	3	4
19) 困っている人がそばにいと放っておけない	1	2	3	4
20) 自分の都合より、他人の都合を優先することが多い	1	2	3	4
21) 自分を優先するのは、わがままでいけないことのように感じる	1	2	3	4
22) 相手が何を望んでいるのか、ひじょうに敏感に感じ取ることができる	1	2	3	4
23) 自分が何をしたいのか、何を感じているのかわからなくなることが多い	1	2	3	4

	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
24) 家族以外で自分の問題や気持ちについて話せる人がいる	1	2	3	4
25) いざというときに家族を頼ることができる	1	2	3	4
26) 物事はうまくいくであろうと信じている	1	2	3	4
27) 人が喜ぶと思うような事を進んでする	1	2	3	4
28) 進んで新しいことを試みる方である	1	2	3	4
29) 物事を自分の力でやり遂げたい	1	2	3	4
30) 私のことを心から愛してくれる人がいる	1	2	3	4
31) 自分のおこないが結果に影響すると思う	1	2	3	4
32) 自分のことが好きである	1	2	3	4
33) やるべきことに集中し最後まで取り組むことができる	1	2	3	4
34) 人を笑わせたりおどけることが好きである	1	2	3	4
35) 段取りや計画を立てて物事を進めようとする	1	2	3	4
36) 困ったことがあると解決方法を考えようとする	1	2	3	4
37) この人のようになりたいと思える人がいる	1	2	3	4
3-2. あなたの友人関係を想像して下さい。友人等は障害のある兄弟姉妹をもっていません。そのような友人関係の中で、下記のそれぞれの項目は、あなたにとってどのくらいあてはまるかを1～4の数字でお答え下さい。				
	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
1) 常に自分自身の意見をもつようにしている	1	2	3	4
2) 仲間の中での和を維持することは大切だと思う	1	2	3	4
3) 自分が何をしたいのか常にわかっている	1	2	3	4
4) 友人から好かれることは自分にとって大切である	1	2	3	4
5) 自分の意見をいつもはっきり言う	1	2	3	4
6) 自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる友人や自分のいる状況によって決まる	1	2	3	4
7) いつも自信をもって発言し、行動している	1	2	3	4
8) 自分の友人と意見が対立することを避ける	1	2	3	4
9) 一番最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う	1	2	3	4
10) 友人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い	1	2	3	4
11) 自分でいいと思うのなら、他の人が自分の考えを何と思おうと気にしない	1	2	3	4
12) 友人やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある	1	2	3	4
13) 友人が異なった考えをもっている、自分の信じる場所を守り通す	1	2	3	4
14) 友人が自分をどう思っているかを気にする	1	2	3	4
15) たいいていは自分一人で物事を決断する	1	2	3	4
16) 何か行動する時、結果を予測して不安になりなかなか実行に移せないことがある	1	2	3	4

	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
17) 良いか悪いかは自分がそれをどう考えるかで決まると思う	1	2	3	4
18) 友人は自分のことをどう評価しているかと、他人の視線が気になる	1	2	3	4
19) 自分の考えや行動が友人と違っていても気にならない	1	2	3	4
20) 友人と接するとき、自分と友人との間の関係や地位が気になる	1	2	3	4
3-3. 次の特徴について、あなた自身にどの程度あてはまるかお答え下さい。他からどうみられているかではなくあなたが、あなた自身をどう思っているか、お答え下さい。				
	あてはまる	やや	やや	あてはまらない
	あてはまる	あてはまらない		
1) 少なくとも人並みには価値のある人間である	1	2	3	4
2) 自分は色々な良い素質をもっている	1	2	3	4
3) 敗北者だと思ふことがある	1	2	3	4
4) 自分は物事を人並みにはうまくやれる	1	2	3	4
5) 自分には自慢できるところがない	1	2	3	4
6) 自分に対して肯定的である	1	2	3	4
7) だいたいにおいて、自分に満足している	1	2	3	4
8) もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	1	2	3	4
9) 自分は全くだめな人間だと思ふことがある	1	2	3	4
10) 何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	1	2	3	4

4. あなたは、次のことにどの程度満足していますか。あてはまる数字に○をつけてください。

	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない
1) 今までの人生全体について	1	2	3	4
2) 現在の仕事（学校）	1	2	3	4
3) 自分の性格	1	2	3	4
4) 実父との関係	1	2	3	4
5) 実母との関係	1	2	3	4
6) 障害のある兄弟姉妹との関係	1	2	3	4
7) 友だちとの関係	1	2	3	4
8) （結婚している方）配偶者との関係	1	2	3	4
9) （子どもがいる方）子どもとの関係	1	2	3	4
10) 自分が住んでいる地域（場所）	1	2	3	4
11) 日本の社会	1	2	3	4

Ⅲ あなたと障害のある兄弟姉妹についてお伺いします

5. あなたは小学生の頃、兄弟姉妹に障害があることで困ったり、または悩んだりしたことがありますか。あてはまる数字に○をつけてください。

1. よくあった
2. ときどきあった
3. あまりなかった
4. ぜんぜんなかった

5-1. それはどんなことですか。記入してください。

6. 現在、障害のある兄弟姉妹のことで、困っていることはありますか

1. ある
2. ない

6-1. それはどんなことですか。記入して下さい。

7. あなたは現在、障害のある兄弟姉妹がいることで良かったと思うことはありますか

1. ある
2. ない

7-1. それはどんなことですか。記入して下さい。

8. 障害のある兄弟姉妹がいることで、あなたの人生に影響があったと思うことを教えてください。あてはまる数字に○をつけて下さい。

	影響が あった	影響が なかった	1に○をつけた方、どのように影響したか教えてください。
1) 進路について	1	2	
2) 就職について	1	2	

12-2. あなたはその兄弟姉妹の介護や面倒を見ますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

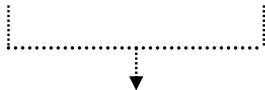
1. 既に自立自活（施設の利用も含む）をしているので、面倒をみる必要はない
2. 自立自活は困難なので、自分が面倒をみるつもりだ
3. 自立自活は困難なので、他のきょうだいが面倒をみるつもりだ
4. 自立自活は困難なので、速やかに適切な施設等の入所を検討する
5. 既に施設に入ってはいるが、自分が後見人として面倒をみるつもりだ
6. わからない

12-3. そのことについて不安を感じていますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

1. すごくある
2. 少しある
3. あまりない
4. ぜんぜんない

13. 障害のある兄弟姉妹が自立自活（施設の利用も含む）をするために必要な手段やサポートを知っていますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

1. 知っている
2. だいたい知っている
3. あまり知らない
4. 全く知らない



13-1. そのような情報を得たことで、将来の負担感は軽減しましたか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

1. とてもした
2. 少しした
3. あまりしない
4. 全くしない

14. あなたの兄弟姉妹に障害があるとわかった時、あるいは障害をもった時、あなたはどのように思いましたか。自由にお書き下さい。

15. 小学生の頃、『あなたの家族』と『他の家族』と何か違うと感じましたか？それはどのようなことでしたか。自由にお書き下さい。

16. 社会の中で障害のある人々や家族が幸せに暮らすために、社会はどのように変われば良いと思いますか。
自由にお書き下さい。

IV あなたご自身についてお聞きします。

F1 あなたの性別を教えてください。

1. 男 2. 女

F2 あなたの年齢(年代)を教えてください。

1. 10代 2. 20代 3. 30代 4. 40代 5. 50代 6. 60代以上

F3 あなたの家族構成を教えてください。同居している人全てに○をつけて、複数の場合は人数もご記入下さい。

	家族構成					
小学生 の頃	1.父	2.母	3.祖父	4.祖母	5.兄(人)	6.姉(人)
	7.弟(人)	8.妹(人)	9.その他()			
現在	1.単身	2.父	3.母	4.祖父	5.祖母	6.兄(人)
	7.姉(人)	8.弟(人)	9.妹(人)			
	10.配偶者	11.子ども(人)	12.その他()			

F4 あなたがお住まいの地域を都道府県で教えてください。

1. 小学生の頃：() 2. 現在：()

F5 あなたは医療・教育・福祉関係に関わる仕事をしていますか(していましたか、または学生の場合は専攻していますか)。

1. はい(職名：) 2. いいえ

V 障害のある兄弟姉妹のことについてお聞きします。障害のある兄弟姉妹が複数いらっしゃる場合は、おひとりについてお答え下さい。

F6 あなたからみて障害のある兄弟姉妹はどのような立場ですか。

1. 兄 2. 姉 3. 弟 4. 妹

F7 あなたと障害のある兄弟姉妹の年齢差を教えてください。

() 歳

F8 兄弟姉妹の障害種別について、該当しているもの全てに○をつけて下さい。

- | | | | |
|---------------------------------|----------|---------|----------|
| 1. 知的障害 | 2. 肢体不自由 | 3. 聴覚障害 | 4. 視覚障害 |
| 5. 精神障害 | 6. 発達障害 | 7. 難病 | 8. わからない |
| 9. その他 () | | | |

F9 障害名がおわかりでしたら教えて下さい。

F10 その障害はいつからですか。 中途の場合は年齢も教えて下さい。あてはまる数字に○をつけて下さい。

- | | |
|----------------------------|----------|
| 1. 先天性 | 2. 出産時 |
| 3. 中途 () 才から | 4. わからない |

F11 現在、障害のある兄弟姉妹はどのように生活していますか。あてはまる数字に○をつけて下さい。

1. 独居
2. 施設入所
3. グループホーム
4. 親と同居
5. 自分と同居
6. 他のきょうだいと同居
7. その他 ()

ご協力ありがとうございました。

■基礎集計表

1. 小学生の頃、家庭内で次のような体験をしましたか

■【Q1-1】障害のある兄弟姉妹の問題を、両親は前向きに話し合っていた

	(4)	Q1-1-1	Q1-1-2	Q1-1-3	Q1-1-4	Q1-1-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	98	141	136	37	12
%	100.0	23.1	33.3	32.1	8.7	2.8

■【Q1-2】障害のある兄弟姉妹への負の感情を、親に対して素直に表現できた

	(4)	Q1-2-1	Q1-2-2	Q1-2-3	Q1-2-4	Q1-2-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	34	109	184	86	11
%	100.0	8.0	25.7	43.4	20.3	2.6

■【Q1-3】障害のある兄弟姉妹のことについて、親は本音と建前を使い分けていた

	(4)	Q1-3-1	Q1-3-2	Q1-3-3	Q1-3-4	Q1-3-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	38	79	173	114	20
%	100.0	9.0	18.6	40.8	26.9	4.7

■【Q1-4】障害のある兄弟姉妹のことについて、母（または父）の気持ちや考えを代弁して父（または母）に伝えた

	(4)	Q1-4-1	Q1-4-2	Q1-4-3	Q1-4-4	Q1-4-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	13	51	143	204	13
%	100.0	3.1	12.0	33.7	48.1	3.1

■【Q1-5】障害のある兄弟姉妹がいるために、親は深刻な顔で悩み疲れていた

	(4)	Q1-5-1	Q1-5-2	Q1-5-3	Q1-5-4	Q1-5-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	48	150	158	61	7
%	100.0	11.3	35.4	37.3	14.4	1.7

■【Q1-6】障害のある兄弟姉妹がいたために、親から高い理想を押し付けられた

	(4)	Q1-6-1	Q1-6-2	Q1-6-3	Q1-6-4	Q1-6-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	35	62	128	191	8
%	100.0	8.3	14.6	30.2	45.0	1.9

■【Q1-7】障害のある兄弟姉妹のことについて、両親はお互いに気持ちを伝えあっていた

	(4)	Q1-7-1	Q1-7-2	Q1-7-3	Q1-7-4	Q1-7-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	73	141	151	42	17
%	100.0	17.2	33.3	35.6	9.9	4.0

■【Q1-8】障害のある兄弟姉妹がいるために、自分は家族にもめごとがおこらないように行動した

	(4)	Q1-8-1	Q1-8-2	Q1-8-3	Q1-8-4	Q1-8-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	66	117	144	89	8
%	100.0	15.6	27.6	34.0	21.0	1.9

■【Q1-9】障害のある兄弟姉妹のことで、両親の間に陰湿な空気が漂っているのを感じた

	(4)	Q1-9-1	Q1-9-2	Q1-9-3	Q1-9-4	Q1-9-5
	全 体	よくあつた	ときどきあつた	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	35	87	147	145	10
%	100.0	8.3	20.5	34.7	34.2	2.4

■【Q1-10】障害のある兄弟姉妹に関わらず、自分の行動や考えを尊重してくれた

	(4)	Q1-10-1	Q1-10-2	Q1-10-3	Q1-10-4	Q1-10-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	199	135	62	17	11
%	100.0	46.9	31.8	14.6	4.0	2.6

■【Q1-11】障害のある兄弟姉妹がいたために、さびしくても親に甘えられなかった

	(4)	Q1-11-1	Q1-11-2	Q1-11-3	Q1-11-4	Q1-11-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	65	103	146	101	9
%	100.0	15.3	24.3	34.4	23.8	2.1

■【Q1-12】障害のある兄弟姉妹のことで忙しい時に、親に要求を言うと叱られたり嫌な顔をされたりした

	(4)	Q1-12-1	Q1-12-2	Q1-12-3	Q1-12-4	Q1-12-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	28	87	148	153	8
%	100.0	6.6	20.5	34.9	36.1	1.9

■【Q1-13】障害のある兄弟姉妹のことで何かあっても、親は自分の要求に耳を傾けてくれた

	(4)	Q1-13-1	Q1-13-2	Q1-13-3	Q1-13-4	Q1-13-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	159	166	73	14	12
%	100.0	37.5	39.2	17.2	3.3	2.8

■【Q1-14】障害のある兄弟姉妹がいても、親はリラックスしたり楽しんだりしていた

	(4)	Q1-14-1	Q1-14-2	Q1-14-3	Q1-14-4	Q1-14-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	123	153	106	32	10
%	100.0	29.0	36.1	25.0	7.5	2.4

■【Q1-15】障害のある兄弟姉妹のことで忙しい時でも、親は自分の要求に耳を傾けてくれた

	(4)	Q1-15-1	Q1-15-2	Q1-15-3	Q1-15-4	Q1-15-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	144	182	75	10	13
%	100.0	34.0	42.9	17.7	2.4	3.1

■【Q1-16】障害のある兄弟姉妹がいても、自分の抱えている問題を親に自由に話すことが出来た

	(4)	Q1-16-1	Q1-16-2	Q1-16-3	Q1-16-4	Q1-16-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	全くなかった	不明
件 数	424	114	105	144	52	9
%	100.0	26.9	24.8	34.0	12.3	2.1

2-1. 小学生の頃のあなたの家庭や親との関係を振り返ってください

■【Q2-1-1】親のために、いつもよい成績をとれるよう努力していた

	(4)	Q2-2-1-1	Q2-2-1-2	Q2-2-1-3	Q2-2-1-4	Q2-2-1-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	40	100	116	161	7
%	100.0	9.4	23.6	27.4	38.0	1.7

■【Q2-1-2】親に「しっかりした子」とほめられるよう努力していた

	(4)	Q2-2-2-1	Q2-2-2-2	Q2-2-2-3	Q2-2-2-4	Q2-2-2-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	48	129	104	135	8
%	100.0	11.3	30.4	24.5	31.8	1.9

■【Q2-1-3】家族のまとめ役をつとめるため努力していた

	(4)	Q2-2-3-1	Q2-2-3-2	Q2-2-3-3	Q2-2-3-4	Q2-2-3-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	34	104	125	153	8
%	100.0	8.0	24.5	29.5	36.1	1.9

■【Q2-1-4】親に反発や怒りをぶつけていた

	(4)	Q2-2-4-1	Q2-2-4-2	Q2-2-4-3	Q2-2-4-4	Q2-2-4-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	38	103	133	141	9
%	100.0	9.0	24.3	31.4	33.3	2.1

■【Q2-1-5】ルールを無視した行動で、親に自分の存在を目立たせようとしていた

	(4)	Q2-2-5-1	Q2-2-5-2	Q2-2-5-3	Q2-2-5-4	Q2-2-5-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	8	26	98	285	7
%	100.0	1.9	6.1	23.1	67.2	1.7

■【Q2-1-6】親に「悪い子」と言われたり態度で示されて傷ついていた

	(4)	Q2-2-6-1	Q2-2-6-2	Q2-2-6-3	Q2-2-6-4	Q2-2-6-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	15	38	69	294	8
%	100.0	3.5	9.0	16.3	69.3	1.9

■【Q2-1-7】あなたが問題を起こすと、親は今までのいさかいなどを忘れて、一緒に問題解決に奔走したりしていた

	(4)	Q2-2-7-1	Q2-2-7-2	Q2-2-7-3	Q2-2-7-4	Q2-2-7-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	88	128	88	95	25
%	100.0	20.8	30.2	20.8	22.4	5.9

■【Q2-1-8】家族の中では、なるべく目立たないよう行動していた

	(4)	Q2-2-8-1	Q2-2-8-2	Q2-2-8-3	Q2-2-8-4	Q2-2-8-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	17	48	130	220	9
%	100.0	4.0	11.3	30.7	51.9	2.1

■【Q2-1-9】親から「素直な子」とほめられるよう行動していた

	(4)	Q2-2-9-1	Q2-2-9-2	Q2-2-9-3	Q2-2-9-4	Q2-2-9-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	26	97	120	171	10
%	100.0	6.1	22.9	28.3	40.3	2.4

■【Q2-1-10】家族の中で、自分の存在が忘れられているように感じていた

	(4)	Q2-2-10-1	Q2-2-10-2	Q2-2-10-3	Q2-2-10-4	Q2-2-10-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	22	49	86	258	9
%	100.0	5.2	11.6	20.3	60.8	2.1

■【Q2-1-11】家族を笑わせよう、なごませようと努めていた

	(4)	Q2-2-11-1	Q2-2-11-2	Q2-2-11-3	Q2-2-11-4	Q2-2-11-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	31	92	121	167	13
%	100.0	7.3	21.7	28.5	39.4	3.1

■【Q2-1-12】親の目を真っすぐに見ないようにしていた

	(4)	Q2-2-12-1	Q2-2-12-2	Q2-2-12-3	Q2-2-12-4	Q2-2-12-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	11	29	97	279	8
%	100.0	2.6	6.8	22.9	65.8	1.9

■【Q2-1-13】自分の不安や弱さを親に悟られないように努めていた

	(4)	Q2-2-13-1	Q2-2-13-2	Q2-2-13-3	Q2-2-13-4	Q2-2-13-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	59	104	97	155	9
%	100.0	13.9	24.5	22.9	36.6	2.1

■【Q2-1-14】親に「落ち着きのない子」と言われていた

	(4)	Q2-2-14-1	Q2-2-14-2	Q2-2-14-3	Q2-2-14-4	Q2-2-14-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	29	55	61	270	9
%	100.0	6.8	13.0	14.4	63.7	2.1

■【Q2-1-15】親に「やさしい子」「思いやりのある子」と言われるよう努めていた

	(4)	Q2-2-15-1	Q2-2-15-2	Q2-2-15-3	Q2-2-15-4	Q2-2-15-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	39	104	134	136	11
%	100.0	9.2	24.5	31.6	32.1	2.6

■【Q2-1-16】親の役に立つよう、頑張っていた

	(4)	Q2-2-16-1	Q2-2-16-2	Q2-2-16-3	Q2-2-16-4	Q2-2-16-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	86	145	106	77	10
%	100.0	20.3	34.2	25.0	18.2	2.4

■【Q2-1-17】自分勝手にならないよう、親にして欲しいことがあっても我慢していた

	(4)	Q2-2-17-1	Q2-2-17-2	Q2-2-17-3	Q2-2-17-4	Q2-2-17-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	58	133	135	89	9
%	100.0	13.7	31.4	31.8	21.0	2.1

2-2. 小学生の頃の自分にどれくらいあてはまりますか

■【Q2-2-1】あなたは、いつも助けてくれる人であると思われていた

	(4)	Q2-2-1-1	Q2-2-1-2	Q2-2-1-3	Q2-2-1-4	Q2-2-1-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	42	141	127	103	11
%	100.0	9.9	33.3	30.0	24.3	2.6

■【Q2-2-2】あなたは、困ったときでも冷静でいる方だった

	(4)	Q2-2-2-1	Q2-2-2-2	Q2-2-2-3	Q2-2-2-4	Q2-2-2-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	59	152	141	62	10
%	100.0	13.9	35.8	33.3	14.6	2.4

■【Q2-2-3】人は、あなたのことを頭がよく活発であると思っていた

	(4)	Q2-2-3-1	Q2-2-3-2	Q2-2-3-3	Q2-2-3-4	Q2-2-3-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	61	119	130	99	15
%	100.0	14.4	28.1	30.7	23.3	3.5

■【Q2-2-4】あなたは、自分に自信があった

	(4)	Q2-2-4-1	Q2-2-4-2	Q2-2-4-3	Q2-2-4-4	Q2-2-4-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	37	92	113	169	13
%	100.0	8.7	21.7	26.7	39.9	3.1

■【Q2-2-5】あなたの両親（母親もしくは父親）は、あなたに十分な関心を向けてくれた

	(4)	Q2-2-5-1	Q2-2-5-2	Q2-2-5-3	Q2-2-5-4	Q2-2-5-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	141	182	68	24	9
%	100.0	33.3	42.9	16.0	5.7	2.1

■【Q2-2-6】あなたの家族はあなたに高い期待をしていた

	(4)	Q2-2-6-1	Q2-2-6-2	Q2-2-6-3	Q2-2-6-4	Q2-2-6-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	82	139	105	86	12
%	100.0	19.3	32.8	24.8	20.3	2.8

■【Q2-2-7】あなたが悲しかったり困ったりしている時、いつも頼れる誰かがいた

	(4)	Q2-2-7-1	Q2-2-7-2	Q2-2-7-3	Q2-2-7-4	Q2-2-7-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	110	121	114	71	8
%	100.0	25.9	28.5	26.9	16.7	1.9

■【Q2-2-8】あなたは、学校の成績が良かった

	(4)	Q2-2-8-1	Q2-2-8-2	Q2-2-8-3	Q2-2-8-4	Q2-2-8-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	103	127	87	96	11
%	100.0	24.3	30.0	20.5	22.6	2.6

■【Q2-2-9】あなたは、人を助けることをすすんでした

	(4)	Q2-2-9-1	Q2-2-9-2	Q2-2-9-3	Q2-2-9-4	Q2-2-9-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	79	170	130	34	11
%	100.0	18.6	40.1	30.7	8.0	2.6

■【Q2-2-10】あなたは、自分の気持ちが良くわからなかった

	(4)	Q2-2-10-1	Q2-2-10-2	Q2-2-10-3	Q2-2-10-4	Q2-2-10-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	67	141	113	90	13
%	100.0	15.8	33.3	26.7	21.2	3.1

■【Q2-2-11】あなたは、ストレスフルに感じる、対処が必要となる困難な目に合わされた

	(4)	Q2-2-11-1	Q2-2-11-2	Q2-2-11-3	Q2-2-11-4	Q2-2-11-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	69	101	105	139	10
%	100.0	16.3	23.8	24.8	32.8	2.4

■【Q2-2-12】あなたは困難な状況でも、物事を良い方へ解決していけるだろうと感じていた

	(4)	Q2-2-12-1	Q2-2-12-2	Q2-2-12-3	Q2-2-12-4	Q2-2-12-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	62	154	139	57	12
%	100.0	14.6	36.3	32.8	13.4	2.8

■【Q2-2-13】あなたは、自分の将来のために何をすればよいか分かっていた

	(4)	Q2-2-13-1	Q2-2-13-2	Q2-2-13-3	Q2-2-13-4	Q2-2-13-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	39	105	155	114	11
%	100.0	9.2	24.8	36.6	26.9	2.6

■【Q2-2-14】あなたの両親（母親もしくは父親）は、あなたのことを性格がよく楽天的であると思っていた

	(4)	Q2-2-14-1	Q2-2-14-2	Q2-2-14-3	Q2-2-14-4	Q2-2-14-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	57	151	139	65	12
%	100.0	13.4	35.6	32.8	15.3	2.8

■【Q2-2-15】あなたは、大人の人とあたたかくて前向きな関係を持っていた

	(4)	Q2-2-15-1	Q2-2-15-2	Q2-2-15-3	Q2-2-15-4	Q2-2-15-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	85	162	119	45	13
%	100.0	20.0	38.2	28.1	10.6	3.1

■【Q2-2-16】あなたは、自分の行動を最後までやり遂げる方だった

	(4)	Q2-2-16-1	Q2-2-16-2	Q2-2-16-3	Q2-2-16-4	Q2-2-16-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	80	168	121	45	10
%	100.0	18.9	39.6	28.5	10.6	2.4

■【Q2-2-17】あなたは、問題に対応する効果的な方法を導き出すことが出来た

	(4)	Q2-2-17-1	Q2-2-17-2	Q2-2-17-3	Q2-2-17-4	Q2-2-17-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	35	140	166	69	14
%	100.0	8.3	33.0	39.2	16.3	3.3

3-1. 現在の自分にどれくらいあてはまるかを考えてください

■【Q3-1-1】責任感が非常に強いと感じる

	(4)	Q3-1-1-1	Q3-1-1-2	Q3-1-1-3	Q3-1-1-4	Q3-1-1-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	122	230	58	11	3
%	100.0	28.8	54.2	13.7	2.6	0.7

■【Q3-1-2】周囲に能力を評価されなかったら、自分の価値を感じられない

	(4)	Q3-1-2-1	Q3-1-2-2	Q3-1-2-3	Q3-1-2-4	Q3-1-2-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	53	163	133	70	5
%	100.0	12.5	38.4	31.4	16.5	1.2

■【Q3-1-3】息抜きをしたり、無邪気になって遊ぶのが苦手である

	(4)	Q3-1-3-1	Q3-1-3-2	Q3-1-3-3	Q3-1-3-4	Q3-1-3-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	68	94	117	138	7
%	100.0	16.0	22.2	27.6	32.5	1.7

■【Q3-1-4】ミスや失敗をすると、ひどく自分を責めて落ち込んでしまう

	(4)	Q3-1-4-1	Q3-1-4-2	Q3-1-4-3	Q3-1-4-4	Q3-1-4-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	95	163	114	47	5
%	100.0	22.4	38.4	26.9	11.1	1.2

■【Q3-1-5】他の人の失敗でも、自分の責任のように感じることが多い

	(4)	Q3-1-5-1	Q3-1-5-2	Q3-1-5-3	Q3-1-5-4	Q3-1-5-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	33	154	152	80	5
%	100.0	7.8	36.3	35.8	18.9	1.2

■【Q3-1-6】もっともっと努力しなければと、いつも自分を追い立ててしまう

	(4)	Q3-1-6-1	Q3-1-6-2	Q3-1-6-3	Q3-1-6-4	Q3-1-6-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	70	142	137	71	4
%	100.0	16.5	33.5	32.3	16.7	0.9

■【Q3-1-7】自分なんかどうでもいいと感じることが多い

	(4)	Q3-1-7-1	Q3-1-7-2	Q3-1-7-3	Q3-1-7-4	Q3-1-7-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	55	77	123	165	4
%	100.0	13.0	18.2	29.0	38.9	0.9

■【Q3-1-8】怒りに任せて相手を非難攻撃することが多い

	(4)	Q3-1-8-1	Q3-1-8-2	Q3-1-8-3	Q3-1-8-4	Q3-1-8-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	22	91	146	162	3
%	100.0	5.2	21.5	34.4	38.2	0.7

■【Q3-1-9】ちょっとしたことで周囲との関係がこじれてしまうことが多い

	(4)	Q3-1-9-1	Q3-1-9-2	Q3-1-9-3	Q3-1-9-4	Q3-1-9-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	27	56	145	192	4
%	100.0	6.4	13.2	34.2	45.3	0.9

■【Q3-1-10】自分の淋しさや傷を分かってくれる人等、誰もいないと感じる

	(4)	Q3-1-10-1	Q3-1-10-2	Q3-1-10-3	Q3-1-10-4	Q3-1-10-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	39	75	125	182	3
%	100.0	9.2	17.7	29.5	42.9	0.7

■【Q3-1-11】大勢の中にいるより、1人きりで過ごす方が好きだ

	(4)	Q3-1-11-1	Q3-1-11-2	Q3-1-11-3	Q3-1-11-4	Q3-1-11-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	79	152	116	73	4
%	100.0	18.6	35.8	27.4	17.2	0.9

■【Q3-1-12】自分を表現したり意見を主張するのが苦手だ

	(4)	Q3-1-12-1	Q3-1-12-2	Q3-1-12-3	Q3-1-12-4	Q3-1-12-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	91	124	122	84	3
%	100.0	21.5	29.2	28.8	19.8	0.7

■【Q3-1-13】孤独感を感じる人が多い

	(4)	Q3-1-13-1	Q3-1-13-2	Q3-1-13-3	Q3-1-13-4	Q3-1-13-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	53	100	126	141	4
%	100.0	12.5	23.6	29.7	33.3	0.9

■【Q3-1-14】自分はいなくても良い存在なのではないかと感じる人が多い

	(4)	Q3-1-14-1	Q3-1-14-2	Q3-1-14-3	Q3-1-14-4	Q3-1-14-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	39	59	116	206	4
%	100.0	9.2	13.9	27.4	48.6	0.9

■【Q3-1-15】人生に生きる意味があるなんて思えないことがしばしばある

	(4)	Q3-1-15-1	Q3-1-15-2	Q3-1-15-3	Q3-1-15-4	Q3-1-15-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	21	54	94	252	3
%	100.0	5.0	12.7	22.2	59.4	0.7

■【Q3-1-16】 その場がしらけたり、気まずい雰囲気になると非常に不安を感じる

	(4)	Q3-1-16-1	Q3-1-16-2	Q3-1-16-3	Q3-1-16-4	Q3-1-16-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	60	141	117	102	4
%	100.0	14.2	33.3	27.6	24.1	0.9

■【Q3-1-17】 人と対決するのが怖い

	(4)	Q3-1-17-1	Q3-1-17-2	Q3-1-17-3	Q3-1-17-4	Q3-1-17-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	64	113	116	127	4
%	100.0	15.1	26.7	27.4	30.0	0.9

■【Q3-1-18】 「明るい」「軽い」仮面の下の本あなたの誰を分かってくれないと感じる

	(4)	Q3-1-18-1	Q3-1-18-2	Q3-1-18-3	Q3-1-18-4	Q3-1-18-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	34	90	146	150	4
%	100.0	8.0	21.2	34.4	35.4	0.9

■【Q3-1-19】 困っている人がそばにいと放っておけない

	(4)	Q3-1-19-1	Q3-1-19-2	Q3-1-19-3	Q3-1-19-4	Q3-1-19-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	102	232	70	15	5
%	100.0	24.1	54.7	16.5	3.5	1.2

■【Q3-1-20】 自分の都合より、人の都合を優先することが多い

	(4)	Q3-1-20-1	Q3-1-20-2	Q3-1-20-3	Q3-1-20-4	Q3-1-20-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	80	170	138	32	4
%	100.0	18.9	40.1	32.5	7.5	0.9

■【Q3-1-21】 自分を優先するのは、わがままでいけないことのように感じる

	(4)	Q3-1-21-1	Q3-1-21-2	Q3-1-21-3	Q3-1-21-4	Q3-1-21-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	68	175	125	51	5
%	100.0	16.0	41.3	29.5	12.0	1.2

■【Q3-1-22】 相手が何を望んでいるのか、非常に敏感に感じる取ることができる

	(4)	Q3-1-22-1	Q3-1-22-2	Q3-1-22-3	Q3-1-22-4	Q3-1-22-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	87	170	132	31	4
%	100.0	20.5	40.1	31.1	7.3	0.9

■【Q3-1-23】 自分が何をしたいのか、何を感じているのか分からなくなることが多い

	(4)	Q3-1-23-1	Q3-1-23-2	Q3-1-23-3	Q3-1-23-4	Q3-1-23-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	48	119	138	116	3
%	100.0	11.3	28.1	32.5	27.4	0.7

■【Q3-1-24】家族以外で自分の問題や気持ちについて話せる人がある

	(4)	Q3-1-24-1	Q3-1-24-2	Q3-1-24-3	Q3-1-24-4	Q3-1-24-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	185	133	61	39	6
%	100.0	43.6	31.4	14.4	9.2	1.4

■【Q3-1-25】いざという時に家族を頼ることができる

	(4)	Q3-1-25-1	Q3-1-25-2	Q3-1-25-3	Q3-1-25-4	Q3-1-25-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	197	152	45	23	7
%	100.0	46.5	35.8	10.6	5.4	1.7

■【Q3-1-26】物事はうまくいくであろうと信じている

	(4)	Q3-1-26-1	Q3-1-26-2	Q3-1-26-3	Q3-1-26-4	Q3-1-26-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	96	202	92	27	7
%	100.0	22.6	47.6	21.7	6.4	1.7

■【Q3-1-27】人が喜ぶと思うようなことをすすんでする

	(4)	Q3-1-27-1	Q3-1-27-2	Q3-1-27-3	Q3-1-27-4	Q3-1-27-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	96	227	81	14	6
%	100.0	22.6	53.5	19.1	3.3	1.4

■【Q3-1-28】すすんで新しいことを試みる方である

	(4)	Q3-1-28-1	Q3-1-28-2	Q3-1-28-3	Q3-1-28-4	Q3-1-28-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	77	151	144	44	8
%	100.0	18.2	35.6	34.0	10.4	1.9

■【Q3-1-29】物事を自分の力でやり遂げたい

	(4)	Q3-1-29-1	Q3-1-29-2	Q3-1-29-3	Q3-1-29-4	Q3-1-29-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	130	194	82	11	7
%	100.0	30.7	45.8	19.3	2.6	1.7

■【Q3-1-30】私の事を心から愛してくれる人がある

	(4)	Q3-1-30-1	Q3-1-30-2	Q3-1-30-3	Q3-1-30-4	Q3-1-30-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	195	145	62	15	7
%	100.0	46.0	34.2	14.6	3.5	1.7

■【Q3-1-31】自分のおこないが結果に影響すると思う

	(4)	Q3-1-31-1	Q3-1-31-2	Q3-1-31-3	Q3-1-31-4	Q3-1-31-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	150	200	57	8	9
%	100.0	35.4	47.2	13.4	1.9	2.1

■【Q3-1-32】自分のことが好きである

	(4)	Q3-1-32-1	Q3-1-32-2	Q3-1-32-3	Q3-1-32-4	Q3-1-32-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	105	158	107	47	7
%	100.0	24.8	37.3	25.2	11.1	1.7

■【Q3-1-33】やるべきことに集中し最後まで取り組むことができる

	(4)	Q3-1-33-1	Q3-1-33-2	Q3-1-33-3	Q3-1-33-4	Q3-1-33-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	94	202	96	24	8
%	100.0	22.2	47.6	22.6	5.7	1.9

■【Q3-1-34】人を笑わせたりおどけることが好きである

	(4)	Q3-1-34-1	Q3-1-34-2	Q3-1-34-3	Q3-1-34-4	Q3-1-34-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	96	164	116	41	7
%	100.0	22.6	38.7	27.4	9.7	1.7

■【Q3-1-35】段取りや計画を立てて物事を進めようとする

	(4)	Q3-1-35-1	Q3-1-35-2	Q3-1-35-3	Q3-1-35-4	Q3-1-35-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	119	169	101	27	8
%	100.0	28.1	39.9	23.8	6.4	1.9

■【Q3-1-36】困ったことがあると解決方法を考えようとする

	(4)	Q3-1-36-1	Q3-1-36-2	Q3-1-36-3	Q3-1-36-4	Q3-1-36-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	134	219	51	11	9
%	100.0	31.6	51.7	12.0	2.6	2.1

■【Q3-1-37】この人のようになりたいと思える人がいる

	(4)	Q3-1-37-1	Q3-1-37-2	Q3-1-37-3	Q3-1-37-4	Q3-1-37-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	142	144	88	39	11
%	100.0	33.5	34.0	20.8	9.2	2.6

3-2. あなたの友人関係を想像してください。友人は障害のある兄弟姉妹をもっておりません。そのような友人関係の中であなたにとってどのくらいあてはまりますか

■【Q3-2-1】常に自分自身の意見をもつようにしている

	(4)	Q3-2-1-1	Q3-2-1-2	Q3-2-1-3	Q3-2-1-4	Q3-2-1-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	127	187	93	9	8
%	100.0	30.0	44.1	21.9	2.1	1.9

■【Q3-2-2】仲間の中での和を維持することは大切だと思う

	(4)	Q3-2-2-1	Q3-2-2-2	Q3-2-2-3	Q3-2-2-4	Q3-2-2-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	216	177	15	9	7
%	100.0	50.9	41.7	3.5	2.1	1.7

■【Q3-2-3】自分が何をしたいのか常にわかっている

	(4)	Q3-2-3-1	Q3-2-3-2	Q3-2-3-3	Q3-2-3-4	Q3-2-3-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	63	182	145	26	8
%	100.0	14.9	42.9	34.2	6.1	1.9

■【Q3-2-4】友人から好かれることは自分にとって大切である

	(4)	Q3-2-4-1	Q3-2-4-2	Q3-2-4-3	Q3-2-4-4	Q3-2-4-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	157	201	48	10	8
%	100.0	37.0	47.4	11.3	2.4	1.9

■【Q3-2-5】自分の意見をいつもはっきり言う

	(4)	Q3-2-5-1	Q3-2-5-2	Q3-2-5-3	Q3-2-5-4	Q3-2-5-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	74	157	160	26	7
%	100.0	17.5	37.0	37.7	6.1	1.7

■【Q3-2-6】自分がどう感じるかは、自分が一緒にいる友人や自分のいる現状によって決まる

	(4)	Q3-2-6-1	Q3-2-6-2	Q3-2-6-3	Q3-2-6-4	Q3-2-6-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	74	217	91	31	11
%	100.0	17.5	51.2	21.5	7.3	2.6

■【Q3-2-7】いつも自信を持って発言し、行動している

	(4)	Q3-2-7-1	Q3-2-7-2	Q3-2-7-3	Q3-2-7-4	Q3-2-7-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	32	161	173	52	6
%	100.0	7.5	38.0	40.8	12.3	1.4

■【Q3-2-8】自分の友人と意見が対立することを避ける

	(4)	Q3-2-8-1	Q3-2-8-2	Q3-2-8-3	Q3-2-8-4	Q3-2-8-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	73	188	125	31	7
%	100.0	17.2	44.3	29.5	7.3	1.7

■【Q3-2-9】一番最良の決断は、自分自身で考えたものであると思う

	(4)	Q3-2-9-1	Q3-2-9-2	Q3-2-9-3	Q3-2-9-4	Q3-2-9-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	96	151	141	27	9
%	100.0	22.6	35.6	33.3	6.4	2.1

■【Q3-2-10】友人と意見が対立したとき、相手の意見を受け入れることが多い

	(4)	Q3-2-10-1	Q3-2-10-2	Q3-2-10-3	Q3-2-10-4	Q3-2-10-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	40	217	134	24	9
%	100.0	9.4	51.2	31.6	5.7	2.1

■【Q3-2-11】自分でいいと思うのならば、他の人が自分の考えを何と思うと気にしない

	(4)	Q3-2-11-1	Q3-2-11-2	Q3-2-11-3	Q3-2-11-4	Q3-2-11-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	39	107	201	70	7
%	100.0	9.2	25.2	47.4	16.5	1.7

■【Q3-2-12】友人やその場の状況によって、自分の態度や行動を変えることがある

	(4)	Q3-2-12-1	Q3-2-12-2	Q3-2-12-3	Q3-2-12-4	Q3-2-12-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	78	221	97	20	8
%	100.0	18.4	52.1	22.9	4.7	1.9

■【Q3-2-13】友人が異なった考えを持っていても、自分の信じるところを守り通す

	(4)	Q3-2-13-1	Q3-2-13-2	Q3-2-13-3	Q3-2-13-4	Q3-2-13-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	55	212	129	22	6
%	100.0	13.0	50.0	30.4	5.2	1.4

■【Q3-2-14】友人が自分をどう思っているかを気にする

	(4)	Q3-2-14-1	Q3-2-14-2	Q3-2-14-3	Q3-2-14-4	Q3-2-14-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	86	196	101	32	9
%	100.0	20.3	46.2	23.8	7.5	2.1

■【Q3-2-15】たいていは自分ひとりで物事を決断する

	(4)	Q3-2-15-1	Q3-2-15-2	Q3-2-15-3	Q3-2-15-4	Q3-2-15-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	92	185	116	24	7
%	100.0	21.7	43.6	27.4	5.7	1.7

■【Q3-2-16】何か行動する時、結果を予測して不安になりなかなか実行に移せないことがある

	(4)	Q3-2-16-1	Q3-2-16-2	Q3-2-16-3	Q3-2-16-4	Q3-2-16-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	80	152	142	44	6
%	100.0	18.9	35.8	33.5	10.4	1.4

■【Q3-2-17】良いか悪いかは自分がそれをどう考えるかで決まると思う

	(4)	Q3-2-17-1	Q3-2-17-2	Q3-2-17-3	Q3-2-17-4	Q3-2-17-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	113	222	65	17	7
%	100.0	26.7	52.4	15.3	4.0	1.7

■【Q3-2-18】友人は自分のことをどう評価しているかと他人の視線が気になる

	(4)	Q3-2-18-1	Q3-2-18-2	Q3-2-18-3	Q3-2-18-4	Q3-2-18-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	78	183	107	48	8
%	100.0	18.4	43.2	25.2	11.3	1.9

■【Q3-2-19】自分の考えや行動が友人と違っていても気にならない

	(4)	Q3-2-19-1	Q3-2-19-2	Q3-2-19-3	Q3-2-19-4	Q3-2-19-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	46	151	178	43	6
%	100.0	10.8	35.6	42.0	10.1	1.4

■【Q3-2-20】自分の考えや行動が友人との間の関係や地位が気になる

	(4)	Q3-2-20-1	Q3-2-20-2	Q3-2-20-3	Q3-2-20-4	Q3-2-20-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	28	122	158	107	9
%	100.0	6.6	28.8	37.3	25.2	2.1

3-3 次の特徴について、あなた自身にどの程度あてはまるかお答え下さい。
あなたが、あなた自身をどう思っているか、お答え下さい。

■【Q3-3-1】少なくとも人並みには価値のある人間である

	(4)	Q3-3-1-1	Q3-3-1-2	Q3-3-1-3	Q3-3-1-4	Q3-3-1-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	125	210	65	17	7
%	100.0	29.5	49.5	15.3	4.0	1.7

■【Q3-3-2】自分は色々な良い素質をもっている

	(4)	Q3-3-2-1	Q3-3-2-2	Q3-3-2-3	Q3-3-2-4	Q3-3-2-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	90	201	99	27	7
%	100.0	21.2	47.4	23.3	6.4	1.7

■【Q3-3-3】敗北者だと思ふことがある

	(4)	Q3-3-3-1	Q3-3-3-2	Q3-3-3-3	Q3-3-3-4	Q3-3-3-5
	全 体	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	不明
件 数	424	34	90	142	152	6
%	100.0	8.0	21.2	33.5	35.8	1.4

■【Q3-3-4】自分は物事を人並みにはうまくやれる

	(4)	Q3-3-4-1	Q3-3-4-2	Q3-3-4-3	Q3-3-4-4	Q3-3-4-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	87	213	90	25	9
%	100.0	20.5	50.2	21.2	5.9	2.1

■【Q3-3-5】自分には自慢できるところがない

	(4)	Q3-3-5-1	Q3-3-5-2	Q3-3-5-3	Q3-3-5-4	Q3-3-5-5
	全 体	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	不明
件 数	424	44	104	161	107	8
%	100.0	10.4	24.5	38.0	25.2	1.9

■【Q3-3-6】自分に対して肯定的である

	(4)	Q3-3-6-1	Q3-3-6-2	Q3-3-6-3	Q3-3-6-4	Q3-3-6-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	65	166	135	47	11
%	100.0	15.3	39.2	31.8	11.1	2.6

■【Q3-3-7】だいたいにおいて、自分に満足している

	(4)	Q3-3-7-1	Q3-3-7-2	Q3-3-7-3	Q3-3-7-4	Q3-3-7-5
	全 体	あてはまる	ややあてはまる	ややあてはまらない	あてはまらない	不明
件 数	424	61	170	125	59	9
%	100.0	14.4	40.1	29.5	13.9	2.1

■【Q3-3-8】もっと自分自身を尊敬できるようになりたい

	(4)	Q3-3-8-1	Q3-3-8-2	Q3-3-8-3	Q3-3-8-4	Q3-3-8-5
	全 体	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	不明
件 数	424	127	173	91	23	10
%	100.0	30.0	40.8	21.5	5.4	2.4

■【Q3-3-9】自分は全くだめな人間だと思うことがある

	(4)	Q3-3-9-1	Q3-3-9-2	Q3-3-9-3	Q3-3-9-4	Q3-3-9-5
	全 体	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	不明
件 数	424	60	98	125	133	8
%	100.0	14.2	23.1	29.5	31.4	1.9

■【Q3-3-10】何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う

	(4)	Q3-3-10-1	Q3-3-10-2	Q3-3-10-3	Q3-3-10-4	Q3-3-10-5
	全 体	あてはまらない	ややあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	不明
件 数	424	34	60	162	160	8
%	100.0	8.0	14.2	38.2	37.7	1.9

4. あなたは、次のことにどの程度満足していますか

■【Q4-1】今までの人生全体について

	(4)	Q4-1-1	Q4-1-2	Q4-1-3	Q4-1-4	Q4-1-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	48	254	97	17	8
%	100.0	11.3	59.9	22.9	4.0	1.9

■【Q4-2】現在の仕事について（学校）

	(4)	Q4-2-1	Q4-2-2	Q4-2-3	Q4-2-4	Q4-2-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	67	227	90	29	11
%	100.0	15.8	53.5	21.2	6.8	2.6

■【Q4-3】自分の性格

	(4)	Q4-3-1	Q4-3-2	Q4-3-3	Q4-3-4	Q4-3-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	17	238	122	39	8
%	100.0	4.0	56.1	28.8	9.2	1.9

■【Q4-4】実父との関係

	(4)	Q4-4-1	Q4-4-2	Q4-4-3	Q4-4-4	Q4-4-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	109	183	74	42	16
%	100.0	25.7	43.2	17.5	9.9	3.8

■【Q4-5】実母との関係

	(4)	Q4-5-1	Q4-5-2	Q4-5-3	Q4-5-4	Q4-5-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	147	201	40	28	8
%	100.0	34.7	47.4	9.4	6.6	1.9

■【Q4-6】障害のある兄弟姉妹との関係

	(4)	Q4-6-1	Q4-6-2	Q4-6-3	Q4-6-4	Q4-6-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	107	213	71	27	6
%	100.0	25.2	50.2	16.7	6.4	1.4

■【Q4-7】友だちとの関係

	(4)	Q4-7-1	Q4-7-2	Q4-7-3	Q4-7-4	Q4-7-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	108	246	46	16	8
%	100.0	25.5	58.0	10.8	3.8	1.9

■【Q4-8】配偶者との関係

	(4)	Q4-8-1	Q4-8-2	Q4-8-3	Q4-8-4	Q4-8-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	68	106	16	7	227
%	100.0	16.0	25.0	3.8	1.7	53.5

■【Q4-9】子どもとの関係

	(4)	Q4-9-1	Q4-9-2	Q4-9-3	Q4-9-4	Q4-9-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	74	70	12	5	263
%	100.0	17.5	16.5	2.8	1.2	62.0

■【Q4-10】自分が住んでいる地域（場所）

	(4)	Q4-10-1	Q4-10-2	Q4-10-3	Q4-10-4	Q4-10-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	111	236	56	16	5
%	100.0	26.2	55.7	13.2	3.8	1.2

■【Q4-11】日本の社会

	(4)	Q4-11-1	Q4-11-2	Q4-11-3	Q4-11-4	Q4-11-5
	全 体	とても満足している	まあ満足している	あまり満足していない	ぜんぜん満足していない	不明
件 数	424	5	131	184	97	7
%	100.0	1.2	30.9	43.4	22.9	1.7

■【Q5】あなたは小学生の頃、兄弟姉妹に障害があることで困ったり、または悩んだりしたことがありますか

	(4)	Q5-1	Q5-2	Q5-3	Q5-4	Q5-5
	全 体	よくあった	ときどきあった	あまりなかった	ぜんぜんなかった	不明
件 数	424	77	149	135	50	13
%	100.0	18.2	35.1	31.8	11.8	3.1

■【Q6】現在、障害のある兄弟姉妹のことで、困っていることはありますか

	(2)	Q6-1	Q6-2	Q6-3
	全 体	ある	ない	不明
件 数	424	190	214	20
%	100.0	44.8	50.5	4.7

■【Q7】現在、障害のある兄弟姉妹がいることで良かったと思うことはありますか

	(2)	Q7-1	Q7-2	Q7-3
	全 体	ある	ない	不明
件 数	424	288	118	18
%	100.0	67.9	27.8	4.2

8. 障害のある兄弟姉妹がいることで、あなたの人生に影響がったと思うことを教えてください

■【Q8-1】進路について

	(2)	Q8-1-1	Q8-1-2	Q8-1-3
	全 体	影響があった	影響がなかった	不明
件 数	424	145	267	12
%	100.0	34.2	63.0	2.8

■【Q8-2】就職について

	(2)	Q8-2-1	Q8-2-2	Q8-2-3
	全 体	影響があった	影響がなかった	不明
件 数	424	123	268	33
%	100.0	29.0	63.2	7.8

■【Q8-3】結婚について

	(2)	Q8-3-1	Q8-3-2	Q8-3-3
	全 体	影響があった	影響がなかった	不明
件 数	424	127	148	149
%	100.0	30.0	34.9	35.1

■【Q8-4】その他

	(2)	Q8-4-1	Q8-4-2	Q8-4-3
	全 体	影響があった	影響がなかった	不明
件 数	424	78	97	249
%	100.0	18.4	22.9	58.7

■【Q9】あなたが小学生の頃、障害のある兄弟姉妹について友人に話しましたか

	(2)	Q9-1	Q9-2	Q9-3
	全 体	話した	話さなかった	不明
件 数	424	191	214	19
%	100.0	45.0	50.5	4.5

■【Q10】現在、障害のある兄弟姉妹について友人に話しますか

	(2)	Q10-1	Q10-2	Q10-3
	全 体	話す	話さない	不明
件 数	424	273	136	15
%	100.0	64.4	32.1	3.5

■【Q11】小学生の頃、障害のある兄弟姉妹の面倒を見なくてはならないと感じていましたか

	(4)	Q11-1	Q11-2	Q11-3	Q11-4	Q11-5
	全 体	すごく感じていた	少し感じていた	あまり感じなかった	ぜんぜん感じなかった	不明
件 数	424	128	178	64	42	12
%	100.0	30.2	42.0	15.1	9.9	2.8

12. 親が障害のある兄弟姉妹の介護や面倒が見れなくなった場合のことについて伺います

■【Q12-1】あなたはそのことについて親と話し合っていますか

	(4)	Q12-1-1	Q12-1-2	Q12-1-3	Q12-1-4	Q12-1-5
	全 体	よく話す	ときどき話す	あまり話さない	ぜんぜん話さない	不明
件 数	424	46	192	115	55	16
%	100.0	10.8	45.3	27.1	13.0	3.8

■【Q12-2】兄弟姉妹の介護や面倒をみますか

	(6)	Q12-2-1	Q12-2-2	Q12-2-3	Q12-2-4	Q12-2-5	Q12-2-6	Q12-2-7
	全 体	必要がない	自分がみるつもりだ	他の兄弟がみるつもりだ	施設入所を検討	既に施設だが、後見人になるつもりだ	わからない	不明
件 数	424	31	110	9	58	84	102	30
%	100.0	7.3	25.9	2.1	13.7	19.8	24.1	7.1

■【Q12-3】そのことについて不安を感じていますか

	(4)	Q12-3-1	Q12-3-2	Q12-3-3	Q12-3-4	Q12-3-5
	全 体	すごくある	少しある	あまりない	ぜんぜんない	不明
件 数	424	111	209	63	23	18
%	100.0	26.2	49.3	14.9	5.4	4.2

■【Q13】障害のある兄弟姉妹が自立自活（施設の利用も含む）をするために必要な手段やサポートを知っていますか

	(4)	Q13-1	Q13-2	Q13-3	Q13-4	Q13-5
	全 体	知っている	だいたい知っている	あまり知らない	まったく知らない	不明
件 数	424	56	121	169	59	19
%	100.0	13.2	28.5	39.9	13.9	4.5

■【Q13-1】そのような情報を得たことで、将来の負担感は軽減しましたか

	(4)	Q13-1-1	Q13-1-2	Q13-1-3	Q13-1-4	Q13-1-5	Q13-1-6
	全 体	とてもした	少しした	あまりしない	全くしない	不明	非該当
件 数	424	25	74	61	11	6	247
%	100.0	5.9	17.5	14.4	2.6	1.4	58.3

■研究会委員（調査・分析メンバー）

伊藤 逞子 社団法人神奈川学習障害教育研究協会

啓発グループ学校支援チームチームリーダー

植木きよみ 当基金理事、元社団法人神奈川学習障害教育研究協会 常務理事

加瀬みずき 東京都立墨田特別支援学校教諭、全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会

河村真千子 東京大学経済学部経済学研究科READ特任研究員、

全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会

小松 忠 全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会

林 浩三 全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会事務局長

吉川かおり 当基金評議員、明星大学准教授、きょうだい支援の会

アドバイザー： 末盛 慶 日本福祉大学准教授

【執筆担当】

序章	伊藤逞子
第1部第1章	吉川かおり
第2章第1節	吉川かおり
第2章第2節	河村真千子
第3章第1節	加瀬みずき
第3章第2節	林 浩三
第3章第3節	加瀬みずき
第3章第4節	植木きよみ
第3章第5節	植木きよみ、吉川かおり
課題と方向性	吉川かおり

【関連団体連絡先、参考図書】

- ・全国障害者とともに歩む兄弟姉妹の会 電話03-5634-8790 <http://www.normanet.ne.jp/~kyodai/>
 - ・NPO法人フリースペースたまりば 電話044-833-7562 <http://www.tamariba.org/>
 - ・社団法人神奈川学習障害教育研究協会 電話045-984-7910 <http://www.246.ne.jp/~kanald/menu.html>
 - ・きょうだい支援の会 連絡先ssgj-news-owner@yahooogroups.jp http://www.geocities.jp/ssgj_tokyo/
 - ・西野博之著「居場所のちからー生きてるだけすごいでー」教育史料出版会
 - ・水澤都加佐著「わたしの家族はどこかへん？・・・機能不全家族で育つ・暮らす」株式会社大月書店
-

障害のある人のきょうだいへの調査報告書

平成19年度障害者の家族支援を目指すための調査研究Ⅱ

～特に支援支援体制が遅れているきょうだいへの支援を視野に入れて～

発行：平成 20 年 6 月

企画・編集：財団法人国際障害者年記念ナイスハート基金

問合せ先： 〒 105-0022 東京都港区海岸 1-4-26 ゆうらいふセンター

電話：03-3434-2170 FAX：03-5401-0681

URL: <http://www.niceheart.or.jp> info@niceheart.or.jp

この調査研究の実施および本報告書の発行にあたっては、社会福祉法人社会福祉事業研究開発協会より助成をいただきました
